

共三百文遣すはしめて來る事故に飯にても給候へとて別に百文遣す是は御奉行さま故無餘義次第なるへし○きりくすをかこへ入しをみてうきになくかたまのなかのきりくすおのか聲をや今うらむらむ昨日人の短尺もとめければ蓮といふ題にて

はなのうちに實をも結ひてはちす葉のあたならずさくこゝろをもみつと書しに柳助か難してはちすとはかりならはよからめにはちす葉とよみかけて花を賞することはきかすといふよつて手元にあるものをみるにさしあたり證歌なしめつたなるものをもやりかねて止ぬ頃日柳助かかやり火の烟といふ歌をよみければけふりけふるなどゝはいふへけれどもけふといふことをきかすけふとめは御成先の御道筋なるへしなとされこといひしにけふは又かれかかくいひしかは戯に

はちす葉の濁の露をあらはるゝこれやかやりのけふり返しかといひ遣ければ返しに

はちす葉のはなのけしめやいかならむけにかやり火のけふはつたなしと書越したり○春中花なとくれたる町人共のことく物遣して返禮せしに例のうたよみは上とうはつゝみして短尺壹枚を禮として差出たり開きみれば

いや高き檜の廣葉の露ちりてうれしなみたそ袖にあらそふ

とあり夫を勝手方役所迄出したりよほとよくよむとみえたり前の蓮葉のされ歌はおさとの代詠せし也同人病氣已來少も歌よめす今日はしめて也○十六日 くもりおりく雨八十五度也 けふも平臥なれ共午後快よし褥上にて書見いたす少々の風邪なれ共例の足ひゆる症の發れり是は母上よりの御讓也

○十七日 くもりおりく雨八十五度 けふは大に快先ひけをそり髪を結ひたり月代は遠國故おそれてすらす○此ほとみなく百姓のことし作物計にかゝり居る也是はいつれも野菜にこまる故也戯に

ほととぎすなくよりまれの瓜茄子ひ高きねをのみ雲井にそきく
終日はたけにくたひれてぶたれたるかことくに成焼酎をのみてねたりと
いふものあり高き日傭になるへし

○十八日 くもりおりく雨八十五度也 ○庭のうちに柿の木多しこと
しはみつかす去年多なりたる故といふ也壹本去年もなりことしも夥成た
り是は澁かき也澁かきにふさかり年なしといふ也もみちありめたしより
五月のけふまで常にはなよりも紅に紅葉する也さて常に落葉すること
はるも今も同じこと也されは陽陰互に根と成て雨盛ふることにはなき也是
天地のこゝろなるへし天地のこゝろをしりなから雨其身はかりよく盛の
みあれとおもふはいかに威南塘か人は苦蟲といひしはおもしろし何事も
天地にまかせ苦蟲の苦を人間の役とおもひてつとむるにしかしとおもふ
也○西大寺の古銅器のおしかた取らむとてかり置しにある人のいひしは
此物當時もて什物にはあらず至近く土中より出しものなれば買上にし

て可然といひければわか古物を折々愛翫するといふは只いにしへの人の
質朴にしてこゝろを用ゆるの至深切なるをみて後世の薄く成行こゝろ
のいましめとするまで也器は新をす脱アルカと書經にもいふにはあらずやよつて
試にみよ卓の上にも何にも古きのみを好みて用ひしはあらずといひてこ
ゝろのうちにはこはけしからぬ事哉とおもひければすくに西大寺に返した
り尙おもへはもしや寺僧の金にかえて古銅の火の多きといふ江戸などに
出して焼失なふことのあらは可憐とこととおもひければ古銅をよく圖し
て御役所の記録にも留以後我等は轉役しても巡見の者のあらむ時には必
す見すへき寶物のうちに加へて永世西大寺の重器とせよとの事與力共に
かゝせてもとしたりこれは六七日前のこと也きのふ同心共を大坂へ遣し
て歸りしの話には竊に大坂へ僧の持出せしに八百兩までに價せしものあ
りたるにうらさりしに尙價をまして千兩に買はむとまでいひしよし也已
前夏とか般とかの笏とか爵とかの賣物水府にて三百兩までに望まれしを

大坂の大商か七百兩にふかひしこともあれば偽と計もおもはぬ也
 ○十九日 晴七十八度 きのふ植村より鮎の鮎をくれたり鮎屋の名吉野郡下
 市御すしや彌助とあり来る廿一二日頃との札あれ共尾州すしの類なるへ
 しとおもひければ直に開たりきのふ頃漬たりとみえくさくなしこれは淨
 瑠璃本にいふ維盛を婿にせしといふ鮎やなるへし至る舊家のよし也此す
 し京攝等ねも高名にふ此ほとは日々一石宛のすしをひさくといふいか成
 下直なるも一桶七匁五分より下直なるはなしといふ也さほとに美成もの
 にはあらぬ也けふ留役の瀧澤氏の侍つとめたるもの來る是はならへ參る
 時具足の宰領にして來りしもの也奈良より七里はかり成所の御料所へ百
 姓にふ作男の二人も遣ふもの也一旦出府してこの春迄瀧澤にさふらひ勤
 居歸國の時わか供に成上りし也よきものとみえ厚く瀧澤の恩に感じ居
 同人方にて暇くるゝ時貫ひし麻上下を大切に於て寶物にしておくよし也
 遠國ものは直なればめつた成事は出來ぬ也予ねも右へ縁に於鎮守の神へ

郡山城に主付
 京出に付
 人進あり
 山注あり
 郡山あり
 三里あり
 戸山あり
 消火に鎌倉
 け火に三火
 不滅といふ
 阿房の火事
 ならぬ事
 け合はぬ
 け合はぬ

まいらせるもちを搗たりとて吳たり八寸の重まき繪立派なること也もち
 は丸菱をいたるもちにて青柚をいたるきなこを附て食ふ也われ奉行
 中は出入事に於居ならば立入はならずと民藏かいひしに奉公人もあれ
 は自然出入も出来るなれ共祖父代へ今に南都の奉行所の鬨をこえしこと
 なしわれか恩を謝する故にこそ來りけれといひよし也
 ○廿日 晴 茄子などあまりに高き故にぶはさみにてとりみしにかねさ
 し壹寸の茄子十に付二十五文也といふけしからぬ事也江戸の茄子は如土
 奈良の茄子は如玉○四頃に至り京都大火昨初夜よりへ出火に於今以焼居
 候とへ風聞に於大に騒く八時過注進あり京都四條のみせ物小屋へ出火昨夜
 亥刻へ今朝五時頃にいたりまた鎮火せすとへ事也凡十町はかりも焼候
 由更に風なきに一夜かゝり十町焼くるを消留ぬも火の足ののろきもみな
 風等によるなるへし○俊藏方の小女奈良の在のものに於利口なるものへ
 由もとより一天下に奈良程の所はあらぬ心得に付大佛は江戸にもあらず

春日は檜わ
た葺六尺四
方ほとの三
塗の御社給
社ならひ給
へり上の方
の神みなこ
の體也

世海第一也といふことをいひ出して誇るよし夫に良右衛門か戯いへはい
たくいかる也春日社のほとものは江戸にもあらしといふ故に江戸にはか
ゝる社は百萬もあるへし江戸のうら店の塵庫と雪隠の間にあるいなり社
はみなかくの如しといひければ大に怒り良右衛門の偽今にはしめす江戸
のみちはひろし奈良も京都も狭なといふ故にまこととおもひしに池田か供
して歸りしものゝ話をきくに江戸のみちに狭きかあるといふ也其偽久敷
ものといひければ偽とおもふは知らぬ故也よく考みよ御奉行様は千石の
御高也それにもあからさまの御出にも鍵壹本は御もたせある也まして
春日の御祭等事立たる時は對の御道具中御道具共に五本まで爲御持なさ
るゝにはあらずや然るに松平加賀守は百萬石也されはかゝる大諸侯のは
れなる供立の鍵數御奉行の高と鍵との數にくらへておもふへきことなら
すや然るに五十萬石七十萬石其外大諸侯の正月の行かふさま是をたとふ
るに大名のませ肴か行列して歩行にも似たり其時に十間二十間のみちなら

むには肩より肩を傳へ頭より頭を踏みていやか上にかさならねは歩行のな
らぬわけ也わか偽いふことはしらはらくさし置ぬ御奉行の鍵の數と加賀の
百萬石は奈良のものもよく知る所也よくこゝろして考みよといひければけ
にもと感服したりと也一を知り二を知らぬものか外國のことなどの誇言を
きく時は必かゝることあるへき也此事少なることといへ共外國の人の物語
を聞外國の書をみるにはこゝろ得にもなるへき也○法隆寺に寺務御拜堂之
事といふ文保元亨頃の帳面あり○嚮應事飯白一長汁一ムシ菜七種ハス牛房
ク慈仙コフ大居肴ハス菓物者折敷昏ヲシキテ小餅五赤餅少々栗柿柑子橘六
物具之毛立餅曾水毛立慈仙餅菓物ト云ニハアラス綾被物各一重代一貫生絹四丈各一
宛代九白布各二端代八○この直段至る今よりは安くみゆ錢の至る少き故か
○毛立と書しもあり○其外酒といふ脇書に至極と註せし所あり今の後段
つまり肴といふ類か不分○別當記といふもの三冊あり弘長元年九月四日

後嵯峨の院 御幸のことをしるして 御幸午刻 院は御輿公卿は騎馬自南大門内手輿御所とあり是はちり取と後世いふものにや高野山の御條目に何々はいつ方ちり取に乘可申とを御定ありてわか調役たりし頃不解してありけるか今きくに伊勢の長官かもとに古きちり取手輿といふものあり屋根ありてくろ漆を以塗川越しのれん臺といふものに似たりと定る春日にもあるへしとおもひて聞しにちり取手くるまといふものあり是は屋根もあらぬれん臺に似たるものに宮などの御肩輿等にめしかたき所をめすもの也といふ也則こゝにいふ手輿なるへし其かたちの手輕にてちり取に似たれば後世ちり取手こしのなを附たるを高野山の御條目には又一轉してちり取とはかり被成たるにて其實は只手こしとか手くるまといふへきものにあらずや高野山の物をみたきもの也○此書憲信僧正か代のことを記せしに元徳三年七月四日の條の末に公家物怪天下兵亂云々同年八月廿四日當帝京ヲ御出次日東大寺院東南入御同日ワツカへ御入同廿七日笠置

寺入御日本國動亂之始是也

○廿一日 くもり八十八度半よ
るもあつし

例之通十一日より喫茶はせしなれ共鳴物

停止中に付十七日の拜はいたさす又十九日より喫茶にしてけふ十七日のかはりに拜いたす積に朝起出て興風法隆寺阿彌陀院にある黃門光國くわんこく卿より賜ふよしを寺僧かたり傳ふるよしの駿府政事録をみるに慶長十九年十一月十五日之條をみるに十五日卯刻大御所二條城御進發木津着御依挾御旅館俄奈良渡御奈良奉行中坊左近獻御膳一乘院大乘院喜多院春日禰宜爲御迎出途中とあり同十六日法隆寺阿彌陀院御止宿同十七日住吉に御着陣也駿府政事録は實記なるにかくしるしあれば今迄は此役宅は 東照宮の 御止宿を臈けにき居しかまことなることにて今の表の居間などいふもの假の 御寢殿にはあらずやおもへはいとくかしこしよつていふ和州立野村に安村喜右衛門といふのも立田本宮の社人にして大和川の船支配のことする百姓ありて其由緒のことを文政二年の頃評定所一座懸

す生を養ふ故に養生たけ外の養生せぬものより強みある也人は養生のこ
とみなわか欲を恣にする爲にする故にこれを譬るに錢遣ひのあらきもの
か錢の自由なる役に成却る大借に陥ると同じことにて元來欲のためです
る養生故に養生くひなとするそのこゝろゆるみにて養生に三分の補ある
と必七分の費あれば是非に短命ならては不叶わけ也よつておもふに養生
の第一は欲を減するにしかすとおもふ也壯強のものゝ酒色の欲第一夫よ
り金錢官祿引續たる不養生の道具也其次はかようにしたきとおもひねこ
うこと不養生と成也たとへは 母上などの朝夕に左衛門尉はいかにおさ
と市三郎はいかにと思召の過ると必大不養生の種にて兼る御信心にて仰ら
るゝ菩提心を傷る也されとも思召ましくとは道理にはつれたること故に
申上す候思召出さるゝ時は早く常に御信心の法華經をよみ給ふか夫にて
も忘れかぬるときは御佛參よかるへし都而こゝろにこうとおもへは其こ
と必五臟六腑之内の力をもちこりと成也夫は烟もすゝと成水も水あかの

あるかことく也日々に重きものをもては夫丈は手足か肩かへ力こぶの出
來ることくはらのこりと成故に不養生に成也なるへくは 母上の常々に
おもひこることのあらせられぬ様にいたし度是養生にも菩提心にも必よ
き也

○廿三日 晴 夕かたそめ榮ほうをつれ來る凡は六七日に一度つゝ來る
也おさとより 母上より御ふみごとにそめ榮ほうのことつはらに被仰下
さるゝよしくはしく申聞する例の篤實家故ことにありかたかる筆のよく
廻るならば御受申上たけれども心にまかせぬ由等いふ也○御役所附々大
工に惣吉といふものあり何もかもする也よき男に而從來奉行の押に出る
もの也よつておさとか夫か孫にはらかけやらむとて彼是といふなれとも
縮緬類のならぬ法はよく土地々もの守り居故奉行よりやられすよつて紅
の緋に文あるをもてはらかけの紐等をつくり遣したり○奈良にもよきこ
とありのみは少もをらぬ也けふわれに一ツ居たりみなめつらしかる也こ

れは苦中の一樂なるへし

○廿四日 晴 千種三位有功卿にこたひ 孝仁天皇の崩玉ひしによりて御歌のありしやと人の問ければ何の御答もあらて涙にむせひなから

崩れつる高根の雪に驚てまた音もたてぬ谷の鶯

と答られけるよしまことにや此卿官家の人には珍敷豪邁不羈の生質にてうたよむにも草案もせずおもひ出るまゝをあり合せたるものにかゝれるよし也御弟子と成りしものゝ詠草は一覽ありしまゝにて捨ありて點はさら也直しなといふ事もなしおもひのまゝの人なれはいろゝのものに歌をもかゝれけるとて堂上にては彼是いふものもあるとはなし也拙けれとも短刀など鍛せられしをみし也

○廿五日 晴 此ほと九十度のあつさなるへしあつさにて更にねかぬることもある也一乘院宮御覽被成度由に付寒暖昇降を入御覽置たればしれす○此ほと茄子の菜園なりはしめてよほとゝるゝなくさみに成て朝々に

女共つれておさとか菜園へ行一日に三十はかりつゝは必とるゝ也きうりねきをもうへてこれも用に立也當時の茄子は巾着といふにあらされは長茄子にて江戸の如きよき姿の茄子はなしぬか漬も關東ならては味よきには逢かぬることなるへし○こゝのまむし多きは恐るゝ也けふも馬場にて宗次郎か見出しうちより裂てかはやにせしといふ眼は痢のくすり也とてゑいあいとして給たりゑいかちいゝにあとふつけて給たりとてはなすもおかしき也まむしは反鼻也いにしへは夫よりヘンピとてくち繩と唱の混し今はへみくちなはみな一物と成たりへみを反鼻の轉するといふ説よからぬよしに本居宣長は唐のことを日本にて用ゆるといふことを嫌ふ故にいふなれ共正く今きそのものは蛇をヘンピといふ也

○廿六日 晴 此頃のあつさ殊に甚し江戸ものみな困る也醫者の來ける故に暑のくるしきことをいひしに毎々の奉行ならの暑に困むは常の事也本多淡路守大病のときに江戸ならば死するにはあらねと此暑にて叶はぬ

といはれしと語りき病は脚氣にていたく腫たりの事故と脱カに暑にはあらさり
けり遠國にて痢病傷寒脚氣の類にて強き症にてはとても叶はぬ也可恐事
也○よる五過にさふらひ共外庭にてさわく故にきり戸を開きみしにみな
紺たひに下駄をはき手くりに挑灯をもちはしる也是はよる鹿は數百の鹿
不殘興福寺の境内に歸れるかいかにしてか二疋のこりて屋敷内に居し故
にこのさわき也鹿を追ふに木切にても持ことをわれ禁し置故にみな空拳
をあけて追ふ也可憐暑中をも不厭つくり置たる茄子まめなど更になしみ
な食つくされて數日の骨折夢の間に無になる也よつてかくはさわく也下
駄をはき紺足袋をはくはまむしを恐る也けに百姓共もこのことをいたく歎
くなれ共神鹿のこと故にあらはにもいひ出ぬ也家來等か夢の間にみなくは
れしとてなくに百姓の歎おもひやる也○きのふ與力共か後能の時の置臺の
不用なるか多しとて二ツ越したり夫は筵をしかせて暮頃しはし息をつき居
たるに御用狀參りたるのこと也夫といひて開きみるに閏月十四日附に

新家の妻病死のこと申來る兼而不治の症みゆることは去年の夏ころよりあ
らはれければ治療に手をつくしたることにてこの二月暇乞に行けるときの
貞はせとてもおもひければ御用狀のたひにいかにかにかとおもひ居
しに一ひらの法號と成へしとはおもへはかなき事にそと今更の露おもひ
まうけぬことの如くみなうちよりて袖ぬらし病の床にてわかれつけしこと
をいひ出てくりかへしくいふさまは記すへくもあらずやかて用人共給人
共にいたるまてみな機嫌聞として出近習共以下は用人共迄機嫌を聞也今日
より五日家來共は物靜にせよといひしらせしよし用人共申聞る也○茂兵衛
か今日記用書一覽不相替行届末文に三卿方の藥取なしとはよほと氣のき
たる認方也例なから筆才ある翁也○五月廿五日に幸三郎か 母上は御灸事
申上候由段々深切之御孝行申上候而悦服也○歸り候夢など見候得は必三四
日之内便ありと奇なり深切の届故なるへし○奈良團扇の御詠感吟其返歌
を先便日記に申進候定る此ほと御覽と存候是も又一奇也○八日九日之冷

氣ならては更に相違候而驚入申候定而十六七日未大暑に相成候義と相察申候奈良は雷鳴時々雨も有之烈暑に而作方近頃の豊作と被察申候○平賀結構隱徳の家殊に當人貞實御尤と悦服候○西行貫之之眞蹟追而寫御たのみ可申候五日の日暈ならには不相見候○靈芝の目貫御承知之由右之後尙又小柄之形之義申進候定而新右衛門此ほと御承知と存候○安齋隨筆御求之由御浦山敷候○新右衛門方彌吉參り段々御心入之御馳走千萬々々忝候一瓶御携に而母上を御慰之由何寄之事也幸三郎新右衛門ともよくいたし母上様は御高運也○幸三郎被越候ふち一覽江戸をはなれ候而初而如此ものを見申候圖は福祿封候をおもしろくかた取候ものにも別而大慶右に取極可申候○彌吉之文通之内中村弟子と歟酒井弟子と歟某の事中村先生より話有之候哉忘れ申候其上此ヶ條に書損らしき所よめ兼候而旁相分り不申候此頃手習有之候哉書體常より一層奔龍騰蛇の體をあらはし候而一體善書等彼是以讀かね候事多候遠國狀は今少委敷且誤字落字等無之

日留せし記
申遣候に
間道中へ
夏も揃へ
一すなは
案なせし
まなせし
ひなせし
れぬは
らぬは
少の論中
らすの論中

様よみかへし候而被遣候様奉存候上に好み候ものあれは下夫よりも甚敷ものありといひ父讐を報すれば子人を殺とも承り候我等文通等よめ不申候而所々を叱りを受候義多候而困既に水野若狭はかたかなにて及文通候戲も有之候處彌吉は遙に父にまさりたるか如し昔あまり所々をこいとを聞候時に張思叔か坐右銘に字畫必楷正とみえたるを心にとめしか不遠破れ候而當時の如し何卒彌吉之書體から様之草書體以後は御無用たるへし彌吉や手のよめぬ事我に過たり考よむ所なしと可申歟呵々○けふは明日之御用日之目安五十六口あり其外追訴あり目安一覽に二時はかり懸り切也與力共等と談判等手數相懸る田舎にも御用ある不審なるもの也○彌吉文通之内に根を廻したる植木の答に親木にわかれたる若木のうらさひしかるこゝろ察せよとは尤也とおさとゝかたりぬ

○廿七日 晴 けふより土用なれ共きのふ八半時頃より生駒山のかたかきくもり鳴神の音する故にしめりもあれと築山は登りみしにけしからす

巡見の頃の
直し一巻と漸
直して今便と
遣し候直し
一覽候へ

光りしか七頃より雷ははつかなれ共雨はよほとふりてくれくよりよく
はれたれは朝はすしく覺ゆ雷さまは地の底にといふ歌に似たるをよみ
たり

鳴神はあらて日ことの黄昏に庭をうるほす夕立もかな

○廿八日 雨 少々しのみよし○昨八時過より雷氣ありてよほと鳴け
れともおさと奈良已來あまり雷を不恐故畑に居たりしかひかり強成たれ
はさすか堪かねてかけ歸り來れり雷は追々嚴敷成れとも不厭われとは
なしなとし居るうちに電光地を照すほと也ければ一同はつといふ間に鳴
出したるかいとくおそろしかること二度其外ひかりて強鳴はいくた
ひもあり七半過暮々に漸止たりされ共蚊帳をもつらす濟みぬおさと江戸
よりよほと雷嫌ひ減したりけふ訴の趣にゐは市中貳ヶ所雷落在方にゐ
壹人震死したり○此邊まむし多まむしとりを備ひてとらすると一日内に
あらぬかきりとるよし其方桶へ水をいれ藤の皮を裂きて音を發せしむる

マシハ末
ニ記ス如ク
チウトヘナ
クノ刀匣ハ
鼠ノトニテ
上ナトニテ
啼シカニ
噴飯

と其聲蝮蛇の聲に似たれはみなよりくる也それを革の手袋をかけ居てさ
つくとつかみ取にする也此地下直なるはまむし也壹疋二十四文也太平
記劔卷保元物語劔卷を太平記にみゆに源家重代のつるきに吠丸といふは聲を
發すること蛇の啼聲に似たるより附しといふことありしとか覺へし鹿
のなき猿のほゆるといふは聞とへみのなくといふこと不聞みすの誤な
るへしといひしかこの體を以はへみに啼聲なしといふへからさる也○う
なきの高料に恐れまむしを一切レツ、給むといひしにみな恐るゝ故止た
り○昨夜太郎かよき機嫌なるをわれとおさととして愛せしと夢み又新右
衛門と頻にはなししなからこは奈良へいかにして來にけらしなとおもひな
からしはらく面白く咄せしを見しか只くさまくらに露をとめしはか
りにてあたし夢也けり○萬葉集東歌のうちに上野の佐の、九久、たちをり
波やしといふことみゆくゝたちは和名抄に蔓タケ、蔓青ナメク、之苗也と有是
にて台記などの饗膳に莖立とてあり已上眞淵ノ説先日記の法隆寺の古記録饗膳

の獻立に毛立といふものは九、クキいつれもケと同音に付け立といひしをかり字にて毛立と記せしかいか、○けふは兩御門主は暑中に參る大乘院は直に御逢ありて御上壇に御出御下段迄めされて御手昆布を被下たり大乘院は御殿向其外とも一乘院のことくやつれたる體はなし

○廿九日 曇 此ころのひてりにて用水溜つきたりとの事なりしか兩三日の夕立にて濕足るへしきのふも夕かたは雷鳴にて強雨也し○まむし取之事を聞しに奉行所は非常欠附人足小頭はな惣といふもの其事に巧也と也是は笛を以ま蟲を呼と云ま蟲はよる「ちうー」と一聲長くなくよしまた聞かす○西大寺は古銅の器大底正字通にみゆ篆書なるへし篆書は周宣王の世に史籀とかいひし人のつくと承るされは周の器にはあるとも夏の器とはいひかたしされ共懸川の儒員はいかにおもひしや又篆書といふもの古くありしやいかに彌吉の考もあるへし承り度候書物の更になき土地は不自由なるもの也

道風か讚と
半すれ破れ
て讀へから
す是後人
騰寫せし大
乘院の宮の
讚ありし也
慈恩か出所
に記するた
め

○六月朔日 曇 少々しのきよし○藥師寺にある慈恩大師の畫像は唐朝に於出來たるに小野道風か如古圖讚をしるしと法師共のいふ也讚は色昏のこときもの書たるもの也此體之もの所々にあり土佐繪師に圖しもらひたるわか所藏の藤房の卿の古圖なと是亦然り慈恩大師の圖の讚は法師俗姓尉遲名窺基字洪道代郡人也族貴五侯名高三輔胎而神應誕則殊表慈恩三藏請於鄂公以爲弟子遂從恩旨捨家從釋目一覽而心傳耳暫聞而口諷撰唯識章瑜伽等疏一百餘部又有通神之應曾於五臺山造玉石文珠傑寫金字般若經大感神光瑞雲年五十有三永淳二年冬十一月十三日終于翻經院矣太宗文皇帝爲御製讚曰巨哉哲仁 迥然出群 疏造百本 才過萬人 妙閑性相 理契天親 口翻四辨 詞發大雲 昂々藏々 法中之王 面舒滿月 雙眸電光 昏衢麗日 苦海津梁 聊申讚嘆 孰能宣揚とあり唐太宗晚年佛を好れしは實なるへし○けふ興福寺別當五師を奉書堅物にゐにしへの切

封にいたし堅ふみの末を三分巾ほとに切り夫を以帶の如くいたし封を附あり封は封なり御老中寺社奉行へ出雲の國造より出す年始状なども同しと覺ゆ其文に曰當年若宮祭禮散在願主人之儀理運之體早々又被相催之由前會五師御坊仰所候也恐々謹言 六月朔日 權專當元逸 散在刀稱殿此事何之わけにて如斯申來るや奉行所に知る人なし春日社人にもなし奈良坊目拙解ニ梁塵愚案抄ニ云 弓立^{ユタテ} イセシマヤアマノト子ラカタク火ノケオケオケ注に曰愚案するにト子ラハ刀根等也六位以下ノ人ヲ刀根トハ云リ爰ニハカタク賤キ人ヲ云ニヤホノケハ火ノ氣也オケハアチメノ曲ニ云詞ト同し○庭訓往來云淀河尻刀稱^{トナリ}大津坂本馬借云々刀稱者村長當代庄屋類也拙^バ解^ト按するに今いふトノといふものは貞丈か説にては殿下の殿の字より流しと四季草のうちにあるしと覺たり萬葉東歌雜の歌^{六考}等能乃和久胡思とのゝわくこし眞淵云殿の若子也○又云いねつけはかゝるあかてをこよひもかとのゝわくこかとりてなげかむ○眞淵云賤女にはあらし良

民などの女か身をくたりて賤女のわさをもていへるにそ有へき○又云東にて殿と云は國の守介などの家をいふへし又郡司國造の家をもいふへしトノト子ナニヌ子ノ同音なれば相混したるかことくなれとも又刀稱と殿とは貴賤大にことなり春日の權專當といふものより殿文字を以奉行所に向ひいふ上は刀稱賤物ともみえすいかなることによ
○二日 曇八十八度位之暑也 きのふ與力共ハシキ燒を振舞ひたりくち取にいもとたこの煮たるを給させしに殊之外めつらしかりたりこゝにては煮ことはしらす芋蛸の汁をするといふ也肴屋共來りシキ燒をするにかなくしの二尺はかり成へ茄子をさし田樂ひばちへたてにならへる也風土のことなればみなかくの如きを互に笑ひ居故こゝろせさることを得さる也○過料に五百文より壹貫文貳貫文といふことあり其外かげぼしといふものに後人の書入したるかいつか本文之如く傳寫したるをしらすして用ひ居也不審成事故に段々もとへさかのほり其源を尋ねて驚歎したり古書

等に和漢共に後人の註等本文に成居る類は尤至極の事也

○三日 雨八十三度之暑也 日々大雨にて雷ならぬ日はなき也しけといふけしき也○柳助よりやまふきにうたを添てくれたり返し

みな月の今にめつらし身を忘る臣か心に似たる山吹

○四日 くもり折々雨 朝は七十八度晝後八十四度位也 氣候少々なまけたり○此ほとは茄子日々五六十位とる也是に少々息をつぐ也○暑中に大地之寺院を葛を吳候は、江戸に遣し度と申事也

○五日 晴朝八十度晝後八十八度に成 此體にてつき候は、大和は至極の豊作なるへし○ひる後葛もちなどをこしらへて一同茶を給る話は不相替江戸のことはかりなり

○六日 晴朝八十二度晝後九十度に相成 此ほと日々白洲に出るはかり日記に可認ほと的事もなし日記の船間なるへし只あつきには一同難義するはかり也

○七日 晴 通鑑をよみて唐代宗記にいたる内出仁王經二寶輿以人爲菩薩鬼神之狀導以音樂といふに至ておもひ合せたり今も日本に此ことあり二十五菩薩來迎會といふ也天台などにもするか我親しみしは奥澤の九品佛にある也かゝる唐の弊政を出家共か見習ひ來て早くより日本に被行尊きことの口傳同様に成り仏て佛の一に立居るもあるへし可歎事也日本人は唐朝の人々に欺れていろゝのよからぬ脱アルカうつり來しこと奈良に今もみゆる也歎息の事也

○八日 晴九十二度の暑也 昨夜などは七頃に目さめたるに汗ゆあみせしかことし土地之人いふ殘暑にいたれば今一段の暑に成といかにや可恐こと也○こゝには猿多し春日の社燈籠の火袋に猿の遊居る圖南都名所圖にもみえたりかゝれば猿は已前は御役所の庭などにも春日の山より來たることよしされ共害をなすこと鹿より甚しければいろゝにおとして今は春日山にすみて秋稻の熟する頃には田に出て稻穂をはむよし也其

さまたとへは十疋二十疋一むれにて出るに必鷹番といふものゝ如きものありて高き木に登り人のくるやいかにと待居てもしや事あれば聲立て逃る也其逃るさるともに一むらみな逃る事の由よつて戯に人の密に身をかくし行てかの番をするさるを追ふとかれ驚て度を失ふ故にのこりのさるはかへさのみちをも不知けしからす騒きておもしろき事よし其かはりに山に行て番をしたる猿をうちこらして刑することにありて其聲いとあはれなるよし也近邊いつくも悉殺生を嚴敷被禁てあればかゝることもある也鹿の行倒人の如し可笑也○けふ八半時頃表の居間のうしろへおさと参りけふはたえぬあつき也今すこし前より雷氣也一しめりほしゝなといふうちに電光地をてらして百千の竹を一時に折たるかとき音して鳴わたりたりおさとあといひてふしぬ女共來り扶行て蚊帳をつりていれたり其後は兩三度おそろしき音せしかと格別にはあらず○さることをおもひて陣中に使番等なくて不叶也李廣將軍かものみのもの

此雷多門山
と松永か城
あとの山に
落しといふ
也町計の所

を遠く出したるといふこと名將の故なるへし○通鑑肅宗紀李光弼と史思明の戦の評を雍正帝せられしうちに軍陣は多く驢馬を用ゆ故に女馬をみても構はぬよしをしるされたり驢馬とは馬の勢を割たる也と申ことは韃人など山丹人のつかふ犬の勢をさくかことく常に馬をも驢にして用ひしにや唐の頃も驢馬なりしやいかにも不審也易に豮豕牙吉とあれば豕の勢さくことはやく周の世よりあれば馬をも勢をさきしにや是は軍馬に必可然事なれ共日本には聞かぬ事也

○九日 晴 九十二度にいたる堪かぬる也きのふの雷はいつかたへか落しなるへきかいま届來らぬ春日の山中なるへきかけふも又雷也日々大小の違はあれと雷のなきことはなき也おしけお千枝とならはいかにやすへきといふ也きのふもけふも雨はなし光と音はかり也江戸のものゝ暑を恐るゝにおもひ合すれば元魏の北より南に移りし時みな暑を患ひしを不解ことにおもひ居しかはつか一度前後の地にて如斯北戒戎カのからの南地

此雷吉野郡
の御代四所
氣絶して人
貳人は死せ
二進あり追
しよし追あ

に移りしはいか計ならむ

○十日 晴九十二度 きのふあまりの暑に付與力同心共の葛水を遣す家
來も同斷きのふ夜に至又雷廿八日なきのふ迄雷ならぬ日なし○けさ居間
に鼠居たり兼而聞しことありける故に試に小侍をしてつまりくは出ら
れぬ様にしてかれか隠ることのならぬ様に陰蔽の所なからしめ置扱侍に
はたきの柔成かしらのかたにて鼠のかくれ居るを撫さすにかれ驚ては
しる也され共かれ隠るゝところなければ右に行左に行てくゝり出る穴を
もとむるに穴なしよつてかけ廻りて獨りつかれていさゝかの陰に行て息
をつかむとする故に又かのはたきのかしらもて往てなつれば走る也かくす
ることしはくゝなれば少しくひまはいれと終に鼠の息きれあしなえて少も
走ることなりかたく果てはいか様ともなる也その時に小侍か自由に殺す也
かくする時は手間はとるれともあやまちなし棒を以追ひ廻りなとすれば障
子の棧などを打折机の上のものをそこなひてさわき又夥しく或は坐敷な

とを血たらけにする也今一段氣を短くすると手つかみなとにして大成こ
とを引出し醫師を招くにいたる也大國の小國を攻め上たる人の小人を治
むるみな此術也鼠をとるは前のことくに酒井成大先生のなされしと常に
かたられけるをけふ試みしによく出来る也このこと小なることなれ共大
に用らるへき様也つまりは氣の短か大損の種とおもはるゝ也○寶藏院の
ことを聞みるに槍技は近頃 上覽の時清水次郎傳授を覺しまてにて扱寺に
つとふるものなし中河内國助か鍛し鑓文寛を以第一とするにいたる間取に
不足其内一本わか所持の金房に似たるあり中心を辛して抜みしに果て金
房正貞なり幸ひ正貞の作も持參りたれば引くらへみるに一毫の違ひなし
只寶藏院のやりは摩利支天と表に鑄うらに蓮華あり鑓は元も末も柄の太
サ八分あり尤しほ首のかたはかなものあれは正味七分五厘餘もあるへし
手とまり金のすり込にて中心はかたくり込也石つきとかりて穴なしおも
ふに正貞天正頃の人なれば此やり二代目以下のものなるへしされ共全體

を存せしものは是より外になければかの寺隨一の什物なるへしとおもひて
是を不失大切にせよといひ遣したり○夕かた八十八度朝八十三度也よ
るのあつさおもひやるへし

○十一日 晴微雨 けふ御役所附之書物風入をみるに寛政の頃春日寶藏
の甲冑を所司代に申立寫置たるあり惜哉納物はかりにて實用のものを納
置しは見場よからぬ故に寫しなし吉野山實景圖一卷あり古きもの也是は
寫持參り度とおもふ也○昨日七半時過吉里の姨被果候由新家に御隱宅に
申來る

○十二日 晴 興福寺之 御位牌所に參拜○御役所之武器の蟲干也具足
みな筋甲にて數ものなれ共今のあつらへよりもよくしてある也寛文の頃
大坂より御渡に成たるといふ也いにしへはかゝることによくこゝろを用
ひしとみえたり○けふ吉里のくやみの狀を出すよからぬ序なれはとて宅
狀は出さす○素麵の到來あれば與力同心の詰合に冷素麵を振ふ焼酎を吞

せしに三升をはつかにあませしといふ也○こゝの與力同心は遣すものを
給たる上へ辨當箱に入持行也

○十三日 晴 西照寺と申御修復所より先格に西瓜をくゝる只二ツな
れ共けしからす大なれば家來一同にも遣したりあゝ江戸の 母上様其外
にもとおもひし也こゝの眞くわ瓜は至而大にして更に味なけれ共西瓜は
絶品也くれなひの雪を食ふかことく口にいるれは水と成也砂糖などをか
けたらぬにはさくらの花に彩色を加へたるかことくにて却ち味を失ふへ
し○庭の泉水へ池田本多などの時すゝみ臺を置たれば可置哉と大工いふ
故に以前は大成ともわれのみは小成かよしとて三疊に置せたり已前の姿
の半分にも可及といふ也この頃よなゝ月よろしこれも又故さとおも
ふの一ツとはなる也はなも月も給物もよきはよき悪敷はあしきによりて
果々は江戸のことをみないひ出ることなり○五條之御代官より文通の末
へ

一兩に大は汗 二八に十は四 三度位は八に五 四日位は十に六 五日位は十二に七 六日位は十四に八 七日位は十六に九 八日位は十八に十 九日位は二十に十一 十日位は二十二に十二 十一日位は二十四に十三 十二日位は二十六に十四 十三日位は二十八に十五 十四日位は三十に十六 十五日位は三十二に十七 十六日位は三十四に十八 十七日位は三十六に十九 十八日位は三十八に二十 十九日位は四十に二十一 二十日位は四十二に二十二

智仁勇をけんひし奈良の御奉行は下を伊丹の銘主なるらむ

といひ越たりければその返しに

けんひしを丸くする氣もあま口にさてならさかやいたみ入候

とよみて戯遣しけり

ことつてにきけとまたみす月よしよしとつくるさる澤の池

醫者來りて代々御奉行様すゝみ臺にて夕刻より夜のいたくふくるまで食事等ありき御もち^用ひ可然と兼あひひければ昔大越氏か話に三州矢作の御普請に行たるもの多く秋に成瘡を煩ふこれは暑にたえずよる涼むものに多しわれは夫をしる故によひたれこめて寝し故其患ひ一度もなしといひしよつて奉行の内に初^あの秋に瘡を煩ひしものあらずやと問ひしに果してありといふ也されはすゝみ臺へも夕かた一寸のほり直に坐敷にて蚊せめの業を修することゝきめたり○御役所早くひけて靜なるにひとり表の居間にて書をよみ居たりしにかすかなる足おとのする故にみれば卓よ

り一間はかり前々大成てん來りたりかれ近眼なるへしわか居るをしらす來りし也思はずシツと聲をかけしに忽ににけ行たりその時胸驚たりし也これにては俄のことを必あやまるへしと甚慚且戒しめたり

○十四日 晴 きのふ興福寺の夕かたより父上御參詣被成度肩輿はあつければ御歩行に被成度との御事也こゝへ被爲入候る春日へ御まうてありしはかり成は御忍ひの御出よかるへしと事也され共江戸ともちかふなれはあからさまの事なから御供は多く被召連候而直に御歸り可然由用人共申出る故其かたに定たり尤薪能などの時其外にも奉行の家内等出る例は多あるなれば其例に隨ひて父上とのわけを以たしか成かたとて用人給人壹人ツ、さふらひ二人市三郎清一郎等其外召連られたり其みちすからの町々春日の夏祭りなれば家々にかさり物して賑ふよし也御供立は立派なれとも茶めしあかることもあらず程なく御歸りありし也○興福寺の南大門は廣き芝原にていこま山其外の山々をはるかにみて猿澤の池に臨めり

よつて涼のころはけしからすにきやか也もちいひうり酒茶など商ふもの共はさらにもいはす池のほとりなる芝原に駒牽出てのらするをなりはひとし或は揚弓等まつは兩國のすゝみの小なる體のよし也所からなればさむしろ床木など並へあるをかりて酒のみ拳など打戯居るもの數ふるにいとまあらずこゝも京も夜を專とするところなれば四ツ頃よりことに賑ひて明かたに成茶店等のもの共はみせを漸におさむると也○春日の夏祭は已前はよほと美々たる事なりしよしなれ共御改革の後は半にも及はぬよし也され共みせゝに燈かゝけつらねてあるは人形あるは扇商ふ家は扇兩替するみせは其器といふことくなるものにてさまゝのかたちつくりてみするとの話也○父上の御歸りありて奈良の女のよきといふは空ことならず美なるか多との御話あれは御ともにさふらしひ脱カ民藏などかくありしなと審におさとにみちすからみしさまかたりて大かた佐渡と同じかるへしとおもひしはひかことにてふるくとも都也けりなといひて物語したり江

戸より來りたる下女共みな千とせの松のみきにつたかつらのはひまつはりたる姿なれば牡丹もちなる面をふくらしならのものゝみな姿よきといふこと心得ねこは常に粥をくらひ魚の味ひをよくもしらぬ故なるへしといひし故にそは必汝等かいふ通りなるへしあすよりはみなくいましめてはつかつゝ白粥くひ候へといひしに市三郎か傍より粥にて姿はなほりもせめ額出鼻卑く獅々舞に似たるはいかにして治するやといはれてみなく一同に笑ひ出し立白ともいはゝいへめつたに粥なとくふへからすいやなることゝいひて止たり江戸に元來美人ことに多し我方の婢のときは珍らしとは銘々しらぬなるへし

○十五日 晴 異國船二艘來り浦賀に奉行等出立ありしよし市中に風聞する也山中一向に高見に遠きはなしをきくとは難有佐渡等ならはかくは參るまし○此節八十九度の暑に成少々しのきよし○此節なす瓜等大に出來さかりたり家來共もおなしよつて出入々やおやは一向に用なしけ

ふ久々にて冬瓜をかひ遣したり七十貳文小也さつま芋貳本に七分蓮根壹本を二ツに折りてふときかた二匁八分うらの細きかた壹匁八分也といふ也江戸の野菜の下直おもひやる也○暮かた御團扇献上濟之御奉書兩丸之分來る右に日記添來る先以茂兵衛出精無滯相濟大安心也右は家來之御用書之返書に可遣候得共老人之骨別段之事也○彌吉御逢延に相成右に付短尺引替に相成候旨承知○幸三郎より日記御沙汰書共來る孫六ふち頭いまた不成○磯部一秀之話後生可恐○正常之刀上出來に候はほしきもの也一覽せねはならぬ故に仕かたなし○板倉翁之不快高年之義あんしられ申候深切に世話ありたく候○異國船之風聞既に四五日已來ありし御沙汰書にはあらねとも大岡主膳殿御出立ありしよしなど風聞する也御沙汰書にあらねは風聞なるへし山中にありも江戸之店を申來るもはかりかたしけしからぬこと也范益謙坐右戒に不言朝廷利害邊報差除とあれは第一彌吉鑲作幸三郎等われか親類共つゝしみて西洋のことにてても少も他言あるへ

からす海國兵談夢物語等いつれも近く手本也海外の事を患ひ云ものいづれも不宜事也朱子の教可三復事也

○十六日 晴九十度也 午後迅雷是はとおもひしか西北之方鳴行たり近山を起りしなるへし○此頃隔日に馬をのる也けさはよほとよくのれしこゝろ也見て居たる別當か聲などをかけたりこゝろよし馬よりおりしに感たる體也少しく鼻高しよつていかなれはかくは感するやといひしにおもへはく上手といふ故に以前彌吉か聖人の言にもうけられぬ事のありけれ父めせはだくなしとあれと父かめすにだくならぬ事なしといひしことも聞しそかしへつらいたることをいふなといひしにいやかくも感心いたしせしは殿様のけふの被召かたには非ず殿様の御手際にて加之市三郎さまも召さるれと此馬いまた拍子の足をわすれすよくも乗こみしそと頻に細川様の松兵衛といふ人の上手なるにけふといふけふ眞に感たりよの人の乗込ならば此ほとはこにこより外にはならしといひきそれと聞て大力

を落せりされ共いまたまけぬ氣にて夫はそれよわけふの體はいかにといひしに諂なく申ならば矢張昔のことしと又力を落したり

○十七日 晴 きのふはひるも夕かたも雷深夜に至り又雷其節少々雨今朝は少すし○きのふ暮六時頃に宅狀來る所々之書狀等相届○母上様御機嫌能と之御事恐悦至極さて又御こま／＼との御文難有常に御筆を被爲取候義御好みも不被爲在候處かゝる御ふみ第一は御氣力たしかならずしては御認も御六ヶ敷可有御座候處御たしか成御事と恐悦第二には御氣力を御遣ひ御世話は御過ぎなされ間敷哉と御細やか成御文に心配第三は夫婦共思召之程の難有さに常の事ながら只落涙仕候何卒日々御からだをたんと御動し私共罷歸り候迄は御大丈夫に不被爲在候は不相成夫によりしきは御ほとけの御信心御經扱は御庭の御なくさみ太郎等之御あつかいなるへし勝手等之御事は先ツ／＼御世話なきほとに被遊可宜哉身上の世話御からだに當り候ものにと奉存候きそ山之出立後之御大病など全夫

故歟と恐入居候義に御座候○久保田異國船のはなしなどあまり無之いつにても大切之御奉公の時士の一分を立たしとはなし有之候由 母上様御文之御下け札に相見へ申候扱々久保田の勇氣乍例衆に立越たる事と甚以感心いたし候義に御座候此ほと異國のことなど申立諫候ものは必刑人にも可相成且は其様にうは／＼いたし候心には十分之義は無覺束とおもひ候義に御座候久保田は頃日も民藏申候は熊本を初而出府之節他流仕合に参り候處先に豪勢體なるものを多あつめ置候上に眞劔ならば立合可申と申せし時もとより所好也即立合可申と潔く答たれば彼方に足痛を以斷有之候由かゝるもの世に少ことならしと申候ひき勇士は別段之事也

○十八日 折々雨 風つよくおり／＼雨ふり來りてあれけしきなり山さ
とめつらしき風つよし弘安のことなどおもふもおかし

○十九日 朝雨夕晴 大坂の長吏かもとより奈良の長吏かもとへ文通の

内に琉球へ西洋船参り借地又は回々教をすゝむるよしの風聞あるといふ也

○二十日 雨 興福寺中院屋 有徳院様 御靈前の参拜畢御膳具めつらしき體に付罷出居候ものに相斷候奉侍候處いつれも白木御膳に御飯は藁を清らにつくりたるものを覆のことくにかけ御菜はひけかたまひ生かんでんを入其外例のくゝたちか牛房はきつて立あり御菓子は江戸に精靈の干菓子をあくるものゝ如く藁束ねたるものゝみな菓子をつけ有之候右は定而京都の近き 御代の御忌日にもかくなすならしよほと古色ありて神めきたり委細尙尋へし○小笠原翁の暑中返事御懇意にまかせこゝに記す本文は例文御追書に内度々御出被下候由千萬難有御咄にて老母の鬱散と奉存候御沙汰に趣妻并市三郎にも申聞候兩隱居にも申聞候處いつれも難有旨申聞候○貞信公五月の戒蟪川能州の御咄と事御序も候は、能州の尙御傳可被下候奈良に而は是は能州ともく一覽いたし度

とおもひ候義屢々有之候七大寺をはしめ末々にいたるまで佛體には實に不思議のもの有之候能州一覽候は定而高論可有之とおもひ候義甚多有之候足の指眞むしなるとの句奇也巨勢の金岡か母の教に説ますく奇也

○廿一日 くもり雷雨 兩三日已來又々大小はあれとも日々の雷なり○夜又雷雨

○廿二日 晴八十六度強 あさは少しく秋けしきにて冷か成風ふき庭の萩早きはさきそめたり○江戸のことを知たる氣にてはあれも是もよからすみな江戸の便なとをまつ也土地のものは又何もかも土地の物にてこと足也是等よつてもみゆる也よきことを日々に口にはいひながらも行跡は大にちかふは知りたるも實に知らぬ故なるへし實に知らは江戸のことをおもふかことくなるへし○去る廿日夜亥刻 女院崩御の旨所司代を申來る○昨日の 圓照寺宮御病氣御大切の旨申來る御齡御六十一 淨觀院様

丙午の應か
女院崩御
先帝崩御
紀州の御事

異國船
半年に四
大異事恐
入たる事也

之御姉君にわたらせ給ふ書をよく成給ふ御女儀とはみえぬ位也

○廿三日 晴 きのふ古梅園所藏の行成卿の懸物をみる千載以上之古筆なれ共やつれなくて手本と成也ところ〱千蔭なとか書體に似たるところあり字の大サ三寸四方はかりにて唐帚一枚よりも大成帚は佛語を三行に書たり草書也筆は今の和筆といふもの之製にて書けるかことし帚は則今の越前より出る雲かたある短尺にする帚のことくにて青雲計にて紫雲なし西之内かみ程のものを十二枚はかり繼合せてそれへ弦月に郭公菖蒲を五ヶ所計極彩色したる也郭公の顔など寫眞せしかことき也此帚の體を眞淵宣長等かこときものみたらは大字をかくに必此體を用ひて唐帚は用ひましき也表具古き蜀江錦とみゆる也うら書といふものあり年號はなけれど至る古き書也河州神尾寺現住某とありよつてみれば必彼寺の往古の什物なるへしならの寺にかゝるもの多かるへき譯なれとも更になしみな此懸物と同じ譯に豪商大家の所藏と成しなるへし○けふ儒生々陳恒弒其

君の注にある○外程子胡氏の説ともに會得しかねしことをきしにおもしろからずしてやみたり其序に堯舜の大徳を以天下を治めたらむには定而人忠信實意になりたるへし然に堯舜既に没し給ひ三年の喪おはりて舜は堯の御子をさけ給ひ禹は舜の御子をさけ給ひし時いかに舜禹の大徳にましませはとて堯舜共に七十年以上之徳澤に潤ひし民らかうすくも忽におもひかえて謳歌訟獄するものゝみな舜禹に行しはいかに紂か惡にても文王の起り給ふことのかたきは聖賢の君六七おこり給ふ故にあらずや丹朱も不肖舜の子も又不肖といひし位之事にて惡あることはきこえず然るに何故にかくはおもひ捨しや近く大坂落城の時討死せしもの大坂首帳といふものによれば頑民共一萬にあまれり大閣の殿下の酷薄と秀頼か愚とを以申上奉るもかしこかる 御神の御徳に向ひ奉りてなほかくのことし堯舜の世の民はすへらみことこの御國は薄情なるかことしいかにと問ひしに答又おもしろからず此次の便に彌吉を辨書風にこの答しるしてみせ

らへ候へ

○廿四日 雨 八十度之暑也曉は少々冷氣也○九日の頃浦賀より兵庫に歸りし商人のはなしして歸りたるとの風聞にては異國船は九日とか八日とかに歸帆したり江戸より瓜茄子など夥被下たり夥といふもおろか也見しこともあらぬほど也と水をも多被下たり夫らのことに彼地にて被雇て大に骨を折たり商用は足さりしかめつらしきことを見御固め之諸大名之威嚴整々たるを見歸りたりといひしと也もとより風聞なれば信用はなりかたけれとも野菜被下薪水つみいるゝなどは兼而もある事なればもしや信かつけさは御國のことおもひてこゝろうれし○おさと十日計已前脱アルカか例の持病にてうち臥したりしか格別のこともなく收りたり其後とかくにかくといふ病はあらねと肥立かぬるといふ體にてねたり起たり也眞武陽之外に地黄を用ひ一兩日以來まむしを酒にて小なるを一切レツ、給なとする也氣力もかはらすこゝといひて患ふるところもなし少々やせたりされ

共足などは少もやせなし食事もよし凡は六七日中にはよろしからむとおもへと醫者をきらいてみせず又別段の體もなく江戸にて煩ひしまゝの容體なれば三卿傳へしまゝの藥にておく也ならへ來りしはしめより凡三四十日はかりも右の體なりしか全快したれば今度も又十日はかりのうちにはよかるへしさてく醫者のなきにはこまる也○今度來月二日に惣年寄の出立する時にたよりあり又近日に商人の出入之もの出府する間例の一條か彫りし鍔ふち頭江戸に廻すへし幸三郎たしかに預り候て來年に相成こしらへもらひたし其内右に用ひ候かなり成短刀尋出し候様いたし貰ひたし例の正常はいかゝ

○廿五日 民藏いふ頃日くされ肴をうりたるわひことに肴やより鹽にせしいわし五ツとやゝいわしほとなる鹽鯖をおこしたりいわしを給ふる事久敷なければくされ肴うりし怒たちまち消て先めしにかゝりはしめ二ツやきて給へしに足らすよつて寶物のことくひめ置しを又一ツ出して

くひたりはやのこりはめたかに似たるか二ツなれば妻と下女に遣したり
のこりの鯖は薄鹽なれば頭のかたあされて夕かたにははや給られすよつ
て上作の金めぬきほと鯖をかしらと腹のかたを取たらは十匁筒にて打
ちたりしすゝめのことくなりしをやうやくに前栽なる木うりみやうかな
んとをかて加へてもせしに中さら一ツにみたすさすかにみせてもお
かれす妻に一箸いかゝといひしにかくも辛勞し給ひしをわれに賜ふにも
及はす獨して給玉へといひけれと一旦いひ出しことなれば獨も食れすは
つかに一はしはかりをわかちて順作に遣したりしにいとくめつらし
とて歡天喜地して給けると也以上のもの江戸ならば十六文位のことにて
中番の老翁か一かたけの食にたらぬなるへし呂東萊か凶年の米は玉のこ
とく豊年の米は藿のことしといひしかとおほへしけふまこと也けり此話
によつて話ありいにしへ南畝か説にある山の手の若人か七月に大宗寺の
閻魔王にまうてゝかへさに新宿の旅店に旅妓をよひてほこりにいひ

けるはわれけふ初松魚を三兩にて買て給しに同じ魚もはつ物はまた味こ
となりしと語ければかの妓いたく疑ひて偽ならむといひしに何條空言を
やいふへき日本橋にてけふそ三兩にて初松魚をかひていま給しまゝ來れ
しといひしに妓尙うたかひてそはいひ給ふなれとこゝに可疑の正敷こと
あり凡わかゝたに來り給ふ人々に松魚給玉はさるは少からねとあとにて
は必酒に酔るかことく成てみな頭痛に堪へず鉢卷をし給ふ也君に酔る
さまなし是必偽ならむといひしよしこの物語を南畝かいひしは盆に三兩
の初松魚あれは妓は酔されは松魚とせずこの家にしてこの妓ありかくも
山の手の情體をつくせしと評せしと常にいひきと市川眞風か話にきゝき
今ならに又一層の奇談ありこゝの初松魚出れば必ず一度は紀伊殿より賜
はること也ことしは閏月もあれは月見過なは贈り給ふへしいまにはや程
もなき事と紀州の御家來か家來にかたり行たりしと也盆後の初松魚を以
天下の奇談とせし作り物語もあるに月見後の初松魚の實事奇談中の奇談

ならずやひる前に表居間へフン／＼物を焼かをりするこれはかの酒と女につらきかたきのさかなに晝にはめぐり逢ことかと舌をならしてまち居たり頓て御膳にて候と清一かいふ故に急ぎ行て膳にすはりみるにかのかをりのおもかけは焼物皿に茄子の龜の子焼のせてあり龜の子といふ名ありとて魚のかをりしてあさむきしなるへしとて一聲アト長大息したり

○廿六日 晴 九十一度の暑堪かたし○おさと今日は大によろし此體ならは氣遣なし○此ほと茄子大にとれる日々に百位也○夕雷雨

○廿七日 晴暑昨日の如し ○廿五日の御用日延に付今日公事多し本公事五ツ金公事三ツ五半時を白洲をはしめ晝食前漸相濟其内に不愼の少々臭氣あることありてわれかゝることは得手物也うか／＼して後悔なせそ得手物といひては誇に似て失言なりきされ共子供迄聞知れる脇坂の手に屬して夥不如法を取扱たれば知らぬにもあらず要心せよといひしにかの

僧一縮に成たり一件忽に内濟す死したる孔明か生ける仲達を走しめし策のことく中書公の没後にかの朝臣のひかりをかりて利を得しもかの朝臣の天下に響ける故なるへし○繪圖を以吟味することあり與方に聞しに其所置を五十年來みしものなしといふなり江戸などには一日に五六度宛もある也尤奈良は地所は京尹に屬する故よりなるへし繪圖さしといふものはかよう／＼なるものにと關東の仕來を一應いひきかせいたし方を問合せしにいつれにてもよろしといふ也繪圖さし等可造やといひしかは五十年來もなくして濟しことなれば決而無用とてとめて一寸の有合の竹にて間に合せさせたり白洲に出で吟味してみれば繪圖さしもいらす訴訟方恐入て九分通内濟したり○夕雷雨

○廿八日 九十度の暑也 ○おさと昨日ゆあみしけふは髪をいふ少もあたらす大に快し

○廿九日 微雨暑は同じ ○醫者のはなしに某の寺院はもとならの者に

付關東の行候序に尋しに海邊にて鮮魚を夥振廻たりといひしかは夫ならは定而坊主も魚の接伴せしなるへしといひしにいやその僧は若き頃あまり肴は不好といひしかは不食ものゝきらひといふはめつらしとてみなく笑ふいしやかはなしにては昔は興福寺に肴やの出入ありて日々御肴はといひて持行たりし也然るを昔の奉行にとかめられて夫を恐れて今はつゝしみしといふもおもひやらるゝこと也信貴山の僧頃日大坂町奉行を達に召捕遣したり引合はならの女也女はよく扱相談行届やすく酒はよく扱下直也是に而よき肴あらは下々のものに身を持ものはあるましき也

○晦日 晴 京都の風聞にては 准后も御不例と之事也御附弟大覺寺の宮御容體とかくはきく不被遊御迎之龍王院十九日頃痲病に而大切に およひ候と之事也龍王院は聞へたる執當可惜僧也大覺寺宮御所勞格別の ことには無之と之説もあり早く御下りにいたし度もの也○當一乘院宮關

東へ御下りあるへきかとして已前大覺寺宮御下向の被 仰出無之前は興福寺之もの日々引もきらず關白殿下の歎願いたし候由一乘院宮は當 禁の御兄にて御續柄中之御きゝ物のよし左もあるへしなら市中其外にても大切におもひ候而萬一御下向もあらむかと已前右之次第ありしよし極之御才子にて坊官家司共もみな手堅しわか一ツの仕合せ也

○七月朔日 晴 月並の禮受ること例の如し○きのふ夜に入書をよみ畢るしはし池のすゝみ臺に行みしにはやいろくゝの蟲のこゑする也そのなかに塀の外庭の辨天の池の邊にてヤブ鈴蟲といふものゝ聲より高くやゝコマ鳥の鳴に近き程のよき聲きえゆる也めつらしとみなきけともわからすこれはかならず蛙なるへしとおもひてけきゝしに然りこの蛙は關東にてかしかといふものにて夏の末より専秋にかけて鳴と眞淵の説あるもの也春ははなになく鶯秋は水にすむ蛙と春秋に對をとりたるといふはな

しもある也○庭の池の由をめぐり向ひのかたに三本はかり蓮をうゑたりしに殊によくしけり二間四方も其餘も葉の生ひてけさ花ひらき初たり白蓮にてかをりことによし居間よりは十四五間餘もあるへけれと朝かせに香を送る也こゝより四里はかり成大池といふ所は一里はかりも紅白の蓮さきて此ほとは船を浮め酒くみかはすものゝあると也城州なれば我は行かれす

○二日 くもり 此ほと萬葉集をみるに眞淵か考或は契沖か水府に奉りし抄なと合せみる也其内眞淵か古本を以校合することをいひて奈良の若宮の神主かもたる古葉類要抄をも古本のうちに加へたりとあり與力中條仁之助か妻は春日の神主千鳥三位か娘なれば仁之助に其ことをとひしに古葉略類聚抄六本をかしたり少く表題の文字かはれとも是なるへしとて差出したり殘缺本とみゆる也眞なとかたかなとの歌をましえかきたり一本ことに奥に建長二年二月幾日寫之と云ふ華押あり可愛翫古寫本也こ

ゝには定家卿の昔常にこられてそのかゝれしものを多く持居るといふよつて仁之助かきゝみしに紛もなく持居れとちと聲にもみせかぬるとていたく愧たる體せしといふ也定而此ほとはあらぬなるへし可惜事也建長のころは鎌倉北條氏は時頼の頃なれば治平にてこと足たる時節とおもふにみな反古のうらに書ありいにしへは文具の今のことくにはあらぬ也千とり其頃はよほとのものなるへし今の江戸のことくうら店の日傭とりの子か手習ひするに八文出せは半番一帖のとにかえ番ありといふことく自由なるに成しもみなふたらの 御大神の 御惠そかし○おさと又一段よしきのふはみつから髪とりあけしか何もかはらすといふやせも顔は大によくなりたりしかし膝などはいまたもとのものにならす

○三日 雨 きの不迄は日々の大風なりしか江戸と違ひ少も砂たゝす椽頬をふくなといふ患ひなし是は土のよき故なるへし○ならの鹿といふものはよに聞たるやかましきもの也すこしくふるき例きゝしに興福寺の鹿

をころしたるものは奉行所の差出せは引廻し之上さる澤の池の邊に首をきるよし也され共夫は慶長已前のこと、聞ゆ近く在方^{カク}鹿の行てわつらひければ宿かこにのせて興福寺までおくりと、け來りたりと也馬鹿の四ッ手がこにのるは多けれと鹿はかりの四手がこは珍敷ことなり

○四日 晴八十九度 けふ奥さまの御ふり出しをまいらせ候へと清一か女にいひ傳へしに女か奥さまのかとのさまのかといふ清一かしたる事はやく奥さまへ參らへ候へといふ頓てまさか洗ひさせし貧僧の忍り卷のことくなる禪をうやゝしく奉^{マツ}け出たりこはいかにとみなゝいひしに清一もて急き仰ことあれは奉るといふ也ふりだしをふんどしと誤りし也絶倒ふりといひだすといふも縁語奇也○けふは御用日也本公事金公事と合せて七口入組しもあり漸午後に飯をくひし也

○五日 晴九十二度強 残暑書面之通あつさいふへからす○けふ女之出入あり訟訴人の體上もなき信父也わたくし娘か宮仕したるに付云々とい

ふ也其娘は作奉公人也わさと十二ひとえにても着たる宮女に成たるときゝしに與力共失笑せり

○六日 晴 御用日に付目安わたし等あり○此節おさと例のよろくさなれ共少しツ、よろし足のかたさむけあるとて行水もせず今日はあした節句なればとて行水せり

○七日 與力共之禮今日は表の書院に受る家來共儒者醫者共其外古梅園等之類表之居間次之間に禮受る與力立派に麻上下に五節句には禮をいふ也○四過より折々烈風に雨ふりけるか晝後より夜に懸迅雨烈風ことに甚しくさふらひ長屋のひさしを破り塀を倒しよほとこの事也庭の松の大樹の枝或は櫛の木など吹折ていとすさまし泉水の水六七寸も其餘もましたり○おさとけふはみつから髪結ひゆあみして奥に參る醫者等逢ひたり

○八日 くもり きのふの雨よほと作方やさはりしなるへし和州は近頃

にあらぬ豊作といふことなりしにこまりたること也關東の八朔二百十日
なといかにくとおもふ也

○九日 くもり暑たえかたし ○所々を倒木潰屋等々注進あり御林内な
と大木よほと折るゝよき町家に而興福寺之松倒れかゝり候而一軒潰に成
○十日 晴又曇 木津川よほと出水也笠置と木津の間に加茂といふ所
ありそのあたりは民家の天井迄も水つきたるといふ也鹽問屋の土藏壹ヶ
所流失して鹽二百苞餘を失ふといふ也高き山々のほりてみれば木津川の
向へ川きれて城州はよほと出水なりとみゆるよし與力共申出る

兩三日おき
と大にこ
るよし髪
自身にゆ
くたひれ
といふ日
に行水を
ふ給事よ
く給氣色
よ

○十一日 晴 きのふ日くれに月よし庭に出てすゝみ臺に居るに汗出る
なりあまりのことに寒暖器をみるに八十九度也江戸に而は六月土用之内
のよほとはけしきとおもひ候而も八ツ頃しはし八十八度前後に而九十度
以上は年に兩三たひに不過尤夜はすゝしき也よる月よく庭の池水の上に
ある涼臺にて汗を拭ふなと馬鹿く敷あつさ也あゝこのあつさには弱り

し此體なら
しよかるへ

果たり江戸戀しきことよといひしにめつらしきことかなわか江戸戀しと
のことをいひしとて笑ふ也江戸こひしきことは母も子も孫も弟共も多あ
れは私しことなからしはしもおもひ可止ことかはされはとて重き 君の
御恩にかくも被 仰付るゝものかゝけてもいふへきことかはと常に誓ひ
て江戸のこといはさりしか兼而もたえぬ暑のことに烈敷に困し果ていま
しめ破れたり○城州はよほとの水にて三條の大橋流出し五條のはしも半
落しなと風聞し凡八萬石以上之水災山城の國の大和のかたによりしにみ
ゆるといふ也○伏見奉行所の與力三人同心七人百姓共召連堤切れ所見分
として罷出候處船流失候而惣人數四十人計更に行衛しれすといふ風聞有
之候旨與力共相はなす

ふるさとへ行玉章の筆とれば雁の翅そうらやまれける
○十二日 晴暑九十二度也 閏五月朔日九十度に至り六月已來八十度に
至り候はまれ也あつさおもふへし○伏見の與力同心の流失せしは小倉堤

の水防といふ也○きのふは御用日公事多に本公事に入組ものあり午後迄白洲に出居る晝後入組候吟味物に七ツ時迄相懸るけふもひる前ひる後入組候吟味物に白洲に出る右に付内職一向に出来不申候朝馬并劔術也七時前より漸書物に懸る患失の鄙夫の注に志於功名者富貴不足以累其心といふにいたりて深く羽倉の學文を彼是いひしことを辱たり羽倉よく功名を以學問の標的とするの説ありて度々議論せしは畢竟はかの人富貴に心を動さぬ故に功名を以富貴に志のわつらひを踏破りしなるへしわか學問は實學にあらず文字の上の論故に功名のことをひきくみしなれとも今よくおもへは富貴を以其志を動かすに足らすとするは希代の豪傑にてわれらか一生涯のよき稽古なるへし功名家の至極のところまで行なは道徳はさまで遠くもあらしいかにも學問の蠟等を辱てしるす也

○十三日 晴 けふは魂祭りのこと何くれと御養父母様おさとうちよりていたし奉る也其かたはら江戸のこといひ出て今のころは御ばゝ様のこ

と定而御世話あらむに御そはより太郎子はくわんせなくいたつらをなしなむなと御さとかいひ出ればそれよとてみな江戸のことなにくれとなくいふ也故さとおもふと魂迎ひまいらするとにてみな袖ぬらす事にそ○長吏かもとより申出るは過日の大あれに兵庫に千石以上貳十艘千石以下百六十艘程の破船ありとそ○伏見奉行與力之水死は組之ものに縁者ありて遣したる飛脚今日歸りていふは小倉堤の切れ所俄に水まして與力壹人同心五人水死し其外百姓共夥死したるよし今日も往來よほとの水也

○十四日 晴夕立九十二度の暑也 きのふ以來魂まつりの買物みな間違ふ也たとへはませかきといへは柿の實とおもひもみたいこと尋れば洗ひし大根かといひのりなどは菜の刻みたるとおもひ疑ふ也或人の説にすいきを買に行きたらばスイ木といふ木也とおもひ材木屋まで尋しにあらすよつて興福寺の學頭にとひしにスイキといふは佛書に多く隨喜を用ふこは御奉行のなるもの共よろこひ隨ふことなるへしといひしとおほつか

なし○魂祭りのこと旅中なれば江戸程にはあらずいさゝかかたにきたることともあれとしかしなからあれよこれよといひ出てとり集めたらは終に江戸にかはらすなりたりおさと大にこゝろよく行水をも遣ひ何くれとせはする也

此野郎の
とりは近
か出てお
とる百
姓かおと
よし

○十五日 晴 中元の祝義なれと禮なしいつ方よりも中元の祝義くるものなし寂寞たること也夫に引かへてこゝも盆おとりありかね大鼓にて野郎かおとる也先ツ江戸の願人坊主に似たりいとかしまし良右衛門見て大和の狂言にはあらず狂氣おとりなるへしとて笑ふ也

○十六日 晴 けふは江戸ならば施餓鬼といふ日なればこゝの御役所の例をきくに事にふれて牢内のものに物施し候例もあれは其例によりて當時全の入牢物并長吏か方の預置候分とも七十三人并御役所の留置もの五人あれは夫にう麵を施したり例は素麪を價を以長吏に渡し爲取計事なれと救荒のことは手つからせされは浮費の多かるよしは古人のいふこと

なればけふは臺所はたらきの者の骨折料を遣してよき素麵をかひ菜椎茸をいれたるにうめんをつくり勝男ふしをも多くいれて露をは大釜にて煮て大げんばに入る牢にはこひたり俊藏取扱に牢内は持参り一椀は同人どく味をして残りを遣したり壹人に付目かた五十匁餘ッ、之積に餘分をも遣したり囚人共壹人に付親椀三盃以上ッ、山もりになるほどありて少々あまりたり壹人分之内三匁餘を減しひや素麵にして給みしにやきものさらに水なしの冷素麵山もり四椀ありて我壹人に給あまりたり長吏かもとの囚人共は食物給さする椀ははけたるもなく二十五人宛居ならへさせて又も替をもち出て給させ給畢と湯を與ふる手廻し等至る行届さて又手奇麗にて牢内より遙によしといふ也長吏并牢番共は世話いたし候廉に酒代遣したり百疋宛也囚人共もけふはわか客も同前の意なきにはあらずよくこゝろ用ひよと兼申聞置たればよく世話もとよきたるよし也長吏并牢番も目錄の禮に出る牢番といふものはみな髪結か役にす

る事也

○十七日 晴 盆おとりの事昨年中之通心得みたり之義いたす間敷旨申付る○與力共はなしに昔は町々にて夥挑灯をともし身からのものも若きはみな出ておとる事のよし然るに御改正之時止に相成候而大造成事は止る辻々すゝみかてらに出し子供位々おとりは少々ある歟に聞ゆれともさしての事は御改正以來なしと也○盆おとりの事奥羽越後等にもあるよし也佐渡に而は第一に奉行所へ來り奉行所へ見物所前に而踊るを奉行一覽すること也先年江州に參たるときも盆おとりありて是も旅宿之前に而一番に踊りたりされ共夫に見合せては奈良は十分一の事もなし是は御取締後故なるへし南都名所圖繪にも老若男女うちより而面には手拭をかけ一刀を帶して踊る圖あり此書は寛政三亥年之板に付其頃もさかりなることなるへし按周禮仲春之月令會男女於是時也奔者不禁とあり其時には男女席を不同など正面のことは必としかたし男女を會して三ッ指の挨拶にて

も濟まし是も踊に似たることありしにやいかに

○十八日 くもり微雨 來る廿日までの盆おとりきのふより至而しつかにておともなし實に子供の少も踊かくらひのことなるへし

○十九日 晴 夕かた八十三度大に凌よし○ならにはいまた源氏いせの物語の風俗のこりけむ夏の夕すゝみする頃は廿はかり前後のわかき娘の浴けはひして門邊に床等出して風まち貞に遊ひ居る也そこへわかき男の來れは先烟草盆などを出しよくもてなす也二日三日も參れははや奥のつれ行て菓子にても出してもてなす其體をみると母親父などは外に行といふわけ也それは貧家故かくするにもあらず先ッは風俗也はや衣類など拵もらふといふわけ故娘に二三度も子をおろすものは夥しく男もたぬははちとすると聞也江戸者みな被欺安し惣差引をたてゝみれは遊女より高價に成と風聞する也上方はみな此こゝろと見え出入の商人即金に拂ふよりもかけにいたし只賣物を預行故うかくとして晦日に肝を潰といふ手管こ

鹿ノ革ハ染
ヨク出テ下
直ニ馬ノ見
ハ反シテ其
スハ保方倍
馬ニシテ一
長三尺一
尺ニ切リ
アケ二尺
寸八寸九
程の革二
五匁也勿
壺染ニテ
コトナレ
合也眞ノ
革ニテ虎
申越可給

とに多し

寧府紀事 (弘化三年七月)

二百五十二

○廿日 くもり 昨夕より冷氣にて今朝は七十二度に成單衣にてもまたさゆる也さむく成たらは魚類少々はあるへしたまくなまにてくるものはたこ計其餘はふなの土くさき計也江戸にても日々に魚類たうへることもとよりなしならぬ來ては猶更のことなれと無きとおもへはなき魚のこのましくおもふ也

寺の多き奈良のさとしてなまくさのたま／＼あるはたこの入道

ならによく革を扱ふ穢多あり其もの申付眞の馬革の藍染をつくらせたりいろは十分ならねとも至るよく且長ければ少しの繼合にて柄まける故に武用にあよし幸三郎新右衛門など入用あらは遣すへし中々鹿の染革の類にはあらぬ也大に發明したりよつてねり鞍をみせて相談せしに中へ薄き木をいれて作りしことはあれと金のねり鞍の傳絶たるにわか所持の品をみて大に得たることありとて居木迄惣ねりにて五兩にて可作といふ

萬代もの且武用第一のもの也彌吉など心得に成ことはあらは申越候へねりくらのことに付近邊に武篇者あらは相談すへしとおもひて郡山にあるといふ故に夫か弟子の與力より聞かせしに無覺束答にて實はねりくらはみしこともなきかとおもはるゝ也細川に製作の明なるものゝあらは聞合給はるへし先此度のは居木迄今あるねりくらの通の製作にする積也○順作瘡を煩ひ引込隔日に振ふ也○勝頼か家來四十六を戰場にて老人といひしこと可疑此事先達候われ同年なれ共その様につかるゝ氣なし此ほと五分の勝負をせぬ故に鍵のすき都合二千二百本餘及ひきの刀都合千三百餘毎朝ふれ共つかれはせぬ也朝馬にのり候直に宗次郎市三郎誠一を折返し三邊ツ、劔術を遣ひ遣すなれ共くたひれはせず勿論御用向のひまには經書歴史をよみ萬葉集の一覽などにあらずも不怠され共こんきのつきたるとおもふこと少もなし只可怪は時に寄御養父母様の御相手又は嘉日なとに酒をのみみるに追々酒料減少しこの七夕などは中猪口三ツの酒漸也

寧府紀事 (弘化三年七月)

二百五十三

きのふあたりは涼しき故にためし見しにやはり同じこと也酒はもとより
 好みなから至る悪む故にのめぬはいかにも可悦のいたりなれといかなれ
 はかくふがはりのせしやわからす幸三郎より一合を度として可飲といひ
 しか夏已來之體一合を三度に可用位也よつて記之御隱宅の御説に而はあ
 つきとなま魚のなき故なるへしとの御事なれ共さにはあらずしかれ共身
 體至る健なれば少も可怪ことはあらねとも一體慷慨の氣を吐たれにおり
 〳酒を用ゆるといふかことき氣味故老境に入て更にのめすなりしにや
 可悦の至なから又可怪かことし聖智暗合の禁酒と成しは一奇也〇六月廿
 二日出〇七月六日出いづれも六日切之狀今夜六半時頃相届日々まち居候
 事故一同うち寄候を拜見いたす 母上様の御日記御こま〳との御事御
 筆とりは十分に御好みも不被遊爲候處書かくかことく面上に話をきくか
 ことくにて深くとも厚とも思召之ありかたさ一同落涙のみに御座候江戸
 の出水驚入なから前に記すことく城州邊の出水定而關東もいかとおも

此はわかくさの山茶のよき登り
 窓より人の目か
 みるなとみゆ
 る也遠目衣
 れにても附
 類の紋か

ひはかり候事に候おしけの不快さしての事なき様にいたし度候尤^{妊カ}身
 故も可有之哉いつれにもいたせ大事に被致候様と申くらし候事に御座候
 〇御沙汰書并彌吉よりの日記相届彌吉書物出精之由感心市三郎は 母上
 様之御沙汰具に爲申聞候市三郎も此頃は大によろしく候尙又爲心懸候
 様可仕候

〇廿一日 晴 又あつさになる八十七度也〇良右衛門か妻の伯母 大内
 の御装束するものなり夫かかたへ明日行とて暇乞に來る四五日も逗留す
 るよし也

〇廿二日 晴又九十度に至る 當月十六日に春日野より若くさ山は月見
 かてらに歌よみに行たりとて其様圖して惣年寄共其外孝美といふ町人の
 隱居など都合六人か其時よみし歌共をかきしるして家來かもとへおこし
 たり十六日の夜は月ことによくてわか庭の蟲の音なとよかりし也春日野
 はわか草山の麓にて山より麓へかけ萬丈之青氈を敷たるかことき芝生に

しまかほ不
分十町も
あつし庭
の築山より
はさほ山春
日山若くさ
山大佛堂な
と手にとる
ることくみ
る也

て松二三本あるはかり月と蟲とには上もなきところ也我はいまたきかね
と月夜にはかしこあたりは鹿のはや啼初ていとあはれなりといふ也歌共
實詠故にいつれも常よりよく出来たり奉行ならずは月夜に春日野の蟲は
聞度ものとして笑ひし也

○廿三日 晴 月並之講尺例之通也九十一度之暑也○昨夜中おさとあと
さけひて起みるくねまき單物を脱て行燈のもとへ出毒蟲にさゝれたる
とよひたれそれとひとしくわか足の上を何歟過行しか細き帯をおさとか
投しとおもひしかさは蟲ならめと起出てみるに何もなしおさとはいたみ
の甚しければ女共二人呼起して燈ひかゝけさせ蚊帳を外し蒲團とりわれ
も單物脱着替て所々をみるに何もなしおさとは手より肩腹以上三ヶ所忽
にはれたり例のやけとの符もてなて或は藥塗て先ねたり其内いたみもさ
りたりけさみれば格別のことにはあらずされ共蟲は何にや更にわからず
蛇にはあらず何にやしらす甚懸念也

○廿四日 晴八十九度 おさとの蟲のさしたる所手に少しくはれのこり
あとは全にかたもなく直りたり○ならより京都は十一里といへとも一
日路には近しよつて良右衛門か妻引明に出立せしかこの頃の大水にて所
々のみちくつれつゝみかけなとしてみちを廻しところも多く暮六頃に着
せしとけふ便あり○水野若狭守かもとよりならの人の月をうたをもとめ
來る四五十枚はかり家來か集たるを遣す其内眉間寺といふ僧のよみたる
に十六日の月を

こよひまた三笠の山にいさよふはけさいこ峯生駒山に入し月かも
純道といふ短尺手跡其外ともよし此眉間寺は佐保山にて月ちとりもみち
等の名所也坊主を名所漬にしたる故にかゝるうたも出来しなるへしとて
笑ひし也

○廿五日 晴例之九十度の暑也 ○夜五時頃六月廿六日附之宅狀來る
母上様少々御不快之處御快と之御事并御日記等も來る新右衛門幸三郎の

日記其外とも夫々相届久しく御状來らす故に大悦にて一覽いたす川留故なるへし三十日ふりにて來りし也

○廿六日 夕雨 昨夜御用狀來りし故今日は御さと必不快と存候處何ともなし此頃内とゝのひしとみえし也御狀に涙を流し翌日氣分必よからすありしは今迄はつかれし故也

○廿七日 晴 八十五度に成あつきたるかことし昨夕の微雨故なるへし○昨夜は廿六夜まちとてわかき山の頂に夥松火をもち登る也ふもとの春日野あたりも人にきはふとみえて庭の山に登りみるにあまりさす也わかき山の松火は星とあやまたるゝ也この春日野はかの飛火野とうたにもいふ所にて古今のうたにも春日野の飛火野の野もりといふことありいにしへならの京全盛の頃はこゝにて烽火をあけられしところなる故に松火もゆかりあるかことくみゆる也○酒のむ者は自然とのめすなりたるはよけれとも俄にのめす成たるはよからすとてきのふは廿六夜に付御隠

代々ノ儒ハ
譜代ニテ儒唱
一ト成シテハ非
ト成シテハ非
儒ト云也頼
額モシヤ其
口實トスヤ
含ハナキヤ

居所に酒可給との事故に試みる積にひるより下劑などを用ひ以前の寺社奉行を招きくらひの手當に十二分にむ積なりしか小猪口に漸十はかり壹合五勺には足らずして何分不吞却飯は三椀餘をもせし也今朝試に鎗のすき及ひきのすふり等數をましてなし曲尺などは江戸の平日の一はいましたとふみしかとも息何ともなしされは彌以體にかはりはなけれとも只さけの十年の禁酒に實にのめすなりしものとみえたり御神の御めくみにや難有事なりしかし何とも不審なる事也○江戸日記を拜見いたす○母上様御日記之内太郎のちるゝ敷相成候と義御認被遊候茂兵衛も骨ふとに丈高く可相成哉けしからす成長と事申參候林述齋大學頭か朝鮮人に被申候通當時之武士と申ものは學問其外の文事は悉武を講する閑暇の心懸に武事は本職業故健にさへあれは先武士の一事はあると申候ものに付一際目出度事に御座候只々貞實に若夫婦心を用養ひ立可申候林家などのときは日本のいにしへにいふ譜代儒たる人に

ても如斯なればまして武役のものは武藝第一なるへしされ共十五歳以下に於て武藝はあまり役にたぬものなれば八歳に於て手習算術素讀をばしめ候可然か算術はひら算をしらねは軍學にも經濟學にも大に困ること也近來算術を町人のするものと心得しは武術かたより候而書物を僧侶のものとするころよりの流弊なるへし八歳にして小學にいたり書數を學とみえ六藝のうちを數を加へあるにてもこゝろあるへき事歟算術と水をおよくこと程知る人としらぬ人の違ひあることはなき也孫子にも兵法一曰度二曰量三曰稱とあれば算術をせぬといふは一向にわからぬこと也武士の博學などは必とすへき事にあらず四書七書小學をあら増に心得たらは先可なるへきか太郎に眞實を專といふことは眞實は幼年より教に於て眞實に成也利口に於て才あれとは少も思ひ不申候利口に於て才あらは身を亡すいましきことのつある譯に成也いかに眞實に仕こみても元來才あらは徳のはたらきと成て眞實もよく出來へき也才力と智恵ありて眞實ならず

は必家を亡すへきもの也可恐こと也よつてかくは申す也大熊石川を不相替暑中見舞來り候由例之通相當之返禮可然候其外親類縁者等之義はいつれも是又昨年の見合可然候〇おしけ不快追々宜着帶も相濟候由目出度候別而よく心を附可被申候〇小林を蒲萄并菓子難有候菓子はあしき匂ひ附ふとうも少し味かはり候得共みなく打より候而母上様の思召ありかたしとて給申候とても菓子など三十日も馬に附ゆられ候而は味ひの變らぬといふ様には成かたしよつて先達而差上候菓子等いかにやと奉存也ならぬはよき便に於て差上可申候得共江戸に於ては必御廻しに不及母上様の御なくさみに可被遊候小林は別番之手かみ品を見計ひ添候而被遣可申候〇市三郎を書狀差上候とて御悅之御沙汰早速爲申聞候同人此ほどはよくなるといふ氣少々附候歟と相見候義有之候各日に劍術馬術日々素讀手習いたしフレ候義など遅クフレ早く相止おりくゝゑ顔をつくり答など仕候間夫丈之義は上り候如くに御座候〇新右衛門日記之内雷のこ

となら計かと存候處江戸も同様もおさと其外恐れ候體追々の日記に御承知可被下候○兩國邊よりの本屋より貞丈白石等之隨筆御取寄之由至極之事と悦居申候兩國邊の本屋とは玉瀾堂に可有之歟彼書肆に候上はなき書物はなきと申位之書肆に候二先生之書御用向を暗に助け候義多く有之候別而筑後守のものは調役などはよまて不叶事と被存候別而此ほとなどは可然候され共西洋地理其外之書昨年の書は今年役に立不申候と申候様に西洋學者は書物之扱ひかた漢書和書と違ひ曆本のことくいたし候間其御合に可然候高橋の銅板輿地圖昨年出版之坤地輿説とか申候書に引くらへ候而は大相違に銅板は西洋人コヲークと申候もの、安永の測量に候處如斯に付新敷書を好み候も尤に有之候其上近來少々蘭書の元書譯文に而も出來候ものは博覽の聞へある山村昌榮などに立まさり居候と之話に御座候間よく出來候人の御たより譯書御かり可被成候先年高田屋金兵衛一件之節古河候に鷹見十郎左衛門蘭書扱候而且藏書多く候間大に力に成

申候此ほと下野守殿侍醫に西洋學者有之候歟と兼々承り候間大膳亮殿之御家來の御たのみ候は、自然に書物被見可申候十郎左衛門方に御申遣御借候而もよろしく候御面話候は、同人はあふなき事は不致經濟の事も心ある人に御座候○白石は日本にて西洋學之はしめなるへし此人は元來敏捷なる人に而意大利亞の人ヨハンと直話いたし候節之書物西洋紀聞等有之候其後は紅毛夷之加比丹江戸に罷越候節に行向ひ候而對話いたし采覽異言等も出來候義に有之候夫等之節御申越之通金地院之異國日記等涉獵ありしものなるへし異國日記之外異國御朱印帳と歟申候様成書も金地院に有之候と覺申候右は堀大和殿寺社奉行之節金地院を爲御出其頃一覽いたし候而例之誥國要典の末の書目書拔暹羅^{ムロ}國を山田仁左衛門が呈書等寫置候義に有之候金地院の國初の頃の崇傳と歟申候僧慶元^{ケイ}の頃東照宮など御用ひの學僧に而彼人の申置たるは白石の書にも國師日記を案するに申候而は證據に引有之候東照宮御葬送之節天海僧正と大に申争候

由世間の沙汰有之候と申候義なども彼日記に相見候清俗紀聞の事御論御尤に御座候 皇國よりは不手廻りに非人乞人など必多可有之其上唐土は正史に前後の構ひなく偽を書有之驚入申候一事を申候得は宋の亡ひし時戸千百八十四萬餘を得たりといへ共南宋の人別かくあるへからざるは誰もしりたる事に元世祖天下の戸千三百十九萬餘とあり南宋亡さる前に元の戸百三十五萬餘ならては無之わけに當るこれ等之義はつか間に直に相分候義を首尾不都合之義を書記し其外禹の時に諸侯萬國あり其後千八百に滅し其後武王に従ひまいらせし諸侯八百ありたるところ春秋の時にいたり大に減したりなどあれ共禹の時中華といひ中國といふものは秦楚吳越等も加り不申候間至る狭きものに可有之候處萬國の諸侯あらは中には二百石三百石の諸侯もなくては不叶譯に八百諸侯といふも大數をいひしなるへきを算盤勘定にしてあれは正史等も偽多き事故中々來舶人のはなしなどは公事人へ目安返答書よりも叱らるゝ世話かなき故大にか

けねあるへし夫は大儒先生の筆談にあらおしはかるへき也兩國相會し天下の大道を預り知る人といふ先生のより合話如右まして只のはなし千萬にして一事くらの事かもしられすされ共清朝などにか成豪商ありや日本の考にあらはかられぬは汲古閣といふ書肆の藏版夥敷事に右の筆工板木置所等いかなるものに可有之哉汲古閣本日本に渡り居候は誰もしりたることに候處右に通に付身上いか計之ものに可有之哉日本に追々御世話有之候得共大部之書は町人共の力ら不及よつて諸侯に御世話有之漸通鑑一部出來候譯を以考候得は風俗にも寄可申候得共汲古閣などの身上は考之附不申事に御座候○押送り船之説尤感服至極の事也○母上様庭の御世話にて草もなく奇麗にて桔梗女郎花等此ほとさかりに菊の御手入も其しるし相見候由御庭の事第一に御慰に相成御體を御動し土を御ふみ被遊御養生之至極と悦居申候御役宅は夫に引替外庭はおりく穢多共之役に草を取候得共中々参り届不申土塀の近邊にはつかに葛花のいろをみ

せたるはかりに而得知れぬ草大人のかけを没し可申位に有之内庭は小遣
ひのひまなとに而は中々不届頃日も泉水築山之向に萩と小松はかりの芝
原有之蓮池尺二の弓場なども有之候間二三百坪程の芝生に可有之萩三十
六七株四十はかりも可有之哉此ほとさかりに付參り見候處芝生のしけみ
全芝の百日かつらにて露ふかくあらしに折れし松か枝なとところ／＼に
ありてあれさひたる體いと／＼さひしく候しかしおさとは日ことに參り
朝露に萩のたわみし姿得もいはれす夕月に花のおほつかなくみゆるけし
きあはれに候なとてたのしみ候得共いかにも／＼草ふかくめつらしき
は居なからにまつ虫すゝ虫をきゝ候事に候得共きゝあかし候ゑは江戸の
くつは虫遙にまさりたると覺申候○朝鮮人か大閣殿下に被討候已前怪異
ありけるをしるして和本懲惡錄
四十二丁ウ白虹の日を貫き太白の經天黒氣接天盤地こ
と十餘年はかりに而其餘の怪事記すにいとまあらすと有之候其外鳥獸の
怪事等丁十三までに記し有之候元書御覽あるへし○趙翼廿二史劄記三十四

外番借地互市三十五明末書生悞國と申ケ條彌吉に爲調得と御覽あるへし
其内に秦檜和議云々といふこと有之夫は宋朝を論せし内に有之候と覺申
候○先年拙者しるし候宋名臣言行錄餘論之内仁宗時西戎方熾と申ケ條有
之候右之稿本宅に可有之候彌吉に爲取出御覽あるへし○幸三郎日記忝
し度々母上の御機嫌伺として被見又は灸事など世話有之候由不相替之深
切母上にも孝行千萬に候○ふち之義先便申遣し候定而御承知と別段不相
記候○直胤いまた歸り不申候哉不出來之品に而も宜候壹尺四寸前後之か
け打は有之間敷哉田舎に而はよほと被用候遣ひ物にいたし候積に候御尋
御序に御申越可給候○丙午のことさて／＼色々之義有之洪水までとはけ
しからず候最早あるましく目出度恐悦之御事に可有之候丙午丁未を六ヶ
敷申せしはいつ頃にや南宋陳亮上書に石晋失盧龍一道以成開運之禍蓋丙
午丁未歲也とて品々申せしか初にやされ共よくくりて見たらは丙午に目
出度事もあるへし既に江戸の御城築も丙午のとし也萬世の御基天か下へ

比類なき恐悦も丙午にありしならずや陳亮か上書の意は丙午丁未近く十年之内にあれば御愼あるへしといひしこと故あしきにはあらずといへ共天より自然に来る年を六ヶ敷いはむより人事をよくつゝしみて危からず上下つとめゝて事をなす上はさして患るに及はぬ也當年七月本所を葛西領其外之出水之御世話のことくならむには堯の九年の水にて人の災害にはならぬなるへし遠國に來りて江戸の御手當の行届をおもひはかれは別段なること也一事を以云ふときは奈良に天災ありても町會所のこととき御扱はならず人足寄場といふものなければ入牢物百人之内四五十人は再犯也その筈也出牢して一錢もなければ餓死するより仕かたなし餓死を守りて節を動かさぬは賢人君子のことにて無頼の無宿を無錢に追拂ふこと故又盜をせよかしとかり歩行かことく歎息之至也われ奈良へ來り五月二日に始て入墨又は敲之もの十六人計ありしか其再犯頃日迄に四人召捕壹人は野非人に成て餓死したり可憐のことならずや遠國へ行ねは 御膝

元のこととはしれぬ也たとへは原吉原にてみれば富士はきしより高からずおもへとも筈根に登りてくたひれしものち顧みれば筈根はふしの麓なる野路よりも遙にひくき也其節初ふしの別段なるかするゝ也 御膝元をはなれ難有ことをよく知る是に似たり

○廿八日 晴 あつさもさむさも彼岸までといふ諺の如く朝夕はよほとすゝし朝七十六度八時頃八十六度也○松平右京大夫卒去に付 公方様右大將様御定式之御忌服被爲受候旨所司代を申來るに付今日の月並之禮なし○おさと不快大によし六十日ほとげろゝなしされ共不審なるは例之通の筆を執ることすきなるか更に出來す文などを書と半にして氣くらみてかけす押て書むとすれば書體けしからず惡敷なる故にかゝすといふならへ來りうたもよめすといふしかし縫裁のつもりものよみ本をみる源氏物語をみるくらひのことは更に不變氣分も元氣もよしといふ也いまた本腹せぬ故なるへし兼而は大和の紀行をかくつもりにも少し催し見しか右

之次第に付何分に出來すといふ也

○廿九日 晴 御機嫌伺として出京可致處中暑に付用人使者を以御斷申上るかゝる先例も多くある也

○晦日 晴 來月四日に鹿の角切ありよつて所々鹿駈集るところ一疋の大鹿ありて手にあまりたりよつて町人之若もの共打より取押たるところ過にて殺したりよつて一乘院宮并興福寺大衆共吟味願申立る其勢梁惠王に不滅われいふ中秋にいたれば鹿の人を傷ふ故に奉行所聞濟に差押て角をきる也鹿の角をきるは鳥の羽をきり人の指をきるにも近し既に鹿を傷ふことをゆるす上は過て死にいたるましきにはあらずこは常典を以取扱かたしといひしに大衆寶藏院等大に服したりいにしへは鹿を殺すものは興福寺の山内を引廻してさる澤の池のほとりて石こつめといふ刑に處し或は首を刎たると云そは定る戰國以前のことなるへきを國家の例典のことくこゝろ得居るにはこまり果る也つるころし鹿ころしのつみ死

に及ふといふは梨園の戯曲に演義せしものとおもひしに其實物に逢ひて困るも一奇談也

○八月朔日 今曉七時を四時頃まで迅雷にありて電光地を照しおさとなしはひれふす也九半時まで止又迅雷に如前この度は御隱宅御夫婦様さへびくくと被成候ましておさとに無論八半時頃止今曉を雨ははらくと池水に姿みせしはかりにてあつさいふはかりなし○今日は八朔の禮受る家來共并近習格儒之もの徒士格醫之もの共其外出入之町人古梅園之類は表之居間松平甲斐守家來其外諸向貸附所用達共等は小書院與力同心其外惣年寄町人共兩なら坂の穢多頭迄は大書院に禮受る與力は二之間に辭遣す三之間は同心共惣年寄共は與力共の罷出る間再席に末坐へ出る町々名主年寄共之類重立候町人は落椽は出る穢多は砂利は出通りかけ立なから禮受る郷同心共も是又立なから禮受る郷同心共之罷

出る席は表玄關廊下也

兵は拙速を
貴と孫子も
避なきかす
なを教へし
なるをへし
かて位へし
は又別段の
こともある
へし趙充國
か策にはし
めはくみす
も概にさい
ふへからに
論は軍容と
にふれすと
いふことと
りにおもふ
もふもふ也

○二日 晴 八十八度夜五時過に成いまた八十五度也此節先此體也○此
ほと孫子の十篇よみを又はしめたり兵は詭道也といふは偽のことをして
敵を欺はかりにはあらず味方にもはからぬこと也といふ論に至り感心
する也我等か了簡ならば誰もよきと思ふことに相談して夫に隨ふ也其上
必勝の工面をする也これみな敗るゝ道理也衆評にて必よろしからむとい
ふ馬鹿なるものにもよきとおもふこと故に申さは四文錢を四文にうる
勘定故其手をくふものは満天下になき也よつて味方さへにもはかるへか
らざる事をする故に敵にてもはかられず其はかられぬ所は行故におもは
ぬ所は出て勝也たとへは谷風程の相撲取にゐもしらされは小石につまつ
きて投らるゝ也これ小石の強にあらず不慮に出れば也然るを衆評して身
をのかれ場をこしらへ非常のことをはかるといふは戦場の必死のことを
いふにもたらぬ了簡也それ故にすることなすことみな敵にしられて大敗

に至る也孫子に戦勝ことを必とせずといひたり戦場のことを説には孔子
同前の孫子にゐもきつと勝れぬといふを身を大丈夫にして急度勝たむと
おもふ故に戦の法に背故其上のはなしはなき也李晟か吳元濟をとりこに
せしにてもおもふへし味方かみなく是は吳元濟か問者に欺れしとおも
ふはかりの事をせし故に吳元濟か不慮に出し也此場合既に甲陽軍鑑にも
ありと覺へたり十人か八人迄よしといふは下策十人か一人か二人ならて
はくみするものなきは上策也とありしかと覺へたり謙信もみな上策とい
ふことに信玄ののるへきはつなしよつて下策に附かむといはれしにて河
中嶋の利運もありし也繼上下にて疊の上の論を相手あるものに用ゆると
必負る也とおもふはいかに彌吉の答きかまほし○今日は奈良市中にある
寺院の八朔の禮受る拂曉より來り手札を置いて歸り四時に來る也居間二々
間に禮受るも大書院もある也

○三日 晴 けふは遠方々寺社々禮受る也ふるの神社金剛山天のかぐ山

等の類出る也○きのふ初松魚也とて飛か如くにして持來りたり江戸にて四月にほととぎすの初音とともにつるかき體也如脱カ至る小也みれば松魚にあらすめしかといふものゝ一尺はかりにてよしやめしかにもせよひなより出し女か木からしに逢ひしことく頬のあたりすもゝいろに成てその臭氣堪へマからさる也さすかすきの某もその臭氣におそれて手を出しかねたり絶倒

○四日 微雨 此ほととはよなく鹿のなく也春日山のほとりなどにて妻呼こゑいとくあはれなり角の二またなるは二聲三またなるは三聲つゝけてなくといふ也○鹿を過ちに殺せしものゝ事に付鹿の書物類多ありけるを調みるに世にいふはみな聞おちをせしにて全に鹿を殺し大垣成敗と云事に成しは寛永十四年四月廿八日にありしまゝ也享保の大垣成敗のありしは興福寺の衆徒を殺せしもの也大垣成敗といふことは興福寺におゐて山内の神木を盜伐し寺僧を殺せし行カ神鹿を殺此三ヶ條に用る事也何を以大

今朝氣すに俄に
冷着な單衣來
共おみ入と申
也たさ及のヒ
わは隠居さ申
兩御にわた入
ま織に成た入
羽むはへかた
のさむは秋暑
君さるとはひ
もく籠といひ
もの也

垣成敗といふかはしらねとよくみるに引廻し獄門といふを大造にする也寺僧を殺したるもの享保にありし時も衆徒共相願ふ少しく其式を爲たり其後はなき也河原者甲冑を帶するよしなとみゆる故に戰國の餘臭を頑固にする事に取に足らさる事也今なと若あらは去年の曆なるへし一體むかしは春日の鹿の市中にて手荒のことのならぬにまかせてあれ歩行たることゝみえたり古き書物を見るに春日の鹿七八月に角生長し八月の末を九月に及ひては鹿さかり眼中朱をそゝきたるかことく角を土沙のうちや突こみ磨立て劔戟のことくにし人をも脳ますに付寛文十一年なら奉行神谷備前守江戸の伺角をきることをはしめし也最初は興福寺にて角をきるゝをいとひ角のある内はをしかを矢來之内に入置しに角突合をせし故に鹿多く死したりよつて今の如くには成し也此角切の時は鹿の死しても構はぬ也○興福寺よりいろく申立之内に奈良のもの共鹿の角切は一世代の樂しといひてさわくよしあり絶倒也され共今も然りけふは角き

りとして與力共門前へは棧敷をかけたし都あまつりの通也奉行一代に一度は角切をみる也奉行之門前へ鹿の飛越ることならぬ様成なる矢來をいひ奉行はいろかはりの紋附まく與力共の居る所は並のまくうちわたしこしかけ門番所などは奉行之奥向の見物所也奉行之みる所にて十疋ばかり切残りは與力の門前にあきる也警衛のもの事かましく立ならひ矢來之内の鹿を追入たるは鹿と穢太共か敵討とも可申歟與力共か宅前にて一疋ツ、角をきるは全の祭禮おとりの所望に似たりこゝにては前にもいふ一世一代のたのしみと云まで打興することなればきつち町の遊客などは穢多共に密に金を與へあけやの前は呼角きらすることも内々はあることにて是は吉原のはるのはしめの大黒舞のにきはひにも似たるへし妻こふ若男か何の妬心をおそれてか牡鹿の角をきるらむ神世にもきかぬことなるへし川柳ならはかゝの角はきれぬにならも大こまり○奥かたはしめ庭より外へ行ことなきにけふはうらのかたより門番所は行といふもちとはれか

ましゝやまさ其外きのふよりのさはきにてまさのかみをおさとかなてつけてやる其外鬢をかきもらひ遣ひ切たる白粉を傍輩をもらひて間に合せると都あ鹿をみるに猿とりの出しにてもみるはかりの騒もおかしわれいふ人は都あ貫目とはゞかなくてはならぬ事勿論也女共右之一條におゐてはならはおろか上方中をなへ數ふるともおとらしと夫のみはこゝろつよしよつて常よりひきゝ鼻を高くいたし候へといへはみなく笑ふ也○晝後門は行みるに夥人數也けふ穢多揃の半てんを着究竟のもの共多く集りたり鹿の群來るにはしめの鹿へかゝれば跡の鹿かならす其人を突故にみな後の鹿へかゝる也別あ大成を追こみ來れり犢の如し繩もてつくれるさてを角は打かくるに鹿のかたにて野分の薄のことくさまくゝに角を動してかけさせす打かけたるまゝ人を牽ながら逃行を大勢かうちよりて先つ角を數人にてとる也角をとられてあと足にてはね廻る體よほとこの勢也頓て數人よりかゝりあと足をと倒してのこきりにて角をきる也鹿に

聲を發するもあり黙してきらするもある也左傳に鹿をとるかことく諸戒戎カ是をあしとり何とかいひし諸華とか鄭晋とかこれを角とるかありし實に其ことく也角より血のいつるもある也同心も、引與力着なかしにてやりを爲持與力ははしめわか前につい居たりしか立て世話をやく也其體よほとこの事也穢多共なければらるゝもあり或はけられていためるも或は突かれて血の出るもあり穢多共揃の半天も土もてつくれるか如くなりし也直にころすことならば手はあらさらめ然をいかにも疵をつけぬ様にとこゝろかくる故に人の多く勞す也はしめ角に取懸るを鹿の投る體などはよほとこの事もある藩士の柔術先生木辻の娼家に來り鹿を捕脱アレカんとして被投といふ也まことなるへし奉行所門前にて角をきるは市中にゐることに大成しかを撰ひ置追ひ込事之由也九半過るかゝり十九疋の角をきりたり内三疋はことにあれて見物のうち狂ひこみ見物からかさを捨下駄のはな緒をふみ切て人なたれをついてにけゝり辛してさでの如きものをかふせしか夫をか

ふりなから人を牽つりはしり行を漸に押て角を切たり末の角をきるには挑灯をつけてきりし也

○五日 雨 けふは東大寺春日のもの共八朔の禮也神主社家共諸大夫は狩衣を着し無官之もの共之内重立候分は大紋也これは往古よりの仕來也といふ也○昨日之穢多共は鹿角を被下生角は壹疋を廿夕にも其餘にもなるといふ刀かけ鍵かけなどに造り股よりさくることなき故也とそはしめにさての如きものをよく打かくるか或ははしめに角をとりたるもの角をとる事之由夫故壹兩に成穢多共も二百文に成穢多もあるといふ也○きのふより所々にゐきりたる角を奉行所へ取集てけふ穢多共はわたす也其内に大なるはかけ目五百夕あり都合鹿の數七十餘也尙のこれるは人を害することあれば切る也彼岸の頃に成と鹿多く春日の奥山へかくれて市中は少也是は角切のことをしれば也よつて手段して釣出す也角きられし鹿はさほ川さる澤の池などゝ行て首のみを出水にひたり居るといふ也いかな

るわけにや鹿は雨を喜ふものに雨ふりたる時は力もつよしと也陰を好めるもの也とみえし

○六日 晴 朝六十九度迄になる裕に羽織を着す○板本といふものゝ出来しは五代なりときゝしか既に印章といふもの三代よりあれは板のこゝろなきにはあらざる也今奈良の二月堂の観音にある東大寺什物の板木に空海の書也とてさしわたし三四寸の丸き多羅尼の板木あり火中に残りて少もやけす寶物と成りて一枚押たるを五百疋の守に出す也つけの木の如し是は唐ニテ黄揚の印を用ひしことあれは其類に板の見合にはかたかるへし東鑑に後鳥羽院御追福の御ために摺字の法華經供養といふことありと覺し是をたしかに書籍にせし證據なるへきか頃日法隆寺へ巡見として行ときかしこにもふるき佛經の版ありといへはたゝしみるへし板本の五代に初しといふはわか覺違ひにて夫よりもふるかりしにやかゝること一寸しらへみたきにも書籍なく人なく勘計にて當惑せり

秋ふかき庭の千くさに故さとのきくの花園おもひやらるゝ

○七日 晴 ひるは單物にてよろし○富塚順作之家内出産いたし女子出生いたす母子とも達者也此ころをあいほうは民藏方に参り止宿すると云○九日 晴 よほと冷氣に成○東大寺に鴨毛の屏風といふものありかも毛にておりたるものといふ也 光明皇后の御物無紛寶物に世に知るところ也かもと氈の和言也鴨はかり字なるを鴈鴨のかもと心得雉頭裘のことくいふはいかにやあるへき

○十日 晴 朝六十一度に至る十日前とは三十度を違ふ單物にてはなかゝいられすみな裕わた入羽織也○おもふにかく冷氣の早きは四方に山ある故かこの體にゐは關東はよほと冷氣強かるへし若哉奥羽なと早き冷氣にて稻くさの青立に成ことはあらずやおもふ也され共兼あきくに奥羽は稻のみより早く九月の節にいは刈取こと半に過といへは此ほとはよほと穂のたれて早涼の患ひはなきかもしれぬ也○此ほとむさし野春日

山のあたり秋のけしきことによしといふ也柳助虫を聞に行かへさに尾は
 ななどあまた手折來て歌添て出したりこゝろ故か春日野の尾はなはいろ
 まさりたるかことし長屋は鹿の音よくきこゆるよし也さ保山のかた春
 日のみねなとにてなくはいとくあはれなりといふ也ゆふへおさと庭
 の山のあたりよりうらのはたもの植たりしあたり迄行て聞しか五位鷺の
 聲の外はさかさりし也○けふは江戸のやしきは妙顯社の祭なるへし太郎
 か定而供物へかゝりいたつらするなるへしなとゝおさと其外一同よりて
 いふことにそ○貞觀の儀式に試鼓吹司てふ條あり天武紀に鼓吹調練のこ
 とあり人磨か歌に「とゝのへるつゝみの音は雷の聲と聞まで吹なせる笛の
 おとは敵見たる虎かほゆると諸人のおひゆるまてに「かくあり以上のこと
 を合せみれば日本の軍今はかね太鼓はかりなれと鼓の外に笛などを以異
 國のことくかけひきをせしにや其頃の軍立練練のことを記せし書ありや
 小笠原被參候は、彌吉問合てしらへ書目御書記御越可給候

小角
 大角
 用ニ
 紀ヨ
 ルモ
 シモ
 ヲト
 ヲト

○十一日 くもり 頃日絶て便少かりしに川あきとみえて七月廿九日出
 一昨日同廿六日出は昨日六月廿四日出は今日書狀到來いたすよつて家内
 打よりよむことたとへはめつらしき客の來れるかことくとりゝのはな
 しにて何も出來不申候こは御用狀來ることの例にてさて夜は必ねふられ
 すみなくおなしこと也○彌吉日記之内詩三千篇の事欄外書に而委細相
 分り候追而見出し候得は朱子或問に詩存者謬亂失次孔子自衛反魯復得之
 他國以歸定著爲三百篇とあれは雅頌各得其所といふ本文之通文公も被申
 たるなるへし論語の本文に而も削たることはなく申サは萬葉二十卷にい
 るましき集などのかりたるを眞淵か訂正して復古せしかことき意得其所
 といふ三字にてわかりしかと追而おもひ居たりしか被申越候趣に而いよ
 く分明忝候○大筒は手をかけてダ、ヲいひし夷人の風聞いかにも可憎
 意味あり○彌吉の腫物之世話幸三郎いたしたると之事其外灸事之はなし
 等追々日記にみゆ深切之程乍例感服○七月十三日の月のあかゝりけるに

て斷腸のよしその頃奈良も同しことにて既其うたなとよみ候ひし也十八日の條に豊藤淺野に參るといふ末に委細別番に可申上とあれとも不來候別番は取おとしか○酒井捨吉病死のよしいかにもく歎息之至もはや十六歳に付四五年には免許にも可成間成大先生の跡つき不遠とおもひ居しに大に力を落せり酒井先生は三年はかりの間毎朝かたち二度勝負二度ツ、必自身に遣ひくれられたる人也其御人の跡故大によりたり○魂祭にさひしかりとのこと奈良は物ことのかはるにていと、故郷をおもひてたまゝつりうらめつらしきならの葉の風に玉ちる袖のしら露故さとをあやしき迄に忍はるゝなきたま迎ふ庭火たくにもなと申せし○われ早く御奉公に出し故別番役にたゝす物のならぬを毎度歎くところさにあらずとて文公の語録の抄出御越し忝候なるほとわれあやまり也日々のことを即坐に實學問といふことはいひなから矢張御奉公と讀書と別々にするこゝろあれば先達のことくには申せし也語録右之

ところばかりの全文抄録して御越し候へ一覽候心懸可申候○新右衛門日記に坤地圖識等之事先達申進候と暗合也入用も候は、差越可申と之事忝候夫等之學問近頃おもひ絶申候追御たのみ可申候○河嶋隣藏新右衛門厚き世話に養子に參り候由よき取計に候善事を貯候ほどの讓物は有之間敷候この頃ゆるする葉といふことを

一ひらの文ゆるするともゆるすはの子にはゆるすらぬこかねならましと申候ひし子に道具を讓候得はよからぬ子孫のあれは二そく三文にうり其時武篇にて大切のところ心をかけ置しは一文にもならず道具やかよきはくち也といふはかり也金を讓れば生にて遣へるもの故三年のもの一年にてつくる也其時一夜につかはるゝことを金の取廻しの出來るときよく施せ置はまたもよきかことし其外の工夫はさらになき也我等新右衛門とも一向に道具類は少もなかりしか今さして困候事なく候間これ全御先祖の隱徳の御讓に不自由せぬなるへしとくれくおもふ也徳つきて

は隨父の大富有も十七年の間に跡もなくなりたり天下を治むる人さへにかくの如し其餘ちりのこときものは猶更のこと也可恐可慎也新右衛門の取計うれしさにこのことをしるしてみつからはけむなり○隣藏あとい根本の世話にてたしか成もの被置候由目出度候 母上様も兄弟のかくくらす御恩を思召され候而御心を御慰候様にと奉存候○新右衛門初孫出來可申と之義何より目出度候よめに女大學の類夜ことに一度ッ、爲御讀可然候○母上様御日記太郎の智惠附たる豊太郎の成丈の體さそくと奉存候忍いの様子に而おもひはかり候事に御座候忍い月をみてのゝさまとて拜みト、かんしやくカ、あんよ少々そめほうボンくといひておかみ候由餘右に准したる才氣驚こと多く且ますくいろ白に而奇麗也俊藏そめの愛すること御察しあるへし右故御ふみことの御ことつて爲申聞候處いつも思召難有旨申聞候○彌吉養生もよく學問出精扱又よくしんほういたし氣のとくとの御沙汰まことに御日記中にての第一の喜しきことに御座候さ

れ共奈良へ参り若きもの共くるしませ候はまことに藥にておもひもかけぬよき藥を可愛き子にのませ候義に付此上なき不計幸に御座候若もの共辛抱いたし候あくるしみ候義を御覽のたひくによきこと、被思召候而少も御苦勞きのとくなと、はくれく被思召さる様奉存候彌吉事私共と違ひ簡重寡黙にて高橋の曾御祖父に奉似候美相見候間いくらも辛抱を御させ御みかゝせ有之候方と奉存候○肥後の大雷くまもとへ五十ヶ所落たるとはけしからぬ事也當年は諸國大雷とみえ申候佐州出水に而小木湊に而三十四人溺死是は山上より出水と承れば世にいふほらぬけ山しほのるいなるへし○生身玉差上候御挨拶恐入候はしに御認被遊候を先刻見落し申候○彌吉御菩提所に参詣いたし候而取計至極よろしく候○幸三郎ならの夢を見候得は必便ありとの事毎々承り候十五日の便も同様のよしさてく不思議なること也至誠の故なるへし毎々の事故偶中とはおもはれ不申候○金子御受取之由承知仕候○八百不相替深切によくつとめ候由兼而

實意のものに見受候處無相違大慶也○おしけ不快いかにくと申くらし居候處全快と之由此たひにて相分り大慶也○表之日記茂兵衛出精さてよく心附候而安心也例なから筆よく廻り候而分りよろしく候下女共人少に而茂兵衛の妻よく心附世話いたし候由おさと大よろこひ也しかし夫婦共一かたならぬ骨折と申くらし候

○十二日 雨 尙古小説にある春日社にある古硯筥今のやたてかたち也取寄みしに巾二寸餘長壹尺はかりにて小笠民平所持之矢立のかたちにて中に筆のくゝりなく上に合ひくちのかなものあり當時以用ひになるよしにて兩三日かし置たり小笠原氏所藏の矢立の圖は同書にみえたり所持主の名なし春日の社のかたはふたにすかしあり尙古小説世に被行ものなれば元本に而御覽あるへし春日の品はなみの松の木に而内のすゝりなともなし用ひかた尋置たり追而記すへし○小笠原氏に過日之印狀之禮よろしく相願候○蛭川能登守たのみの春日の土器尋みしに日々に新になる神

伊勢は二間
四方は六尺
日方は四尺
方は六尺
わたりは四尺
まりは二尺
如しは四尺
皇國の實素
萬國の實素
れは美然風
に天竺の風
玉は金銀珠
用を磨す
意味を解す
はと也
天の御子
宗廟より
にあり
其道は尊
其品を尊
本風を尊
やよか
いか

具なれはいくらも捨りに成とてくれたり御膳も土器にてさしわたし尺はかりの丸きふちもなき盆也箸の臺も江戸の大名にて用ゆるはし土器をたかつきのことくせしもの也たかつきのこときもの二ツありて一ツは真中にふとき箸をたつる程の穴ありそれへ野菜物を結ひて奉る也前の日記にせるせし萬葉にみゆるくゝ立なるへし野菜のくきあるかことき類ならては結ひ附かぬる故に莖立といふにや序に御供物をくれたり土器へ精げざる米の飯をもりくろき丸き三寸はかりのもち一かさねうとんの粉にて木の葉のこときものをづくり油にてあけたるもの其外御みき也酒は決し酒屋にはつくらせす社家共か手つかからかもすよし濁酒にてさらくとして豊島やの白酒の氣つよきかこときものよしわれははつかに唇潤しまゝ味しらねとも御隠宅にてことに稱し給ひし也よほとよき酒也と仰られし也土器は右之通之品に付庵末にいたしたらはみなくたくへしさてよほとめかたありよつてつめ物をいたし箱に入れて江戸へ可送とおもへと便に甚

こまる也よつてよきたよりを得來春までに送るつもり也右に趣蟻川に小笠原氏あひ被申候は、咄ありたく尤今便返事をも遣す積也よつてわれよりも粗申遣すへし○けふ給人高村四郎妻出産女子出生之届を俊藏出したりわれいふ子を産するはよけれとも奈良へ來り半年之内女子計二人とは順作も四郎も畢竟不精等閑故なるへしといひて笑ひ出したり○誠一小僧之書狀よく出來たりとの彌吉の稱譽申聞かせたり大に喜し也宗次郎に母上へ御狀奉りしやときくにいまた也といふ得といましめ置たり近日奉るへし○母上様は新右衛門の梅の植木はち差上候而夫の御かゝり被成候由新右衛門孝行也工夫よく行届と之義追々承り候而感伏之義に有之候かゝる味ひは新右衛門の如くには參り不申候義と汗顔之至也幸三郎かいろくの御世話申上候義等いつれもいつれも孝行之義ととりくおさと、も咄合候而よろこひ候是母上の御高運故なり○土屋より返書來る一覽いたす處ところかはれ母はおなしおもひの體に付土屋の心をつくす様子

みえ例之誠實なる心の程あらはれ候而彼是とおもひ合袖をぬらすこと、も也○奥州のもの、言葉の鼻にかゝるは抑普天の下率土の濱誰かはしらすらむしかるにある奥州産の者奈良のもの、言葉は鼻にかゝりてきゝにくしと二人まで口を揃ていふ也されはおのれか聲は更にしらぬとみえしこれは我等か行跡にて人を議するによく似たりされは何事も先知らされはならぬ事也よくしれはせぬ也致知の説脱アルカけにもとおもひし也

○十三日 くもり七十九度 これこの節の正時候とみえたり○友野霞舟佐藤先生は此日記をみせしとみえし佐藤一齋先生の文通之内にみえたり兩先生へもとより可秘ことはあらねとこの日記は専ら母上の御なくさみを主として且は彌吉等の常のはなしのことを記し全江戸にて母上の膝下にある體を筆にかへておもひ出るまゝのことを記せしものなれば實に人のみるべきものにもあらず戲言又は前後あはぬことなとしるし校合訂正はさらにもいはす書おとせしまゝのものなればいはゞけしからぬ

笑草も多き也右之次第に付霞舟一齋の兩先生など一覽候は汗顔はいふにも不及叱りこゝとなとあるへくもしらす深く愧入たり逢被申なは叱りのなき様によく申わけあり度候いたく恐入たると御申候へ

○十四日 くもり けふは兩御隠居様并市三郎庭口より民藏か小屋に被爲入度と之義彼を兼々内々申に付聞置しに其旨兩御隠居様の御聽にいれ候處殊の外御喜ひて民藏方の庭より御出候は彼か方よりわかさ山かすか山よくみゆれば三笠山に月のほるを御覽との事也又ものは御まへは不被出候は良右衛門并貞助等か妻參るとの事也民藏考にこゝにては門外に而一點の唇を御うるほしのこともなければ彼か宅に限別段之取締にて御入願ふとの事也わか孝養の一助よく心附しとて聞濟し也目通へ出るもの論など遠國故也され共是も亦取締方正の一ツ也

○十五日 曉かたより驟雨故とても月はあらしとおもひしに八時頃よりくまなくはれて西のかたには村雨あれと東には半點の雲もなしわかさ

山の頂日のいるとゝもにほのめきてみるく月かけみえ初たりあれあれとて椽のほとりへ出或は庭の山に登りて小さふらひめしたきの下女まてか月をみつるは明月の故なるへしわかさ山のはつかの小松のうちより白玉をみかき出すことく月さしのほりたり五過よりは薄くもりに成し風清らに月すみてこゝかしこにて鹿のなくなといふへくもあらぬけしき也

○十六日 晴 きふ柳介來りおさと風聞也とていひしは紀州の御城燒失のときは大雷にてわか山の五十ヶ所餘落終に御天守も燒たりといひ或は熊野沖に異國船來り御備の出るとて火薬を取出し合薬へ火うつりしともいふ由燒失と全にいひしか御天守は燒損し候と之譯に而御修理あるとて幕を以張つめ燒うせしやのこりしや外よりも少もみえずと也○御仕置伺十五冊所司代に進達

○十七日 晴 おさとなといまた鹿のなく音をさたにか脱カにきかすよつて六半

紀州の御家
來六月廿六
は雷三廿六
日あり其内
聲あり候な
動かし候な
の聲あり候
は天守の二
階より出火
右近所に火
も長屋に火
も船のり異
國ありと異
もあふ也

誠一か十五
夜かゝる空
暮にみちて
山の端を出
望月のかけし
望月のかけし
望月のかけし
望月のかけし

ころより市三郎誠一に薄へりを爲持庭の山に行月ののほるをまちなから
まつ枯枝落葉など芝間にあるを中間か捨置しくまてにかき集めしにし
はしの間にも多くあつたりよつて焚火にあたり居しにみかさ山わかく
さ山のあたりにて鹿頻になく一時はかりのうちに九たひ程聞たりさ保山
の麓なるさほ川は布さらすところなれば所々の砧遠きも近きもまに／＼
きこえ村くものうちに月さしのほりたるは秋のけしき十二分のことにて
火を焚をみておさとわたと入かさねにて蒲團を携來り山の大成石の上に
坐し父上も御出にておのれはいにしへの例にならむア、白張に烏帽子
ならは一興ならめたと仰つゝおち葉の焚火にて酒あたゝめてめすかゝる
ことに歌あらはといひしに誠一か
見たせは春日の山に月すみてちかく聞ゆる棹鹿の聲
とうたひ出たりおさともわれも驚て誠一小僧にかゝること歌ひ出されて
は大人の何かはいふへきとて一首もよます止たり誠一歌の三四首もよみ

今よみみせ
よといひし
雲の上は月
はすめとも
春日野にう
つる千草の
露をさひし
と書て出し
たりあまり
入知恵はな
きとみえし
也

しよし也我は知らざりしにこの頃外庭の土手の西南の隅に十間ばかり薄
しけりて尾はなのけしきよしとてわれにしらせきよつて誠一をつれ行見
しにます穂ともますほふともいふへきや遅きと早きは紅と白きにみえて
はつか成はみるに足らぬものなれと多くしけりて風のまに／＼うちまね
くは得もいはれぬけしき也その時誠一かこのすゝきに月の入かたのけし
きをこの頃早起せし朝にみしかいかにもよろしかりしといふ故に不思議
なることに心ある童よとおもひてきしにかれは近くうたよむことをは
しめしとおさとか語りし也○鹿の音近きより遠かたよし馬のいな／＼に
似たることくにてさえあり長くして一聲のうちを断絶あるかとおもふは
かり節ありて古より秋のあはれのものにいふもけにさることそかし男鹿
のかいろふといふかことくなる聲立るはおのれかつまと偕老のこゝろな
りや否はしらねと杜鵑の不如歸と鳴に遊子のこゝろを傷しむるかことく
故さとおもふあきの夜に男鹿のかいろふてふ聲きくはいと／＼もあはれ

にてみなく、袂ぬらすことにそ有ける

○十八日 曇雨 此ほと松茸出さかりたりきのふは壹貫目朝之内貳百八十文也しか夕かたは貳百五十文に成しと云

○十九日 雨 惣年寄日割通今日歸南いたし候旨夕刻届出る尤江戸にて御別條は無之との義に彌吉の目通之禮等申述候由御届物有之候得共明日可差上由申聞候節唯今直にとも内心にはおもひしかいや、いつにてもよろしかれこれ御世話といひて歸せしと民藏話也○昨今は鹿外庭のまて來てなく也

○廿日 雨 惣年寄の届物はいまか、といひて家内中打より待こと江戸の珍客のことくこれも久々に歸りしことなれば漸に八ッ過に差越す目かた十二貫目あるといふ也折節儒生参り居候而對談中なれば奥の廻しおさとか開きて取扱ふよし經義の論もそこ、にて仕舞候而奥へ参る母上の御書其外彌吉おしけより中元の祝ひ或は常嘉か細工脇差の研等出

來候而來るいそき、よむ故にこゝろ不落附四半時頃までかゝる

○廿一日 雨 八月二日附母上様之御狀に當年は殊に御健に御食もよろしとの御事先以恐悦夫婦之悦ひ何よりの御便也太郎かいはひの金子相届同人の乳母かよろしきものとの義太郎か運のよきなるへし乳母の悪敷に逢ひし小兒はむこき縣令にあひし百姓よりもつらきことなるへし○おさと風邪に付三里へ常に灸事之御教奉畏候同人此ほとは藥はさらにも不申上灸は三里等もとより毎日腹をなて息をつめ下はらをはる等之類ことく朝夕不怠候太郎か御庭の御手傳等いたし候由來年は大かた菊も萩もみなむしらるゝことなるへし○新右衛門より長崎の封廻狀寫一覽磔并獄門可被 仰付處牢屋類焼之節立歸中追放二度の立歸り故とみゆ高運の者共也長崎御代官は跡役出來候哉定而願人多かるへしいにしへは長崎に御代官ありしや折たく柴に町人作右衛門と有之と覺ゆ田口伊澤戸川等恐

幸三郎の封廻狀寫も
來るにこの封廻狀寫も
日もこの封廻狀寫も
奉用ひて御
成勤かたし
歡にしかた

入且氣之とく成事也市川熊男は押込にて済たるとの事同人は餘程御用立候よき人物也文武共に心得ある男也家來に抱度もの也○幸三郎の日記晴雨雲虹等迄審にて忝候○政常鎗二十五匁とのよしよくは買物也あまり大身ならぬ鎗三十匁前後にて上作ならば買置へき事也○度々灸事之世話忝候○松平下總守おし送船の船頭首かけにて異國人に手をねちらせたるに兩手を以精力を出したれ共ねちられず天神のことくおもひおかみたるよしは此頃書狀中之こゝろよき事也一乗の彫物之事に付被申越候旨承知兼貞之短刀用ひ度候得共拵を改候は、五百疋以上之損なるへし坂本の政常に候は、十二分さもなくとも相應のよき出來の關身にゐこしらへ度候金重方きはいたし不申候又考兼貞の短刀を用紋附には候得共拵を被用候は、幸三郎之進上候もよろし鎗は無之候短刀の拵は先便申進候つかさや共くろ塗と卷にゐ一ツの紋金にゐ目くき目貫を兼たるにてもよろしかるへし

拵の註文勘辨候一打書にいたし御越可給候右に了簡しるし可進候○脇差の研出來參る一覽今少しよろしかるへくと存候處兼定の不出來のことし右にゐはくさり繩の對には難成くさり繩のわきさしには錦さや兼定を用ひ重國の脇差へ可成のものを用ひ候は如何○出立前にたのみ置候素銅目貫は「きつこう紋所」いまた出來不申候哉○八月朔日附彌吉より之書狀一覽勘定帳相届き候○茂兵衛を灸并書簡袋差出いづれも必要之品に忝候由よく御傳候へ○八百よりおさとへ之書狀承る八百忠義也とておさと頻に落涙也下女共一同八百か骨折とり、はなし也○おけいおきつより日記書狀來るおけいのうたよく出來たり少々出來過たるもみゆ自詠かいかに○夏蔭先生より五畿内誌來る右に添くさ、のこを申越せしうちに奈良へのほり給へる後は何方へ參りてもた、歌物語の外はなくみ國のふること世の中のとかくのこと、もこ、の學ひに心深むる人なきを獨なけきおもひてもの、はしに書付侍りけるとはし書ありて

母上様共外
よし心り物
におけり
しもの共
く來るや
か茶の類
あまたの
はつはら
お事ある
返事ある
はしとこ
はしとこ
はしとこ

ともとの花にたはる人をおほみ高根の雲は誰とわけみむ
分こえてみる人まれに成にけり雲よりおくの道のゆくへを
なとゝありき此大人の病氣を深く案事けるにおこたりけるとみえて悦は
し○淺野中書よりくさくさの書狀に白石著述武家三事抄をみつから騰て寫
して吳たり元本筑後守君美か自筆也とて眞にせまるはかりに摸寫し虫は
みまでも其まゝ寫してこしたり奥書もありかの人の深切今にはしめぬこ
となから驚ぬ奥書もあり珍藏として後につたうへきものにそ○大越より
くさくさの事を申参りてこゝろなくさめにとて刀の話を數ヶ條まで記
されたり三百兩四百兩の刀あるとの事也われ病ほと刀を好みりしかし高
金のものは不好五六十兩以上の入費ならば二十匁三十匁の西洋砲の類爲
鑄度もの也大越より菓子來る忠四郎も同斷厚く禮を御申遣し給へ
○廿二日 晴 けふ二百三十二文の松茸をみしに大さるに山もり也よつ
て惣菜にする江戸のいもの取扱也是計江戸より下直なるへしさつま芋の

かはりにほうらく蒸にいたし午後の茶にそへなとしてもものする也松茸は
たけ中の最上なれとも多くてなるればかくの如し

○廿三日 曇 四五日已前の雨よほととの事とみえて吉野河に水死人の
死骸行衛しれさる訴等あり○兩三日已前より鳥居甲斐元家來本莊茂兵衛
といふものを井上傳兵衛倅親と申コウシン原といふ所に及勝負返
打に成助太刀之もの茂兵衛次を打留たるとの取沙汰也コウシン原といふ
地名いまたきかす護持院原の誤かなといひし

○廿四日 曇 後藤一乘來り調物を出來をみせ且機嫌聞として着南せし
よしを申す逢遣す新右衛門之誂も出來いたす同人老眼にて細字之出來は
一琴のかたよろしとおもふわか自筆の彫不出來にて大に望を失ふ彼かせ
ぬことよしなりしか眞鍮のふちを彫たり至るよく出來たり圖はあれ野
に卒土婆也一乘後藤の彫の意をときておもしろき事におもひ夜四頃まで
きゝ居たりしかるに六月切之宅狀來りたるとの事用人共申聞る尤別條な

しとはいひしかこゝろ不落附奥に入みるに 母上様新右衛門おしけ之書
狀に彌吉不快之由尤追々快方に付案事不申候と之事なれ共第一に 母
上様の御老體にて御配慮のこといかにも 恐入勿論御大丈夫の御論な
ともあれと 御體にさはり無之様とのみ奉申上候みつからせぬおもひま
うけぬことは天の災にて百里外のこと故度外に置也といひていねしかい
かにしてもねられす夢をみる故さとのことのみ也心におもひしかもおの
つからに徴することあるとみゆわけていふもふりたれとも茂兵衛か年老
たるに實意をつくす忠義之體は新右衛門の書狀 母上様の御書にもみえ
ていかにも悦はし勝藏などよく世話いたし候との事千萬忝し〇けふは八
日切の書狀出すへしとの事にてきのふよりこゝろ構せしこと共もあれは
所々之一同書狀出す只々 母上様の御からたにあたらぬ様にと夫而已
おもひ奉る新右衛門幸三郎段々之世話安心はいたし居候得共くれ 配慮
之程はきのとく也〇試に算木を投て乾の出しより陰陽々々とくみ行

は火にはしまりしは水に終る也坤の出しは水にはしまりて火に終る也其
うらをみれば申迄もなく表水火なれはうら火水と成居也春夏秋冬の移行
日に朝夕ある月に盈虚ある人の三時はねふらねはならぬなどみな天地人
一體のことなるへしされは天にまかせて何成をかはせむ天にまかせて消
息は常也とて捨たらむには必惡に流るゝなるへし聖人消息盈虚のことを
易に説ながら陽を助けて陰を抑給ふは必いはれあることなるへし夜の五
十刻は日の五十刻より短く六時起て六時寢てはね過る其外一人生れて一
人死するよりも年々に人別のます體など必よく明らかにし究たらは陽
のかたかち居るなるへし聖人陰陽消長をときつくしなから陽を助け給ふ
意を以天意とみて天にまかせてする上は日々のことおもひ附しこそ天意
なるへけれよきことを助けて悪きことを抑て日に善に進まむに陰に終に
抑とめらるゝあらさらめされ共元來元氣より陰陽にわかれ其陰陽によ
りて天地間のこと行はれ居は陰のなきといふことは決してならぬ也豊年

に凶年の手當をし夏のうちに冬の着類の手當をすることく盛なる時に衰るこゝろえなくは必迷ふへき也盛成時に衰る時の手當とて金錢を貯はますく早くおとろふへき事也金錢は身につますいかにも質素にして目にみえぬ處に積まるゝならはつみたき事也このこと前にも其意を記し常におもふなれとも何分にも出來ぬ也これは彌吉等へとくにはあらずわかさん悔はなし也

○廿六日 くもり ひる後よりさふらひ共佐保山の邊へたけかりに行たりはつたけなと夥取來れり松たけもあり此節松たけ一斤之價八十文位より又下直なるもあれは誰もはつたけは食はす賣りにもきたらす四五日來はひるも鹿の多くなく也松たけと鹿の聲には少々あきたり

○廿七日 雨 民藏家内之父家内の迎として備中より來る是は家内か江戸に出るとき運あらは十年之内に面會すへしとて立出しよし然るにこのたひ上かたは參り候に付里方は立歸て親に逢に參る積之處既に其日をも

約束せしよし然るに送に附可申ものにこまり候由に其旨申遣し候處即日親の迎に參りたりとて一昨日着せり民藏か妻まろひ出て草鞋のひもとき遣し湯くみ來りて足をかせなとするに親も娘も只なきに泣て歡けるよし民藏か長屋は新敷出來且廣ければよろこひにたえす一兩日は春日詣もせず互に親と子か顔うち守りて夜すからかたりあかす事のよしわれもいつかかゝる目出度さまにて母上の御顔み奉りなんとおもへはうらやましくもかなしくもあり且は目出度ためしなればこゝに記す

○廿八日 くもり ならはさむさの早しやまた楓はもみちせねとかきの葉はくれなひにて庭の柚の實なと半はきはみたり廿五日より蚊帳なし九月の節より七日目也

○廿九日 くもり 此ほと所々より先格に松茸來る大成は笠のさしわたり曲尺五寸五分餘もあり高サ六寸もあるへし古人の語に誰言八寸稱絶倫とありしなるほと八寸といふはいか様みてもなしあらは奇絶の大物な

るへし

○九月朔日 晴 月並の禮受ること例の如し○俊藏の娘へ誰か教けん松茸の大成を持股はさみ何の因果てかくありけんといひあるく也みなみな絶倒大和は柿名物にて既に大和かきの献上あれ共夫は至る高くて給られず其餘のかきはかたくて味よからず樽ぬきなと云ものなしとみえていまた喫せず是も亦江戸をおもふの一ツ也奈良の江戸にまさりしは大佛松茸ふるき佛豆腐並にゐも細川豆腐位其内別品なるは江戸にもあらしとおもふ位也誠一は大松茸を大佛様の御道具といひて笑ふ也○ならはさむさ江戸にかはらすとおもふ也此ほと誰もみな裕と胴着位のことにて中數三段下り五十七度也常ならは此ほとおさとのけるく日々のことくなるへきに三十日餘更になし不思議なること也此體ならは追日肥立なるへし○庭の柿の實少々はあれと前のことく味よからす六本あれとはつれたるも

ありかきの葉の紅葉此ほと至てよろしはつかりかねをいまた聞かすわたりたるともいふ也○昨夜四過より馬琴本をねなからよみておもしろさに大によをふかしたり深更になり秋さひてこゝかしこの鹿の音いとくあはれにて涙催すはかり也○頃日は母上様の御世話にゐきくはいかになりけむもはやよほと綻ひ候半なと申居候ならは明月と申十五夜頃さくきくさかり也よき中りんのきく也

○二日 晴 夕くれに成て清七かことを憐におもひやりければ

心から逐ひ放されし家鳩はこよひつくにねくらしむらむ

直に行道さまたけの藤袴おしみなからもぬき捨にけり

千ふみかもとよりさくらの花をくれたり夫に添たるうた

君か來ましさと人恵めるうれしさにさくらも時をたかえてそ咲と有ければ

山さくら時をたかえて咲けるはまことに恵まぬしるしならまし

山さくらはなはさけれとこゝろよりうちとけてさく姿とはみす
おく霜のいたみ見よとかうらかるゝ秋にあはれの山さくら花
のとか成春に逢なはいにしへの八重のさくらに劣らしものを
ときしらすさけとあやしとすてられぬうらやましかる山さくらかな
しはしまたは春にあはしをいそきつゝさくらよなとて霜にいためる
なとりあへす巻かみに書つけて遣しけり

○三日 雨 けふは東大寺の八幡の祭也昔東大寺の六十萬石程の時は夥
事にて今其百にして一を存するなといふ也佐渡のまつりの類にはあらず
以前の奉行には見物せしもあれと近き例はなしといふ一ツの喜び也與力
共か宅には御神燈といふ高はりかゝけさせてけふも童らかいなりの祠の
こときものに大鼓をたゝきながら乗せられて與力共の宅前をは通る也所
望といふ所にて若男共かかのやたいをさしあけるよし危きのかきりみる
へきものにもあらずと也され共老人迄か土地の者は出みて興する也○こ

の頃庭の松に鶴にやこうにやしはくゝ來るけふなとは泉水のうちに遊び
居たり魚を啄をいとひて逐やりぬ

○四日 晴 民藏の妻父とゝもに今朝備中に出立也兩人共かこに而兩懸
を爲持行たり昨日短尺乞氣のとくなれは拙吟のよし申しけれとも達而と
之事に而我とおさとおもひくゝにしるし遣ける木村基備か妻の父に贈る
とて歌を乞けれはといふ辭書に而

老か身を菊に契りてなか月の長くくちせぬ秋をかさねよ

と祝ひこゝろにてよみさて農父のこゝろ得にもとて里といふ題にて

山吹のくちなしにしておもふこと岩ねの里はすみよかりけり

早苗と云題に而

あさ衣うきにぬれつゝ身をつくす賤か早苗もわか君のため

といふを書遣したり民藏殊に喜ひたりわれ等かこときものに短尺或は絹
地なとよこさせるもの此ほとおりくゝあるもおかしきこと也これみな

君の御恩のあまりよと其度々におもふ也

○五日 曇夕雨 きのふ柳助はさほ山のあたりへ茸かりに行たりとて壹尺四方ほととの土くれにつゝしと松たけ大小六本生したるを其まゝもち歸りてくれたりいとゞめつらしくおもふまゝに庭の山へ植させたり根を其まゝに置は來年も生るといふ也此ほとは壹斤七十二文位也けふも庭に行みるに所々の芝間に初たけのときものありみな家來なとはくふ也初たけのうちにあるは素人には見わけかたしわれ決あやしきたけを忌みくらはす旅中にはなまの椎茸もくはぬ也たけは一日鹽に附たる初たけ松たけしめし位のこと也生椎茸を食ひ死せしものあり可恐

○六日 くもり 此頃日々江戸の便をまつになし大かた川留なるへしなとみなゞよるといふ也ならば佐渡より大に都にて居なしみてみるとさして不自由はなき也佐渡は豆腐などこんにやくの如しならには細川豆腐より又一段結構なるかある也これらは寺多き故歟練ようかんうは玉の類

もありかなりなる煎餅などもある也是にて江戸狀自由にあ魚多くあらは申分なかるへし○松たけに一本にあ目かた百目以上なるあり所謂八寸絶倫なるもの也

○七日 晴 大和には所々に用水溜多し小なるは二千坪前後大成は忍はすの池のときもある也其池へ春鯉鮒をはなし置あたとへは八百匁のものならば八十人にあ十匁ツ、出すなり誰は何分誰は何分と約し置也さて用水不用の此節に成水をしたみ不殘魚をとる也其時二百本の鯉ならば十匁の人二十本貳拾匁の人四十本わくる也尤かへ堀の入用は村かたにあする也村かたにあもはつかの入用にあ百匁ツ、も取故とりとく也與力同心奈良之ものなど大に樂にすること也初瀬のみち二里はかり成所にあ良右衛門かへ堀に行たり鯉尺餘なる六本大ふな二十五大うなき壹本を得たり夫にあ貳朱はかり成といふ百姓共そこにあかまを作りわきの山より松たけを取來松たけ飯をたき漁たる關東にていふさこをこゝにてはもろなど

いふよし夫ねきなとを手を以捻切ていれ用水をくみ煮てふる振舞カふよし也江戸の百堀といふもの、大成田舎ひたるものと聞ゆる也天氣よきときなどは若きもの、なくさみになるへき事也

○八日 晴 都筑金三郎大和之支配所検見として参り奈良へ止宿也よつて夕方より参るおさとなと久々の面謁故に奥へ通りいろ／＼のはなしいたす從來之はなし例之通少も底なくうちかたらひわか心得になることも等爲申聞吳候而よろこびに不堪つきぬ物語にてはや四ツならむとおもひしかよほと夜ふけたりきよめを豊田藤之進娘を貰ひ孫の出来など物語ありき○庭によき柚子あり夥實を結び朝夕用に立也あゝ母人にまいらせたきなと申也

○九日 晴 重陽之禮受ること例のことし○夕かた御養父母様は御酒奉ること例之如し此ほと禁酒復古せしかけふは別段と之事に御酒給る唐詩の佳節に逢ことに親をおもふといひしもけふのことにて故さとのこと

おもひ出ていとかなし 母上より賜ひし御納戸の壽の字の小袖を着る
わかみとり千世かさねよと賜ひつる壽ふき衣けふはきにけり

儒生か法隆寺に行しに大坂の豪商に賣茶翁の流をくむものありて茶を烹ることにこゝろつくすものよし彼此たひ清朝より煎茶とよき水をととりよせたり其初穂を法隆寺の聖徳太子に備まいらせたり其すへしなりとて一掬の水數葉の茶をわれにくれたり其半は一乘院宮へ奉りけるにことに珍敷思めされ候而只今参り居内に烹て被召たりといひき茶は日本の産よければ異國の産を用ひす水も又異國の水を取寄ものなきはかはらぬ故なるへし然るに藥品文寶の具等清朝より來らざるはまれなれとも一乘院宮に奉るにはよほと品ならてはまいらせかたくあるなれとも茶と水は日のもとに不變もめつらしければ人のもてはやすもおかし江戸は加茂川の水取よせて茶に常に用ひは豪奢のそしりを得へし中間小ものに至るまで池田いたみの酒をのむはそしるものなきはいかにこゝをもておもへは

たとひいさゝかの事なりとも人のせぬ奢侈に流るゝことは必ずまじきこと也昔紂か象牙のはしも曾あなきことを考附てせし故賢人の歎きし也今は下女にも象牙のはしなどは卑みてもたぬ也今賢人の象牙のはし作るをいさめたるとて夫等のことをいたくいはいはゝ人々氣違といふへしかゝること世に多し

○十日 雨 此ほとおさと大にこゝろよし乳岩といふものも全別事とみゆ安心也

○十一日 曇又雨 宅狀の不來を日々待居る也川留なるへしとおもふ也○今日は 行道院様御逮夜也庭の松のもとへ松茸のめくみたるを植置たれは行みしにみな開たりよつて夫を備へ奉るかゝる所に而供膳のあるへしとおもはず也○御用日金公事二十八口皆内濟少々の本公事二口尤金公事同前のもの也其外直糺物あり是此節日々の手つゝき也春日の御祭與力其外には清服遣す也のしめ都合にて二十上下三十具ほと看板等夥こと

也いづれ百兩以上也五十兩といふ也平年に而必初年は百兩以上也と云也○十二日 晴 江戸の例にならひ 行道院様の御正忌日故牡丹餅を造るひる打より給申候われけさ未明より起鍵のすき及ひ及ひきをふることに凡四千五百餘朝は例之通鹽たち故腹殊にへりたりもち七ツ食ひたり殊之外出來たりとおもひしに父上は八ツ被召上たり奈良已來しはしも病なきは父上にかきれり此頃も泉水に腰までひたり水中の杭を御拔被成たり驚て御とめ申けれどもなくさみなれは構ひまいらすなどの事に而御聞入なし舉家驚歎いたす又少も御あたりなしはや七旬古來稀なる御としにかゝることいづめつらしき御事也○鍵及ひきの數をましたるは江戸の如き稽古なき故也

○十三日 くもり 六時ころより段々はるゝ夜半に至り快晴也御養父母様の酒を奉ること例の如しけふはわれも酒をのむ也例之通漸の一合上戸と成○十四日 晴 今日立田最寄に巡見として參る法隆寺はとて四五日

もかゝらすしては可成にもみること不能よつて巡見のひる休半日にては更に見られず早く参るかた可然と與力等か申によつて十三日の月西山にまた高くみゆるころより起て朝かれい給漸に足もとみゆるはかりのころより奈良を出たり法隆寺は三里に不足され共同寺の五丁ほと脇に法輪寺といふ山背の大兄の建立のてらあり夫は廻る彼是に三三里になるへし此寺には其頃の塔および堂一字あり夫は行みしに古刹なれ共寶物はさて可記ものもあらずいにしへの鵝尾ありけしからず大也みな敷瓦の堂なるに今も土中を出るといふ敷瓦住持の庭に多くあるをみれば本堂等いにしへありしなるへけれと住僧はしらすといふ也無檀にて御朱印は勿論更に寺徳もなしといふに可成なる寺也いかにして堂宇等修理し寶物など傳るやらむ不思議也夫におもへは實子相續の神主共かたはいつかたもみるかけもなしかなればかゝること迄神道の佛法にはおとりけむ可歎こと也夫は法隆寺に參る廣瀬一郡四ヶ村千石の地を大和大納言秀長卿被宛

行 御當家に被爲成候も 御朱印先例にまかせられたれば今以坊舎十六坊ありて方七町はかりの大地也法相其外兼學なれ共今は眞言を專にするると云也ならの寺いづれも然り空海に壓倒されし餘臭なるへし六十六坊とはいへとも中には門と畑とに成たるもありて上野の三十六坊のかけもなき也役僧共中門の外一丁はかりへ出迎せり中門を入晝休せる學侶普門院の門外に下乗したりこの寺に東坡の竹のかけ物あり印塔婆位にみゆるは寺の什物故なるへしこゝにて一寸湯漬を給たりこれは晝飯を出し候も夫は境内をめぐり寶物をみては空腹なるへしとての事之由也一體法隆寺は推古天皇の九年に聖德太子御建立ありてより既に千二百四十年餘になり唐よりも古くかの日出るところの天子日入るところの天子に問ふ皇帝つゝかなしやと小野妹子か書たりしこのこと空覺也勅書を隨の文帝は被遣候頃のもの一度の兵燹火災等もなく存したることなればみるものみな古物なればいつも手間取るゝ故かくは寺僧の取計しなるへしまつはしめ夢殿に參

るこゝには聖徳太子御幼年の時の御なくさみに出来なるへし高五寸はかり成緋の逆おもたかの御甲冑或は佛を彫刻の時の小かたの類まで納あり經文は隨^つの衡州衡山より取來れりといふ法華經に於沈香の宮又は表をから木の合せはきたるに彫したる或は蒔繪など絶妙いふへからず法華經の表題は聖徳太子御手の皮を剥かみに替夫は血へ黒を和し自ら表題遊されしといふにて其餘のことおしはかりおもふへし日のもと^の正直なる風なるに上古の質なるに六朝風の賣僧らか來りてかく迄に奉欺とは残念なること也さを日のもと^の膏血を絞りしことゝおもへは^く残念也聖徳太子攝政の頃に冠位十二階憲法十七條のことをなされ其外武事にも長し給ひし御人なるに御身の生れ給ひし御國のことを捨て餘國のことにかゝる御心を御用ひありしは惜へきのかきり也其頃は百濟は御國に従ひまいらせ既に新羅と任那の戦ひに任那へ援兵を被遣候などにて日のもと^の武威さかりにして異國まで自由に御取廻しありしことにて聖徳太子の御武威

おもふへし日のもと^の御武威萬國にすくれしをおもふへき事也其頃はさそかし日本と聞しならはたけき國とておそれしことなるへし五雜俎にも日本よりたけきはなしといふことをあけしかとおほ^へたり難有御國也そこに而傳來のもの共をあら^くみて夫を傳法堂に行麻上下に着替候而しはし待つと中宮寺の宮より罷出候もよろしとの御沙汰ある故参りて時候の御容體を奉伺也直に罷歸候よしに付其積之處存外に御逢可被成と之御事に付不意の事に付御目見の御席等拜見いたす間もなく出御に而御側へ被召候而御手つから御熨斗を被賜たり御意もありけれと伽陵頻伽の聲ともいふへき御聲にてきこえすこゝは尼宮に而あらせらるゝに中宮の宮先達而かくれさせ給ひしかは別而御逢等のことはおもひもよらさりしに御附弟の宮いまた御童形にあらせらるれと別段のわけを以御逢と之事家司共かいひき御菓子など格例之通用人共迄も賜はりたり此宮は外の尼宮と違ひ尼共みな白無垢に而並々の婦人のことく裾を長く引也かいとりを衣

にかえしはかり也茶などもて來る尼は黑衣老尼は白き麻の薄鼠なる袈裟と白きころもを着せり夫にて引裾殊勝也中宮寺の宮は御童形とは申ながら十四五以上にみえ奉る美婦人にも髪も鬢を出御さけ髪也殊に御化粧ありたる體也黒き御縫あるかいとりをめされたりめつらしきこと故よく見上奉りたかりけれと昔江戸に而青山善光寺の開帳に尼上人の十念を授りし時戯に手を握りて縛られしものありと聞へけることもあれば少もなめなることあれりて恐入たること、おもひければうつくしき少女の御目見項羽に諸侯のあひし時膝行して仰みるものなかりしといふこと史記にみえしか其ことくなりしも又奇事もある人のかたりしはわか美男子の事密に御聽に達し御逢ありてのちに御意にはかれは今の源氏なりとき、しか頭の光る故に光る君の一ツはありし名空しからぬ事に而女にたこといふは聞しか手にたこのあるはめつらし眼の光手のたこ渠は男のたこなるへしと仰られしと也無覺束全美男子の聞ありし故なるへし歸さに肩輿中よ

中宮寺の御來
所の御家か古
みなわかしく
今美男もみし
男によみたり
る女に花たて
風あり

りみれば中宮寺は奥を檜わたの二階作に遊していと奇麗なるか稻の穂なみのうちに蜃氣樓のことくそひへみえしに只の婦人又は尼等多く出見居たり畢竟絶世の美男子故なるへしかゝる御惠のあるも母上のよく御産み付け給ひしによるなればと難有まゝに御なくさめに審にするすこゝより學頭の阿彌陀院に參る 東照宮の阪賊を御攻ありし時の御道すからの御宿坊になりし也よつてさゝやか成檜わたの 御宮あり 御止宿ありし所に 御畫像かけ奉る墨畫に甲冑にて御刀御脇差を召れしに 御自筆に而家康と被遊たる 御像もある也其外御寄附之三條物のことき劔無銘也寺僧は天國か作といふ也信國の劔いづれも磨きは勿論ぬくひしこともなしといへ共少もさひなしみなく見事也こゝにて又着替候て本堂其外一覽いたす夥敷こと記すにいとまあらす黄金佛金銅佛天竺佛等多し天竺佛か左衽なるもある也日のもと元來左衽なれば其頃のものは左まへは珍しし天竺佛といふ内に六尺餘の佛ありみな西洋人のことく丈高く胴細くみ

な／＼異國人のことし隋カ隨唐百濟等の佛等の顔かたち等甚異也まかふべきものにあらず本堂の白土の壁に鳥佛師の百濟の人也と云畫かけたる佛像ありかみ絹にかけるよりも明にみゆる也こゝには聖德太子其外天子の御しとねあり破れたるうらに調布に今の御年貢米の札のときことをしるせるもあり例の幸三郎か所持まき繪およひ織物みなこゝにて眞物を見たり開元の銘ある琴およひ洞簫といふ尺八に甚似たるもの其外賢聖のひさことていかなるものか質は全のなみ／＼の瓢箪にゐかたちは茶壺のことくにてふた其外に模様ありうらをみるにうち出したるにあらすされ共孔夫子其外を像高彫ほとに浮あかり居る也いかなるものか製作の不明なるもの也土佐の國よりおのつからに出來しを奉しと寺僧はいへ其人作に無紛人作に無紛ともひさこへかゝる圖を出すはいかせしか製作一向におもひ不附候聖德太子の御弓あり白木の梓弓也といふ也さしや弓ほとにゐ分は壹寸も其餘もあるへし引しものかもと末弓の勞する所に至る小なるひゝわれみゆ

る也御矢もあり委細は別番の圖にゐみるへし峰の薬師に參るこゝの堂は一面二間餘ツ、もあるへし八角の大堂也こゝは全御成小路の武器賣る肆のことく且小間物やにも似たりくし筭之類かゝみの類夥刀劍類甲冑鍵矢之根數ふるにいとまあらず短刀の類屋根うらゝして少しのすき間なくかけあり千を以數ふへし又山の如くつみたる内に古きつか前與四郎鏢或はよきさひの中心なとみゆる也古き相州住行光といふ箱ありければ此刀をみたしといひしにこれは寶藏にありてこゝにあらすといふ可疑事也今もみな人の納よし也なるほと新敷狩人の銃砲又は立派なる櫛笄の釘附にしたるあるは白さや等多ある也けふこゝに來り貞助なとよき柄也此やりの中心はよし鏢のかねよしなといひてしはし日のたけるを忘るゝ體なれば十日も引越きりにして見されはあかすやめよといひて歸りしにはや七ツ頃になりたり郡山の城下より日くれたり町々の挑灯等夥し常に法隆寺の巡見は郡山にてくるゝ位と土地のものはいふ也月かけをたより一町はか

り來りしに迎の挑灯來れり五ッ過に歸宅也けふのこと別昏圖にゆすりあ
らくを記す也けふは立田なれば紅葉の名所なれともいまた少し早しよ
くみすあさよほとさむしいつかたも火鉢也板橋等霜彫し

母上遊覽の池御覽は市御より下
節御より下も如何と候
事にお供頭
龍助に居上
女を以て申上
しれは申上
肩を御す
池を御遊
中より御遊
覽中御供
さふらひに
門は更右衛
いはす下女
共迄もひた
居る御様子

○十五日 晴 月並之禮受ること例の如しこの御役所附の醫の別屋敷
山へ松たけ多く出る故奉行并奉行之奥方等必參る例格也とて屢望乞無餘
義御隱宅の御兩人市三郎を遣すおさとはきのふより不殘の女の髮結遣し
彼是の大世話也御隱宅にて母上はいまた春日詣もなければけふ壹人も不
殘女共被召連候而用人并士等御附添御駕籠に而春日大佛東大寺等の御詣
夫がいしやの別やしきの御立よりとの御事也留守はおさと并予壹人也客
なければ遠國にはかゝることも出来る也あとに而彼是まいらするものあ
りておさとか畑は行ねきを取來るさかなをにるなと一人也誰かみやせむ
と寂寞タル大家に夫婦より外なきにおもふも一笑也予は表の御用あれば
夫にのみかゝり居たりひる飯給に奥に參るおさとか給仕也其已前順右衛

あけと御
沙汰に御
方東大寺
候よ被爲
も遠國也
一も遠國
たり戲場
た

門を妻來りしか是も留守なければとて歸したり八半頃よりは奥に居候處
全々さし向ひなり染參るゑいほう來る右に而笑を催けれとも實はけふお
さと外出せぬは江戸にて彌吉か不快いかならむなと一日々のおもひに
たえかねて百度參りの類はさらにもいはすいたく愁ひていろくのこと
をする體に而心配みるに不忍よつて此ほとも陽明か弟子遠國にて其子か
いたくわつらひし時陽明先生か示されしことある故に夫を取出して講し
きかせ夫等はおさとのみにあらずわれもよき心得なと密に言あひたる位
のことなれば一步も外出なとおもひもよらすとて不出なり便なきはある
かもよからめしかし便きいたしなといひくらし入合の頃おさとか菜こし
らへなといたし又給仕して飯給させたりはや御歸りにほともあらしとて
表より近習部やに居宗次郎を以民藏に申付候而御洗足の湯をわかすへき
よし傳させかれこれするうちに御歸り也との事に而先へ母上様御歸り無
程父上様御歸り也俊藏順右衛門等助まいらせてよき御機嫌にて御歸り也

尤今日は御酒のことはひさこに一ツほとゝの御舎位にて御歸り候へと申上置たり俊藏順右衛門は勿論半點の酒氣もなく歸り來れりいづれもよくこゝろをつくしたる體也御歸り之上みれば松茸しめし其外はつたけの類くさく取來給ひし也大成は曲尺八寸八分あり八寸絶倫の古言不空などいひてみな笑ふ也かゝる所の民藏來り御用狀と々事に付女共かはなしも止夫婦うちより母上様新右衛門か日記等をみる母上の御日記は初のかたを予みれば末をおさとのよむ類に日ごとくの新右衛門か格別にいそかしきに内寄合歸りよりかけ附幸三郎ははたしにて參り吳彌吉か病ひ殊に六ヶ敷足などの絶事の時灸する體など逸々に心をいたため扱は弟等か深切なることよとおさとはしめ忝さのあまり打なく也さては母上の御辛苦いかならむ一たひは御押しも可被成なれと夫かために御病はあらずやきのふの霜の強きに例の御風氣などはいかゝなといひつゝ夫々よみ行うち三卿醫師の深切なるは執じよりも六ヶ敷かるへくなとおもひ新家か

看病する治郎右衛門か乗切にて醫師か方々行老人をも不厭別段の茂兵衛か深切勝藏か世話いたす體其外所々尋等々事母上の御日記詳なるに人々の深切忝さのあまりわか平日不行届なりしをも恥かしくおもひ出られたりされ共日記之内彌吉か病體一方ならぬは此先にはいかなる體はあるらむとこゝろくるしき事ながら無別條との三ツの文字を力草によむ行内に衆人の深切顯れ良醫の効を奏して此ほとは肥立の一條にいたりたりと々事に一たひはこゝろ先落居たりされ共かゝる時わか居て世話せぬそくやしとて母上の御苦勞をいひ出おしけか妊身なるにこゝろをつくす體などおさとのいひ出て袖をぬらす也めつらしきこと此度の書狀にては一たひ讀畢りたらは逆上してよほとはつしたり其内に右々様子を御養父母様のきこしめして其頃はとし歸り給ひし茸を煮させ盃とりていらせられしかやかて御出にてことくの次第きこしめす也もはや彌吉の快かたに向ひて此ほとはよほとよからむなどおもへは養生のこといかゝある

へきなと母上様の御心配の上に御病ひ出てはならすいかゝ申上へき彌吉へもとくと可申遣なといひて深夜にうち臥しぬ

○十六日 晴 霜なし少しく暖也けさ馬に乗仕舞又日記再讀する也吳々とおもふはしめより事なしとの事は封の上にも明に知なから日々の體みる度に驚きおもふ體にも彌吉か不快のあすはいかゝなと先しらす案事思召 母上様の御心のうち弟共其外家來等の心配等いか計なるらむはかられぬ事に二たひ迄絶事したるあとにもはくさめ一ツも御心にかけてせらるゝことなるへしされは御病の種になりてはいかにも恐入は夫こそ母上の御信心にも佛家に云心を退轉せぬ所にすましめてこれにてこそ御動きあらは法華經は反古也といきたひも思ひかへし給ひて御信心にも御病の種とならせ給はぬ様に奉存也この庭にあひるを置みるに子を産は鶏のあたゝめてひなにしてやる也それにおのか子ともしらす餌など争ひてはつかなるひなをおどしなとする也是元來天命なればにくしとお

もふものもなし其外うくひすの杜鵑におけるみなしかり予より申上げむは恐入たれとも予か産すてし子のために 母上のかく御苦勞も是又天命なるへし何とそ一ツの御苦勞を遊はし候度々に是は一つのつみ亡しか來にけり佛縁に一段近くなりたりと思召かへされて無理に御なくさめの一ツに彌吉のことを奉願事にそ今迄は病氣のこと醫者其外わかき弟共の世話にて參り候へとも此上養生のことは決る母上ならては參り不申候間何とそこれらの邊鶯役鶏役を奉願事にてかく申す某はあひる杜鵑にあたり不孝の子と是も又恐入たる事也○新右衛門日記之内藤田老叟のこと老病とみゆされ共心得方感心也今にはしめぬ事なれ共別段の人也いにしへにいふ善人なるへしかと深く感服する也○新右衛門此ほと御用多おもひやらるゝに看病として參り候事は吳々心を痛しむる也已後あるへき事ならねは奉謝候計にも候御うたよほと御上達歟よく聞へ候文もおもしろくと感吟候○百里外のこと案事候てきのふよりはよき便をは聞なから

こゝろくるしきことのみなるにけさは又きのふの茸かりのかへさの事い
またはてすして次之間へ二ひら三ひらの筵おしならへて女ともか松茸を
手にとりあけては其大小を論するかしましく聞ゆ或は途中のはなし又は
このしめし松茸を鹽につけよ二股なるはもかさの時の薬と聞也太郎と直
太郎とり置なといろくくと御世話ありて右へさはきにて又こゝろなく
さめもし又母上様は江戸に御殘にて御壹人の御苦勞いかなることかなと
いふなり何ことも世はさまくのことなるもの也され共不思議して來り成
さす成は人力の可及にあらす夫を少もおもふことあると露はかりにても
災を引出す也畢竟天道をうらむる故其とかをうくることなるへしまして
予らは例もなき結構新右衛門幸三郎は榮つとめ居は 母上様など少も御
心勞あるへからす候何もかも深切實意なる弟共多くよくいたし吳家來共
はみなよくこゝろをつくすこと故江戸は度外に置候積なれとも 母上様
御病氣にもさはせられすやと此こと夫婦の度外におかれすして勞する也

何卒我等のことなつかしく思召出され候度々に庭へ一度宛も多く御出候
御心をよく御取廻しのこと夫歸より此ほどの願也

○十七日 晴 むかし佐渡の旅ねのさむさいとへとて母人のみつからつ
むき絹おらせて縁なるいろに壽の字のあや染出せし衣つくらせて賜ひけ
り佐渡にあるほとは月のはしめ望の日には必とり出て着けりならへもか
の衣携來りければ過にし九日に從者或は與力らか禮うけしのちかの衣取
出て

母人の手すさひ衣きるたひに逢まいらすこゝちするかな
わかみとり千よかさねよと賜ひつる壽衣けふはきにけり
いのちなかく母よまちなませ衣と共に立わかるとも末はあひみむ
母人はけふの盃手に取てわか慕ふことしのひますらし
なと重陽の日におもひつゝけ候ひし

○十八日 くもり 宅狀差立候御用日目安渡三十口吟味物四口落着十八

口

○十九日 雨 おさと此ころ中宅狀出すに付筆をとりけるか少もあたらす大に本復せしとみゆこれにても彌吉の養生とこあけ後より二百日もかゝらすはもとぬもとりかたかるへしことしの寒手當もの也

○廿日 雨夕晴 彌吉不快のことおもひても少しも詮なきことなれば少もいはす勤めておもはぬ様にする也夫に大病の體をきゝしのちは彌吉か二十以上に而健成體は眼につかすとかくに十歳はかりに而素讀せし候時叱りけることなとあやしきまてにおもふ也けしからぬこと也彌吉か孝行は養生より外はなくと心得のため記之されはとて天命といふものあり陽明か説を先便に記せしことしとおもひかえて改たりきのふ夕かたしくれのけしきよしとておさと、共に椽は出もみちを見居たりしに蟲の音鹿の聲なとしきりにきこえて故郷の情起り夫婦してかれこれと物語せし體をするす彌吉もよく此ことをおもひて身を健にするこゝろかけ第一なるへ

し父母はたゝ其疾を患ふるとは彌吉かこと也是も質朴にして巽順なるよりなるへし○夕かた大越よりおさとかもとぬ之狀とゝく貞郎か遊歴のことなと具に承りおもしろきことにおもひし也

○廿一日 しくれ 此ほとは宅狀の來るを待ことなし何卒十日あまり立まては便のあらしとおさとゝいひくらす也はなれたる遠國にてきくさへに彌吉かことかくの如し御としめしたる母上の御苦勞いかにやありけむおしけは更也新右衛門幸三郎はしめ臣等は苦勞日々いひ出ること也○此ほとははや松茸も大に減たり一斤百文餘に成たり上分の者はさすか魚類もあれと中間下女らか給へき魚の更になきにはこまる也さふらひらは獸肉を食ふと云也

○廿二日 晴 次郎右衛門之書狀持參にてなら見物に松平右京亮家來厄介之由來るものあり冬の空なるにいまた夏衣也といふ也士の貧なるは常に故構ことはあらずしかし奉行を彼是世話して所々見物さては私にあた

ると論ありて斷遣したり古實者之由可惜

○廿三日 晴 けふは同心共之鍊炮見分也三十人居立一玉ツ、星皆中は百疋只の皆中は貳朱宛被下事也星のもの貳人皆中はかりは五人あり

○廿四日 雨 治郎右衛門より申遣し人ならの豪家の旅人宿に刀や善助といふものゝかたに旅宿せしと聞てかの善助を序に呼て聞しに善助か方はも江戸にて知れる畫師か方よりの添書持來れるとの事也奉行所之家來に用ありて行といふ故に夏衣にてはいかゝあらむ此衣めせとて綿入かしたるに極寒にもならぬに士か綿入なとさるへしやはとてきかすよつて寒からぬかとおもひみれば雨ふりやとに居るうちはふとんうちかけひるも居る也法隆寺其外は行古物一覽のこと望乞ひしにみせぬもあり遠方來りたりとてわさゝ寶庫より取出してみせし寺もありけりと善助男か民藏にかたりたりわか侍へやかし置ても一わたりならはよかるへしやなといひし論もありけるか奉行所は官邸にて官邸へ元來よりしらぬ人置はい

わかかたに
土氣あると
のなしと
えみなわ
入三ツにお
さむくも
ふ也

かゝあるへしとの論にて止たり一兩日中に出立と之事故菓子料壹分遣したり治郎か從來の弟子也との事なりしか其氣質みゆるかことしけふ夕かた庭にて鹿をみて

人もしれもみちふみわけなく鹿を庭になかむる秋のあはれさかくいひければ

これをみてさる丸だいぶうたよむとしかいかいふ人のあるかあらぬかとされ歌いひし人のありける○日くれてより八日出十二日限之宅狀來る友野夏かけ其外所々よりのなみたよりの相届く

○廿五日 くもり又晴 きのふよりのしくれや、晴むとしてくものたゝすまひめつらかにおもひければ庭におりたちけるに春日山のみねに村くもはつかにけふりかとはかりかゝりしけりたる常盤木と枝うちかはすもみちはのもゆるはかり成にうち黄はみたるかおりくみゆるも又一しほにて得も言はれす

花よりもふるさと人にみせはやな春日の山の冬のもみち葉
神のもるみかさの山はつゆしくれふかくやそめしもみち葉のいろ
常盤木はけふのためとか立ならぬもみちのいろの一しほそふ
はる秋をうちあはせたる花とみむもみちのなかのくもの一むら
手向つゝ神にそいのるいとはやもかゝるにしきをきて歸らなむ

○廿六日 晴 此ほと少々宛の風邪ありさすかの御兩所様もくさめなと
なさるされ共葛根湯にも不及御酒にて相濟おさとけろくにならす葛根
湯三ふくに相濟市三郎食物は常よりよく折々起出夕かたは元氣なから
六日はかりねる左衛門尉あさの飛はねなく其餘は常々通以上不時候々定
例おさとのけろくよほとよく直りたり○六過に至り順作手に昏つゝみ
をもち出るおどりみやくに宅状か別状はなしやと大聲に相遠くより呼
別状は無之と坐りなから申す也まつ安心しなから宅状をよむ其半におさ
と雪隠の大なる音いたすいかゝいたせしやといふに何ともなしといふ頓

て出きたりたれば今のは何そと云は宅状のことを考なから雪隠は落たり
しかきん隠へつらまり半はにして危ふく助たり少もことなしといふ宅状
の來るとき先此位のこと常也○母上様新右衛門幸三郎が九月十五日ま
ての御日記其外御状來る 母上様の御健なる菊の事など御記しある體な
とさして御つかれもあらずかと大悦御煩ひあらぬ様第一なり新右衛門幸
三郎等に格別之深切とは乍申おもひもかけぬ世話かけ新右衛門には物入
まてをかけ扱々氣之毒也當年はけしからぬことに一類の苦のあること
也予は此頃おもふに天道の被下間敷ところを誤り我が得し故に御叱り被
成候事と存候間君子雷霆にても慎と聞は只つゝしみの外あらしとおもふ
也され共われのそは杖に母上の御苦勞新右衛門等か失費より心配之次第
いかにも氣之毒之限也實に親族之誠實より出たるにあらすしては出來ぬ
事也よつてわれ更に東顧の患を家事にしては絶たり○幸三郎日記之内復
讐の人大小關打并備前祐定刀貳尺六寸脇差壹尺三寸之由貳人共同し寸尺

尤至極の大小也○兼^{不明}之事少も存寄無之候鑑は先達申遣したりと覺し
いまた不申遣はいつれともよろしく尤來五月頃までに出來にてよろしく
候○八月十四日に藤左衛門手足厥冷絶脈之事二時はかり有之候と之事驚
入候全一時の事とはみゆれ共病人にこりたる故案事申候○直胤脇差之事
少もいそぎ不申候○彌吉不快に付新右衛門幸三郎等世話有之詰切等之體
甚以一覽も胸いたむ也され共兩人共第五倫の話にも過たりかたしけなく
候○ふち小柄之義此次參り候は、一覽之上尙申進候○陰徳之高論御尤に
有之候得と心得可申候○泰仲之醫居置と之論尤至極也○よめより之書狀
一覽文段等よくとのひわかりよろしく候妊身之上は彌吉之大病心痛之
體文面に顯れ候しかしよく深切に行届候よしに母上よりも御悅申來候
安心の事也○彌吉御逢に出候義御斷申上候に付新右衛門登城いたし候
由其外柿之代覽等いたし吳候と之事扱々氣之毒茂兵衛等か骨折おもひや
らるゝ也餘事にあかく骨折候は、當人共も悅ひなるへけれとも病人にあ

心配なからの事別とおもふ也しかし深切ありて其効もみえよろこはし
く候

○廿七日 晴 御用日目安四十六口あり○此ほと所化之女犯あり池田よ
り之引送ものなり相手の女を近國之藩中の頼親元にあ差置候處右之武家
の參り女の押面會之事を申及斷候處左候は、刀にかけ候難免なと申
候而立騒候故女はうら口よりにかし候由なと聞たる惡僧也出家か刀にか
ける女を貫度旨申候而武家をおとし候も珍事也刀はあたまか誤もするへ
からすしかるに一旦牢問之上白狀せしを申口を替候に付牢問に成候間當
人は兎も角も慈悲之一ツと存し白洲の出牢問を受候は扱々損なること、
乍不及理をつくし申聞候處頭を下ケ忝候由申候間印形可致旨申聞候處夫
は御斷女犯は無之離縁狀は書振を被好候間書たるなと云ふわけ故けふ牢
問せしに海老にかけ石をも數多爲抱候得共少も色を不變石をとり候得は
少々氣分塞くか如しちと背をたゝき貫たらはよかるへしなといふ故に背

中をうち候處もはやし／＼など云牢問之役人はあまにはあらずとて又四五十打肉破血走れとも一向平氣也よつて其儘にせしにけふの牢問も強しきのふの御奉行之利害もうましよくとゞきたりゑらひ／＼などといふとてふじみかもしれすとて順作歸りて驚歎して申たり

○廿八日 晴 八頃よりなから風少々吹出て梢にひゞき村雨ふり出て紅葉のいろことに紅にみゆるなといふへくもあらぬけしき也うたにはかゝるけしきをみないふなれと江戸は四方に山なければ歌によむかこときしくればあらずけふみしかはしめ也みなうち興し居るうちに又もやしくれきて今度はあられふりたり九月よりのあられめつらしゝあられもあらぬさむさ也

○廿九日 晴 此ほともみちよし民藏順右衛門春日山の紅葉臺より瀧さかのもみち見にとて行たり瀧さかといふは春日山の邊にて兩山の間に谷

喪服はよく
ひしはよく
聞に格衣に
てはさしこ
きいさしこ
の略せるか
こときもの
にあらはけ
なりあるは
なと被遊茶
あし御服定
よしの法家
略の極來の
也このよし

川ありてよほとよき所也もみちには必人の行所也名所圖繪にもみえたり歸りに松火をともして歸りしとてみなめつらしかる也けふ家來か途中にみしに士三人に羽織を着たる法體のもの貳人御供にめして檜かさ深うちかふりましゝ御人の御羽織は御納戸のこときさよみのこときものをめし同しいろかと覺えしよし袴に似たるものを召してもみち狩に出給ひし御人ありき御あとより絹の羽織着たる武家ならば押の者ともいふへきかこかねちりはめたるしやう木をもちて遙におくれて行しと也いつれ宮かたなるへし一乘院宮は 當禁の 御兄にてわたらせ給へはまた重服にておはしましたりにひいろの喪服なるへければ定而かの御かたにあらせらるへしやといひしかゝること上かたには多くある也

○晦日 きのふよりはや氷あり寒きところにはうちくたくはかりの氷結へり

○十月朔日 晴夜雨 けふ友野先生より賜ひし書狀を明教館の儒生佐々木育助といふものにみせてわれ車を下りてより言をもとむること頻りて既にそこには別る頼置しにそのことのないかにわか幼なかりし時よりの師とはいひなから日記のうちに心に應せぬことは千里書をよせて教戒のあるよしをかたりし也先生の別段の實意に昨今のものゝいかゝして可及いふには及はぬことなれ共先生の御徳を示し且いましめのことなど爲申度てかくはいひき

○二日 晴 龍助はきのふ花山のうくひすの瀧より洞のもみち瀧坂のみちを又もみに行て小枝を手折來り其さま畫かきうたを添て出せり秋色別段のよし也

○三日 晴 けふ八頃におさとか庭を行て秋のけしき別段也みよと云故に行みしに春日山の紅葉は實に目を驚せり麓は六七分かたみなもみちしてみねの方は杉檜松多ければみとりのなかにちらりくと一村つゝの紅

必用とおも
兼ふ元二尺五
寸三百四十
目
同重國二尺七
寸三百五十
目
陣刀二尺三
寸兼卷
三百目

葉みゆる也龍助か畫來れるそらことにはあらぬ也則この圖を奉る此ほと至る健也六時より例の飛はね也鏝の手いろくにして三千百五十本是は江戸の鏝より目かた軽く七百三十目且歩行こと少ければ數をませし也居合切返し等三尺貳寸の刀目かた六百八十目にて九百貳拾五本也貳尺六寸の刀目かた四百十目にて居合切返し曲尺を踏共千五十本也右より書物に成小學近思錄傳習錄の類之内に凡貳枚を五篇ツ、程の割也四書之内五枚を三篇ツ、程の割也家來貳人市三郎は素讀劔術龍助達申に付易の講二爻ツ、尤講する所は必辨書いたし候而翌日講する也孫吳之内二十枚はかりツ、通鑑同斷也夜に至りひまあれは萬葉集考の眞淵か説と代匠記の契沖か説と校合書入等いたす夜五ツ半時過よりは歌をよむ也馬を乗るは三日目也右之通日課に付ひるの白洲與力共之對話御仕置伺書之一覽等もあれは凡四ツ承り候而よりや、仕舞ふ也是は故郷の情を減する身の補ひ也心學せよと愛日樓より文通もあれはこゝろつくれとも心は矢張もとのま

彌吉の心におい
なたし高心におい
干松代の高心におい
ふ松代の高心におい
枝折らすの思
しめ折らすの思
の風をらすの思
はたまふ
き雲とふ
みまよふ
たのむ
末につはる
はれ身な

也戚南塘か業をねるはやすくこゝろをねるはかたしとのことくれ
感しおもひ且大に恥るなり○日々三里の灸かたを背は一ヶ月に七度以
上勿論禁酒也葛根函附の類例の通不怠足に少に而も腫氣あれば承氣を用
ゆ唐厚朴を用ひみるに一ふくに而削るかことく治する也實に奇効ある良
藥也七日のみそ菜例を通也右を次第に付母上の少も御案しあるへからす
候御安慮のため悉くしるす也○かくこゝろよく日記をしるしはて夜食四
はいめを一口食せし時民藏急に参り一寸申上度とを聲いかにも物かはり
たり何そといへは御用狀とてうち泣也はつと胸潰ければこゝよと氣をし
つめてきくに彌吉か廿五日に果しとを事其餘はいふへくもしるすへくも
あらず只母上のさして御當りなきとを義難有新右衛門其外を深切を外別
にいふへくもあらずおさと并御隠居様只なきに御泣被成候はかり家來は
あはてふためきていふすへしらすよつて第一におもふはわれこゝにて少
に而もいたみては大不孝也世上に而不人情不慈の謗をうくるはかりにお

もひ可定と家來いもいひきかせ此上は明日よりを取計ふり等かくせ
よと差圖いたす是少も煩ひ等いたす間敷とて也其餘の事は記さす江戸の
人々のみて涙の種何にかせむ
よの中をわか身一つの秋にしてちり行梢なけくもみちは
○四日晴又しくれ
よすからの涙おもへは紅に染めぬ枕そあやしまれける
とくちりしもみちおしみて賤までもけふは殊に村しくれかな
箒木のませるわか身そちり行しこのはにつもるおもひはらはむ
○昔宮本武藏か六十はかりの時に壹人の妾腹の小兒を失しを歎きて前後
不覺になき沈めるをある人のこは先生にあるましきことよと申せしか
は遅さくら何とかしてみねの雲とかいふことをうたひ一さし舞ひてこの
なきからをなけ捨て夫よりのち終に其ことをいひ出さりけりときぬわ
れはそれにおもひくらふれは太郎もあり又も孫の出來るとかきくいさそ

れはしはしきし置て上もなく母人のかゝる歎きの御こゝろおもひ奉りこのころも彌吉へ記し遣せし父母はたゞその疾ひを患るとの教もあるに子の愛惜にひかされて身煩ことのあらはいかなる不孝にならむかとけふよりはくりこといふこともせし人にもたまたうなと申しとめてこゝろを男々しくあらためたり例の日數の立しならば白洲にも出へしと與力共にも申達し御用向など少も不怠いたすへしとおもふ也○彌吉か人よりかりし書物もあるへし貸し書物もあるへしほと立しならば幸三郎のとりしらへて夫々のかた附てみな例の帳に引合せて土藏に入れ給はるへし通鑑は一帙佐藤の子に貸よしならは先達を申越候義有之候彌吉か常に骨を折て寫もしよみもしたる書入などのあるはよく改めしや太郎か書をよむことのあるむとよきのためによく仕舞置給へし書物といふものは人によりて譲て更にせむなし馬琴か子の失せしものにつみ貯し書物をしきものこさす賣たりといふことを八犬傳の末へ書しをけふ尤なることゝはおもひ

しる也

子のためにこゝろ動かぬ教草身につまむとはおもはさりけり

○五日 朝より雪ふる みな驚きぬ四十二度のさむさ也甚寒を七段上り也立冬より十五日目也四時より晴て午後はあられましりのしくれふる○彌吉彰常か失せしといふことをきのふ所司代より京攝伏見境の奉行等に達し兩御門跡より大和國中の大名等に與力共の申遣す彌吉病死いたし候に付奈良町中々もの共自分忌中來る十五日迄之内遊藝等々鳴物穩便にいたし候様町年寄より相觸るゝ右は少々仰山に付先例承り候處天明五午年松田相模守奈良奉行の節兩御番相勤居候嫡子某病死いたし候節先格の旨書付を以申立ル我の對し候事ならは及斷候積之處先格に候上は公儀を敬するの意に付其まゝにいたし置候六十年目にかゝる例ありとは不思議なる事也彌吉彰常は兼もする通り家來共其外におもひ附男なれば庶の中間共迄なく也民藏などは大によはりたる體に順作俊藏等と

彰常初ノ
師ハワカ
友野霞舟先
生也(俗稱)助ト
震舟先生ニ
置玉ハス宿
行ニ佐藤氏
彰常カ鐘居
合右ノ師今
助ハ榊門村
術大榊原式
來中村左橋
馬ノ本松橋ト
河本武左衛門
云シ也弓ノ
頭大兵衛也
郎ハ並ニ皮
ナハ袋ニテ
射テ堅ホウ
シテノ鞆ハ
ヒスヨツテ
數射ヲトス
ノル皮破ル
ル手

サリキ日ナト
ヨシカ死ニ
テハ回向ス
ハモハ向セ
以テ回シモ
今ヲ以テモ
ハト云シモ
既ハ涙也
榮次郎ハ
所々ほい
吐れはと
なるしは
このは七
年一の度
こはと
言はすと
みはくは
とり夫大
民也大
蔵方藏と
か後藏と
より屢な
しとも此
りこにの
臺ある

りくおもひ煩ひ悲しみてくさくさのこをいふ也彌吉彰常はわか二十
五歳の時とんく橋にて生れてことし二十二歳なれともわれとはかはり
直にして温なる人故人々おもひ附われと書物の上にあ古人を評し或は經
義の論辨に争ふことはありけれ共其餘人と物争することなく十壹歳の時
四書五經の素讀の御吟味に出て反物三反給はり十三歳の時より佐藤捨藏
か熟行書をよみてあさく隣なる増山河内守か家來のもと行種田流
の鐘を遣ひ覺二十歳の時は免許に成馬は細川越中守家來かも或は諏訪
部へ日々行てことに好みたり弓はつとめて射しこともあれと好めるには
あらず文章は書しか詩は不好し也劔術居合弓は若年寄の御一覽に出て御
好になりし也わか奈良は旅立前に母上の前にて夜々の御物語のうらさ
ひしくなる故に酒のみて其時彌吉は相手させしに酒好まさる體にもみえ
さりしか度を過して一度も彼是いひしことはなく奈良は行ては半滴の酒
をも不飲わか旅の勞おもひて常に食し砂糖の入しものをも斷しと聞て

いたく驚て必酒はわか歸るまでは斷とも砂糖は給よかしなと書を以申遣
しけることありきあはれわれにまさりて謹愿なる質にて鎗とり太刀振て
一陣にすむことは予かれに減すへしとはおもはねとも二陣に進み芝居
ふみこたへて節を全することはかれに及へからす質は美なりけりと竊に
心中におもふことの多かりけるに世を早ふせしは歎のなかの歎にて
家の不幸にありけりされ共太郎もあり又も子をまうけし上は彰常か一生
のことたとへは生立たる稻の實を結びみのらすしてあたら風に折ふせし
かことくにて天にはつることほなき也われも彰常か疵とすることの多か
らぬに習ひて彼か常にわれを諫めしをも日々におもひ出て此上過少なか
らむことにせむと思ふなり兼不人情にしてとおもひけれと書をよめは
彼と辨論せしこともおもひ出馬乗らむとすれば彼かよく乗置たる馬也
けりと厩中間か人に向ひて彰常かことほこりにいふを思ひ出てこゝろ
の動にたえすけふ日記にかれかこと記すことの序に記す也前にもいふ通

所に其泣い其てひこ參
に其てひこ參大とを
たに江こひこ大とを
中て間りも江こ大とを
殿に便て入なそも若
か御番入なそも若
せおぬれうなれわ
動はかおぬれうなれわ
と云、かおぬれうなれわ
やらにと動はせ御か殿に中たな泣い其所
つせ云、かおぬれうなれわ
也たて酔ぬれうなれわ
る困後なはちなれわ

りくりことするも諸人か涙のたね何かせむとおもひしか又おもへは太郎
か父の顔をもよくしらねはとしさかりにならむ時の教のためとて餘の人
にみするものにもあらねは記す也彼か寫置し書其外文章に未焚捨草稿と
題せしありしか幸三郎のとり集置給ひ候へ後年に太郎のみせ候へしこの
日記孫等か志を立るの一ツに記する也相構へて兄弟の外餘人にみせ給ふ
へからすされともみな新右衛門幸三郎等か所知偽は露するさぬ也是も太
郎等か戒になれと記すは衣類笠等之類にいたる迄少も好みなしあまりよ
からぬと思ひて用人共に尋しにわれか用ゆるものに少もよきを用ゆるこ
とあるへからすと民藏は急度申付置たればかくすると同人かいふ也よつ
て常に單衣迄も木綿の紋附たるを着し冬もあまり足袋はきしことはなし
馬具甲冑は好し也彼か實の母は十二歳のとし故ありて離別し其後わか再
ひ迄妻迎へしに終に一度もかとく敷ものいひしことを不聞實母は市川
氏繼母高橋氏ははつかなる間にて大越氏には十四歳より二十二歳迄被養

て養母と成せしかことにあはれにおもひて所生のことくつゆかはらすこ
たひの病ひを聞て朝夕の飯に添ゆる物をたち朝夕に 神よ佛よとてねき
ことする體あまりとおもふ程なりきましてこの程のさまいかならむこれ
もまた彼か一美事のうちなるへきかと記す也○けふ所司代を御差圖下り
て良奈町引廻し之上磔同獄門より死罪に至るもの十人其餘輕罪のものも
あり 公の事且は罪人なれはいとふことはなけれと武士のつとめといふ
は如斯物也

○六日 しくれ よほとの水也此ほと家來等か歎にしつみてやせしすか
たなとみゆるをおもへは母上のいかにかと時雨ふりあられ雪ふるにつき
ても例の御風はめさすやといひくらす也茂兵衛はとし老たる身をもいと
はすうち續たるよとぎにて朝夕につかえし身なれはさそや歎つらむいか
にかとおもふ也茂兵衛か深切すぐれたりと弟等かもとよりしはくいひ
こすにわつらひたらいかにせむとこの頃はそれを苦勞にすること也○

しくれふるにつけて

この頃の空にこゝろやかよふらむはれましはしにふるしくれかな
おしみあへぬもみちをさそふ村しくれ定なきよを教良なる
同じ日に

つるきたち身にかふるまでおもひつる子にわかれしは文にかなしも
ありし日に好まさりしもよにつれて佛のみちの手向をそする
なくくも一枝折來て手向するしきみのつゆは袖にあまれり
こはおさとかなき人の位まうけて朝より夜ふくるまで菓物よ何よとて
ありし時好めるものことくく日々そのふれは江戸よりつれこせ
し女共もそのふる也日々御隠居様かたの法華經よみ給ふ御聲いとかな
し

手向らるゝ身に手向して常なきをうきよのつねとおもふかなしさ
なき人の好みしみちと駒のるも文みるもみな涙也けり

よしの葛すなは糖
し給てよ
なれ給よ
味ある給
記せるよ
思義に
ひて尋
かてし
此節を
れかお
は袖を
也子か
藁は子
と親な
なは親
食なれ
か葛も
ぬち
るち
也な

○彰常かありし時日ことのこと記せし消息のうち到我歸らさらむほとは
身のつゝしみとて酒をも露のます砂糖の味あるものまでをも絶しよし記
しありければいかに戒慎恐懼のことにこゝろつくして實學實踐をことゝ
するとて酒のまぬはよしやおもふまゝにまかせむとも砂糖あるものを絶
ことやあるなど言遣しけるか母人よりの日記にうせぬる前の日に母人よ
りすゝめ給ひければ養老酒てふものにてはつかに唇うるほせしよしなと
しるしあり其ころのさまおもひ出られてかなしみにたえずしてよめるう
た

盃をわれもとらしなうせし子か身のつゝしみをおもひやりつゝ
うちあはせおもへはかなし失にけるわか子は我に立まさるかな
母を思ひ泣かしたおもふにいかなれば袂にあまる涙なるらむ
きのふの雪を戯に

なをのこるから紅のもみち葉に神よもきかぬ花のしら雪

ふるさとの寒さやいかにみよしのに近きわたりはみ雪ふる也

○七日 しくれ けふは彰常かうせてより十四日ほとになれりとて俗禮によりて御役所に附たる寺より僧迎へむなといふことをおさとのいふ故にそこは彰常か所在し世のことくこゝろつくしにこゝろつくしをつくし給ふにあらすや然る事にかの人はいたく佛のみちを惡みて媒穢酒肉之闍黎てつなといひて常の温なるにはかはりていたくいひのゝしり人のこゝろにさはることをも厭さりしにこゝにて胡盧鳴哄のことはいかゝあらむといたく申せしかはさらはとて眞實の施餓鬼といふことになりてこゝのひとやつなかれて遠からす重き罪に行はれむといふものより長吏かもとにめしこめて置もの迄迄凡七八十人のものに茶飯たうへさすることゝしたりその添ものに魚物はあるましきことなれば油もて味つくるものにせむなと臣かいふ故にこは心得ぬことかな生たるもの宰して物せむはこの頃のことなれば其憚もありぬへし干たるかつほなと用ゆるに何のことかあら

むとてわか家にてまらうとまうけするこゝろに味にこゝろつくし以上の囚人共に飯振廻ひたりこは門に魚と鳥との肉いらさらむ牌出ツクし置なからいかにかといふものもあるめれとそは我等かもとの臣等か末々まてのなき人に對してすること也餓たる鬼にひとしきものに飯ものさせむにけふの一椀をもて世のなこりとするもあるに味なき油もて味つけしものなとあたふることやあるこは釋迦の再ひこのよに出たりともかならす我に左袒すへしとて世にいふ精進といふものにはせさりけり跡にて聞にぶりのから汁添て遣したりきらすの縁語牢内らうないのものを少し悦しむるの意あり江戸などの牢とは違ひ至るちる食のみ故實に施餓鬼の畫のことしと家來の語りき

○八日 くもり 罪人等かことを

秋の霜にちるもみちはの身はしらてけふをよろこふあはれ罪人
ときのふよみにけるは家來共ともはなしに囚人らうにんはくれし飯の味よしとてみ

なよこひてちや飯をもつそうといふものに二盃ツ、給舌をならしたるよしなれば也長吏か方にあは汁のみの魚をさるにあこし大勢の囚人の少も不平のなき様にして給させしと家來の咄也陳平か肉のはなしに似たりとて笑ひし

○九日 くもり 磔之もの貳人獄門の死罪等十人ありこゝにては穢多共か首をきるよしよく切と之事也穢多之悴十六歳に初あきりたりとよく切しよし也昏のほりを穢多共か持先に立なから其罪狀を町々にあ呼あるく也是は人を殺して盜せしもの或はおしこみ似せ金銀を拵たるなとよふよし囚人の賣物に似たりと聞く也磔は珍敷ことなればとて六七里外之武家其外見物に來るよつて昨夜は旅籠屋にきやか也と也こゝにては牢屋敷にては不切いづれも河原の御仕置場の連行て切る也○戦場にて女の首かともゆるは眼を開きてみるとするよし女は眼上にあかり白くなり居よしこは古く天正元和頃の人の傳也けふ女の死罪もありければ家來に申合遣

しためし見しに男子も女子もみな眼上にあかり白くなり居て眼中計にあらは不分といふ也古く傳ふことなれば偽はあらし江戸の石出帶刀の類にきゝたきもの也○戦場にて戦にのそみ小便なといたすは大剛之勇士ならては出來ぬといふにみな酒をのみものを食ひ途中なとに小便する體常にかはらすうち似銀を拵たるもの貳人はよほと男也しか牢内より申渡する場迄行うちしくれふりたるあと有ければ足つめたしとて草りをはき水たまりをよけて歩行しと也その貳人は同類故別牢なりしか申渡の場に行とき落合久々にて面會のことを述てけふ又二人つれ也よろしくたのむなといひてさて申渡濟之上壹人か酒のみて壹人にも酒すゝめければ常ならはのみもせめ此期に及ひて酒のみては未練にも似且給候て酒の力かりたるなといはれむはこゝろくるしとて少も不吞引廻になる道すからいせをんとを壹人か唱れば壹人か拍子をとるなと例のひかれものゝ小歌なるか多かりしか此二人は無言に被引行て御仕置場にて與力共の禮をのへ見

物の人々に向ひ甚敷心得違して天誅のかれかたし悪敷ことせむとおもは
ゝわれ等か手本也といひよく落つき居たり磔はしらに上ケかすかひを
手の懸候處濕瘡のところいたむよしなといひしと聞は全に血迷ひしには
あらしとみゆる也是等々もの共天正頃の人のことくにみゆれとも左には



あらすとてものかれぬと死を究極せし故に騒かぬ也孫子
か死地に投すれば專諸曹劌か勇あといひ吳子か名將をい
ふに士卒を破れたる船にのせ火宅のうちにいるゝことし
といひしを眞實にけふのはなしにおもひ知り天草の一揆
に攻あくみしもこのわけ也性本善也といふもこゝにみゆ
るかことし○けふ大西寺古錢の押かた來る是は天平神
護元年 稱徳天皇造立遊せし伽藍西塔土中南ヨリ出しは
金錢にて開基勝寶とあり北より出しは銅錢に萬年通寶
とあり金錢は目かた四匁八分あり開基勝寶といふは至而めつらしきもの



に而友野先生より押かた御好みに付取よせし也○彰常か歎きにておさと
か此節の體實にしるしかぬる體也病たらむことをおそれていろゝ異見
を加へわれは七十に近く母のましますに子のために瘦たりなといふこと
ありては不孝なればこゝろを男々敷したりわれを手本にせよとてけふよ
り袖もて面おほふことを少もせず例の早起にてやりのすこきなとする常
よりはましたりこの手段は少もひまなくこゝろを藝に置つもり也鍵四千
本及びき二千本をふりたりねるまで須叟の暇なし

○十日 晴 けふも六時に起る昨日之通六千ほと太刀等を遣ひたり五時
迄かゝるこの程病氣なしおさと市三郎等いひ聞かするはわか此ほと
體若見上の親族の喪中ならば突合の出來ぬ人親なくて長子を失しならば
不人情の人のうち入レ敷ふへしされ共我は養實の父母もましますなれば
老菜子かみとり子のさませしこゝろにてなけくことにも少も體をはいた
めしとてかくする也とかたり聞せたり○きのふ罪せらるゝ盜賊のうち

與力に向ひてわれ不包白狀せしかいまた残りたり脇差二本盗みて一本興福寺の鐘堂の下一本はさ保川のほとりにのこし置たりとり出し給へといつて切られたりけふ人をやりみし^{に腕カ}保川のは見不當鐘堂の下より備前重光の一尺七寸はかりの白さや出たり可成なるもの也あはれにおもひて身にかゝる迷ひのくものかつはれて昔にかへるひかりをみる

○十一日 晴 けふも太刀ふり槍遣ふこと例のことし○良齋か世話にて出來し日本の上は 神武にはしまり末は豊臣殿下の御世の權執玉ひしころの史の諸儒の評をあつめし范祖禹の唐鑑に似たる書十冊書肆より持來れりきのふの夕かたより見かゝりて今曉までに十冊不殘よみたり勿論あらゝとよみしなれば論するほどの事には不至日本の文學のひらけしを大に欽ひぬ是等もむかしはなきもの也

○十二日 晴 中數より四段上り六十四度の暖氣也この頃はさむくて秋より雪ふり氷はりしにけふの暖氣けしからす候

○十三日 晴 きのふより例の日蓮會ありしかし姿はかり也○水野若狹より朦中見舞の書狀來る過日の雪大坂もふりたり京都は三寸餘もつもりたりといひ越せし也めつらしき事也○好むみちなれと書をよみてこのほとはこゝろくるしきことあり傳習録は心のことを論せし書なれば腸を洗ひ候事もとよみ心を養ふこともあれとも彰常と議論せしケ所などおもひ出ては又腸もとの如くに成也○四日出之書狀六時頃に來る宅狀と聞ては彰常か法號など來しならむとみぬうちに胸つふれて先かなしされ共 母上之御機嫌何度と無理に書狀みかゝる 母上様不被爲變候と之事何より之恐悅也おさとは朝夕に法華經よむはさらにも不言みつから庭井戸に行てあかの手向をくみあけて日にはいくたひとなく回向する宅狀といふとはや袖を顔に掩しまゝに前後も不辨泣臥たりわれは武士なれば少もかはらす書狀をみかゝる 母上の御ふみを先奉拜見けれとこゝろくるしくて取かゝれす茂兵衛か狀日記より見かゝる同人かこゝろいかならむと

し老て身を困しめこゝろを勞して朝夕にかしつきしものはなき人の數に
いりてけにも前後もしられすこゝろ勞しため息はかりとのこと露のいつ
はりあらしとみるく涙に咽ふことにそしかし勝藏等か暇のよし下女等
か退散する母上并おしけか根本は行はいつれいまた程あらしとおもひし
に夫々の手廻しならにておもひしかことくにはあらしなとおもひてもな
ほ膽きえ胸ふさかりていふへくもあらぬ也彰常かなき人の數にいりても
若哉こゝろあらむにはいもと子かちりくにはつか十日にもならぬ内に
別れ行はいかかにおもふらむされはとて廿にもならぬ女七十にやゝ近く
ならせ給ふ母上にて上かかみことたるうちは三歳の男子はかりに而は新
右衛門か心を勞するも又むへ也けりなとこゝろ麻のことくみたれ鼎のこ
とく沸ていふすへしらすされ共かゝることこそこゝろ動かさぬ學そとお
もひかへして所々の文みてやゝ九つに近くなるまで起居たり彰常か智玄
院殿圓乘日明居士といふ法號をなくくよむものは予はかり也常に佛の

みちを笑ひしも一ひらの法號と成しかと斷腸いふはかりなし只々太郎か
すこやか成と母上の御機嫌かはらせらぬ脱アルカそ力草にありける民藏はしめみ
なく機嫌聞にいつるも袖にしくれかけぬはなし村田阿波佐藤捨藏石河
土佐より其外所々の悔狀一わたりよみて漸に母上の御狀新右衛門か日記
におそるくよみかゝる其餘のことはしるすに筆の執へきやうもあらず
勝藏男かまめやかにつとめ候よしは智玄院のしはく賞していひ越せし
にあはれや勝藏よと是も又一しほの涙也げり○四五日はかり前也けりよ
しや酒はのますとも肴にてもものしてうさ拂とて御隱居所より御呼被成
行て湯豆腐に而茶などのみ居たりそこく歸りて書物よみかゝりける
かさても江戸に而母上はかけくらき智光院か燈明のもとにおしけとも
涙なからにおはしますすらむとおもひ出こはいかにせむと頻にこゝろくる
しく成たりしか新右衛門かたこの四日より御逗留と成らせられたらば
新右衛門か朝夕の出勤其外にて宅にきやか成れば少しく御こゝろに忘ら

る、御使ともならむかと夫等をおもひめぐらせは一日も早くと新右衛門幸三郎等かはからひしも孝行の一つ也けりこゝの味は親子の場ならてはしれぬ也よくこそとおもひぬ○新右衛門より丙午のとしの災難ことに甚敷わか上り來りたり可愼と之事尤至極也きくものみるものにこゝろくるしきことある度に天より叱り給ふことゝおもひて愼しむ也され共御奉公のことは昔をあまり變不申候此頃つらくおもふに道理において踏違はぬをもとゝして人の彼是いふへしやいかにとおもひ煩ふことは更に構はぬ積也子産程の人さへに誰か子産を殺さむと申孔夫子の御弟子達も孔夫子をかれこれといひたり大聖大賢も世に議せらるゝ常なるにそれをいとひて却る是はいかゝなりとおもふをも因循苟且なといたし心に心苦しく御奉公せむよりはしくしらはしくしれこゝろはこゝよとわか心にはつかしからぬ様に心の及ふほとつとむる積也よく考てみれば二百俵あれば粥にはあまるへしと決心して正直に無理ならぬ様に御奉公心をおくつもり

也これはこのほとけのなげきに而卑諺のひかれものゝ小うたにはあらず廿日はかり前と覺たりいろ／＼のこと記せしものゝうちにわれ小田原侍従の御選に而御勘定吟味役と成はけしく勤けるを間宮林藏か深く案して申くれける答に遠くいにしへを引にも及はず名もしらぬ僧侶かつくれるといふ謠曲に佐野源左衛門常世か讒者のために薪もなきまでの貧に陥なからやせ馬やふれものゝくにて鎌倉殿の御ことのあらむには必一番に先かけて駈參らむとは申たり武士のこゝろはかくなるものなればこそとるにも足らむものにもしるしは置たらめ予いにしへの人には決而及かたしよつて近く常世かこゝろを學はむとおもへは少も御役を恐しくとはおもはずといふことを答たるを見出したり十年前には今より血氣壯に而勇氣や少はありけむかゝるこゝろもありけるを老境を越いたく衰にけると恥おもひければ大に心を引立つつもりにてかくはいふ也されはとて助長の病のなき様にかるはつみをはせず日々のこと只道理を踏様にと取行ふ也あ

らくとしたることは露せぬ積に付夫は御心やすく候へ

○十四日 晴 けふは文昭院様の御祥月なれ共忌中に付參拜なし○六時より起て太刀ふり槍遣ふこと例にかはらす

○十五日 晴 此ほと六十七度の暖氣也全のはるの如く遠山霞を見ゆる也若草山の麓武藏野といふに近きわたりより例年のことにて野火をつくる也是ははるのわらひの生るため也いせ物語に

むさしのはけふははやくそわかさのつまもこもれりわれもこもれりといひしはこゝなるへし

生駒山うち霞みみゆこれや今世にいふ冬の小春なるらむ

○けふは彰常の智玄院か三七日の逮夜なりとて用人より末々にいたるまで膳を遣す厩中間の榮次か臺所へ來りかなしかる也十一月の頃は御番入のありて酒よ魚よとて臣等に物給させむとおもひしかおもひもかけぬよみしの國へ行てけふ膳遣すもいとかなし

昔より有とは聞と便せぬよみちの國のわかれかなしも

○十六日 晴 けふは忌明なれば門の魚鳥留の札をも取いたりはやきことよとて又みなくなく也既に吉につく上はとて強而魚類にせしか御隠宅にゐもいつ方にゐも魚をみて泣也樂は樂也こゝろのたのしみを聲に發するといふと同じことゝ魚類みて落涙するもおかしきもの也子の位牌をみればかなしかなしは位牌にあるかあらぬ人の位牌をみればかなしからすかなしは位牌にはなきか喜しき時はみるものみな喜しかなしき時はみるものみな哀し物にはあらてみなこゝろにある也○おさとは五十日の間喫菜するといふ故にいろく言きかすれとも聞かす達といひしに強而はしを取たるか魚は腹中へ入いかに成らむとおもはるゝまで哀しといひて泣也よつてさらは以後は望にまかせむとておさとかきまかせにしたり餅あれば朝汁は入手向くる市三郎誠一等に物給させて靈前にあはなしさする體なとまことあらはれて全生けるにするかこゝくにみゆ

る也弱き女の病と成らむことを恐れてわれはいろ／＼と人笑するはなし
なと強ふする也おさとかこと所生の母なと決あかくはならしと子なき人
のいとゝあはれにおもふ也

○十七日 くもり夕晴 けふ忌明後初馬のる別當にことはをかけしに
ろく／＼挨拶なし顔あて目うるみたり昨夜の飲過かとおもひし也乗果て
わか馬場を引しのち市三郎に向ひてわかとのゝことおもひてけふはとの
さまに顔あはされすといひて泣たりとそ厩へ馬のしたくいひ遣したるに
誠一に向ひわかこゝろを察し且わかとのゝことをおもひ馬牽出すはつら
しとて又例のあの若殿はおれさへ七年のうちに一度も叱らぬ人よとて泣
しと也梁山伯の遺風ある奴也

○十八日 風雨 五日の雪京地は三寸はかりつもり雪中によほと雷に
あしは／＼地震せしといふ○治郎右衛門か方より越たりし古實者法隆寺
に行たりし時霜のあしたに單衣一にてさふらひなれば寺僧少しくおそれ

候心にあためしけるつもりにや奥の坐敷へ通し菓子など出しとかふする
うちに刀をみしに柄などは清からねと一點のさひなき心ありけなる刀也
ければこはあしき人にはあらしとて一夜止宿させ寶物なとみせ返せしよ
し東大寺にても同じさまのことありしと人のかたる也虚實はしらす武士
はたしか成刀さし度もの也身にそふと云冠辭に古くつゝる太刀といふに
ても思へ○中間久米七變死いたし候一件に付今朝七ツ時出立に而俊藏吟
味願書持參に而京都の使者として出る足輕陸田卯兵衛はあみをかけたる
駕籠にのせ京都町奉行の差出積夫々手當いたす當年はいかなればよから
ぬことにてわか生れてより例なきことのみあるにや禍福は繩のことく一
吉事に一悪事の附てくるものなれば天命のことゝはいひなからけしから
ぬこと也文化七午年は卯年なればしらすわか代となり文政五午年に 行
道院様うせ給ひ天保五午年に彰常か母をさと歸し大にこゝろくるしき
ことありことしの午は殊に甚しいかなる故にや

○十九日 晴又雨ふる 夕かた學問所之儒生來る是は奉行所に而は近習格之もの也よつて先はなし候へとてよる五半頃まではなし爲致めつらしく經義を論し古人を評して此ほとのおさ忘れしたり此ほと與は別而物さひしけなる燈明のあかりなとに付かゝること大によろし

○廿日 くもり又雨例之しくれ也 誠一郎うたの三十か四十もよみたるへし十四歳のうちに額をあけ度と之事也よむをみれば

旅宿時雨

はる／＼と都をたちて旅ねするころにわひし時雨ふる音

庭落葉

露霜にそめつくしたるもみちは庭にちりしく木枯の風

社頭雪

今朝もはやねきことかくる人や來し雪にあとある神のひろ前

○廿一日 晴 右之通誠一郎か歌よむにたれも誠一に不叶きのふ夜龍助

か方の當坐に誠一か夕落葉と云ことを

夕くれの落葉をわけてさと人のかへるころそわひしかりける

大人ましりに當座も出來る不思議なるもの也

○廿二日 くもり 市三郎誠一の歌をよむをうらやみよしこたしとの事に而一首咏したり所謂おもひを述るにて

親ひとの子を思ふ身を子はしらすわるさしなから親をうらめり

とよめりもとより市三郎の歌なれ共われよつて示して云人の性善なることよてもおもふへし市三郎か昏愚なるもころに親のかくするといふことはしるとみえたりよくこのころをおしひろめて親のころの程しりて怨みしのあしきをよくしりなは人たるに何のことかあらむよくこの歌のころ忘るへからすといひ示したり○庭のうちよりうら布目にて表にさゝなみかたある瓦の碎たる多く出る御役所昔より參る惣吉といふ大工に尋みしに御役所は已前寺に而其頃の瓦也今も太鼓の間といふ所はみ

な此瓦也三百年餘のもの也といふ也御役所の元來寺なりといふこと不分明案するに此御役所は元來大和納言秀長の住居をうつし今以玄關は檜皮ふきなれば其時の瓦なるへし寺といふは御役所にある石に蓮華梵字等の類至る多くふみ段井戸の邊などにもみゆ是は松永か多門山の城築し時市中の石塔をこほちて作たり其石垣取崩に成しの捨ありしを所々の堀なとに用しといふ也夫と中坊は必興福寺の衆徒筒井七流などの類なるへし古文書に中坊法眼などいふをみておもふ也右に二ツをも混せしなるへし○廿三日 晴 虚實はしらす去五月中濱松の城下の體を記せしものをみるに城受取渡に付 上使等混雜中に百姓共夥騒立所々打毀右に騒中に異國船沖にみえ候と之中泉を注進に水野井上懸川吉田等之諸大名出陣ふれに一同中泉最寄の出はり帆かけみえ不申候濱松に引取候處百姓騒動中紀伊殿御先代之御遺骸濱松に御泊に右に御迎御馳走中又々異國船沖に相見候と之注進に又々出陣其節は無間も濱松に歸り候處再ひ百

姓共大に騒立候處鄉村引渡前に付濱松城下町に旅宿之水野家來共見かけ取鎮候得共不取鎮手向等いたしよつて井上家來共加り一旦鎮り候處又候大に騒立城下町の參り不届之町人共を打潰候と之事に水野等之制止を聞不申よつて踏込候は打捨之積に水野の家來共みな其用意いたし候故さすかに踏込もいたし不申家來と百姓とにらみ合成候と申云まてのことにて其先は記しなしかなりしや山中には便なし此ことまことならば寺社奉行懸に新右衛門など出立等いたし候義は無之哉如何なと是も又一の苦勞也虚實はしれぬ下説なれ共みよしの近き山さとに閑居してもこゝろかゝり也

○廿四日 晴 この頃にてのさむさ也三十九度也長屋は厚氷也といへ共わか居間の手水鉢石故か氷らす池もいま氷なし

○廿五日 雨 けふは彰常か初月忌なれば白き強飯つくり與力同心より惣年寄町代等かもと迄遣す儒者醫者是も同しみな先格に臆中にも

のくれしもの共也はやくも月日のめぐり來にけりとおもひて
さるものゝはやくもあるかなふちころも脱し袂もまたほさぬ間に
○きのふ夜四時より雨ふりたりひとり書をよみ居たりしかけふのことな
とおもひ出ければこゝろ動きかちなりよつて書をやめて寢しにわか奈良
の御役宅にきほふことありて家來等はみな麻上下市三郎は烏帽子素袍と
着居たり表の居間の方をみれば彰常か清らに髪上下着て立居たり
あなやそこは失せしと聞しかわれはいまに夢うつゝとも定かねしそ
虚こと也やまこと也やよくわれにかたりてよとおもはず側に行手をと
てかたみに顔見かはせしに只さめくゝと泣居たりわれも頻にかなしくて
常にこそますら男よ親のまします身よなといふなれとおもひ亂れておさ
な子を抱かごとく抱ながら泣か姿人にはみせしと障子やり戸たてゝ聲を
はなちて泣しとおもひしか夢さめて枕うくかごとくに成居たり
よみ路より夢路にかよふみちあらはせめてよことにきつゝかたらへ

なとおもひつゝけしそのことおさとにかたればそはうらやまし夢にても
よしわれも今一目見たしとてなく也

○廿六日 晴 市三郎か四五日已來うたをはしめよる四過までも歌書と
首引夕くれも椽^ゑ出で歌書をよむ也誠一郎と違ひ古體をよむとみえたり
古體もならの宮より古く藤原の宮高市岡本宮のころの體なるへし萬葉集
を仙覺菖溪契冲等か評せしくらひにおさと予とうちよりよむ也それよ
り當人に承り而もまた真淵か解ほとにはわからす是も一大奇事もおさと
の直にしくるしむことおけいの歌に遙にまされり

○廿七日 晴 二十日あまりいかにしてもねられす四半に寢て八過まで
もねつかす或は八時前より目さめまことにねることを苦勞にする也よつ
て母上より御沙汰もあれはと存四過に至り書物をよみはて酒を少し壹合より壹滴
も多くのみ其勢ひにてよく寢附曉かたまで一ねいり也よつて日くれて近頃
めつらしくおさと茶をのみて江戸のはなしをなしておもふに飯田丁に

母上の爲入られたるうちはさそ御さみしくあらせられむとおもひて給物
 など少々にあもあれば却る胸ふさかりしか近頃は新右衛門か方に被爲入
 とおもへは少しは御心もかはり且はさひしきことはあらず御暮し可被成
 かとおもへはのむ茶ものとお通る也これのみは少しよろしよつておもへ
 は早く新右衛門方へ迎へまゐらせしは新右衛門幸三郎等か孝心よりよく
 こころの附しなりけりよくこそいたしたりとおさと共にいひて感心し
 且はならにて一ツのころやすめ也○彰常かよにありし時常にわれいひ
 聞せしは予墓を汝か建る時決る儒者にたのみ偽なる美事などを書記し死
 しての後まで偽を傳へ心ある人に笑ふこと有へからす川路左衛門尉源
 聖謨墓と題し若や孝子の心やむことを得すは短冊明細書をしるして遺言
 により平日の行跡をしるさすこの過多く志の立ぬ身を日々歎き居ながら
 いろ／＼の偽りて美事をかくは堅く無用と申置たれば記さすと書へしと
 いふ聞かせ置しかおもはず逆にわれ彰常の墓を立ることに成たりかれ不

此先例段々
 文年中鳴物
 停止中吟味
 物無之義相
 分銷後相
 止手懸
 近頃事懸
 屏けたる事
 やけたる事
 也

寺社方にあ
 る事とおも
 へすは
 しふす也

幸にして一代のうちに加らねは死後行跡等煙滅すること必とおもへは
 聖堂の御賞し等のこと等少も偽なきことを一くたり二くたりに佐藤捨藏
 に記しもらひなは彰常も地下に可歎とおもひて此頃の便に愛日樓の返事
 に申遣したり○日光の御隠居宮迂化鳴物停止之事申來る其觸を出す鳴物
 停止中公事吟味物不構する也よつて不審におもひ先格を吟味させみしに
 皆しかりよつてけふの御用日流にならす候手鎖其外之申渡もせよといふ
 故に繩懸手鎖等は停止中無用たるへし強ふと事ならば京都へ聞に遣し
 て可申渡とて式日立合はあれ共繩懸手鎖等は不相成旨之被仰出有之譯等
 申教遣したりかゝることに至ると異國のことし可歎
 ○廿八日 晴 寺院に助成のため本堂におゐて浮世はなし三味線太鼓
 入にあいたし度旨願出る當麻寺に開帳之節境内に曲馬輕業例を以聞
 届之積申出る寺院之本堂に三味線を爲引こと聞届との事にうち驚れて
 以後之ため書取にあかく先格を誤引るは合羽かことみの箱を同物に可心

得哉と認たり然ルにこゝにて與力一同みの箱をしらす家來に聞てさては御祭禮の時奉行を爲^{スル}持三ツ目の挾箱也とて會得せしよし也異國にくれかゝる珍事多し寺院の本堂に三味線のことよく聞に田舎寺に芝居は多く寺の本堂にゐるよしけしからぬ事也

○廿九日 曇 夕かたより直胤來る同人去年の大坂に旅宿當六月武鑑に而奈良に參り候義承知之由に而研師弟子其外召連來る直胤わか此ほと之愁傷にて體をいため候は不宜同人自得之按腹有之大坂之高僧豪商等數人全快におよひ既に鴻池善右衛門迄も彼か旅宿に來り療治を乞けるよし其門弟も出來候由よつて今日わか氣をつかれを直し吳可申と之事に而夜四時過か八時頃まで按腹いたす

○十一月朔日 くもり 今朝も六半時より按腹いたす少もつかれなき積なりしか直胤按腹してはらにこり有とてもみくれたり大にこりとれて今

日は快よし

○二日 しくれ けふも直胤滞留にておさとをも按腹いたす○直たね脇差をみする貞宗などよりよきかことしけしからぬ上達也同人正宗同位に老年迄には上達するといひしか果してよく出來うらやまし直たね宗保いづれも二百年來壹人也

○三日 晴 昨夜より大坂大火之由風聞直たね驚て大坂に歸る○直たねはなしに城州八瀬に元縁の秋元但馬守を神に祭りあといふ白石かいひし結界場之耳の裁許を難有おもひしより祠を建しなるへし公事裁斷はかくも人の次第により難有かる物なればうらみの府ともなる也可恐可戒○直たねいふ師匠正秀は出羽の水澤領赤生といふ所之農父に而秋元の家來川部義左衛門といふもの、養子に成八王子の郡司義英といふ農具鍛冶同前のもの、弟子になり工夫をこらし七十六歳に而没し大に鍛冶のみちを開たり石堂か子孫正宗か子孫迄をも尋ねて金錢を不惜古傳を穿鑿したれ共

正宗か子孫には書物なく石堂か方には古くよりつたへし藥燒之法をあまたの金子を贈りて傳へ受たり夫を正宗か子孫のかたに備前三郎國宗か傳ありしといふよしに書物に顯せしよし也おろしかねのことはいにしへよりありおろしかねならては鍊のかすとれすと云から國の書に刀を鑄物によしにするし鍊耶か劔を造るに鍊丸を沸して湯にする體ありといひしに今ある鑄物に決刃刀の出來へきわけ少もなし夫は必おろしかねなるへしといひしおもしろき解方也儒の解をはなれ工夫より出たる自得の說也直たね宗保かことき良工の一丁不了にても業の上より古書又は儒者の語類等を解す今にはしめぬ事也鍛冶カチとよむ鍛冶タンヤのよみあやまりなるへしといひしかカチといふはかねうちの中略にてタンヤの誤讀にあらず源順も和名抄の訓を誤れりといふ國學者の說あれ共いかあるへきいにしへのことを補ふとて真淵宣長等のしひこといふも多かれは必ししかたき也

○四日 晴 昨夜亥刻春日大宮の御祭禮濟也 勅使辨官の衆等貳人御出也是は與力共警固として出るはかり也龍介は内々願候を拜見として參る勅使黒袍にさし貫をめしくつをはき裾を引て階段をあかります體靜にしてくらゐあり御歸りは所々かゝり焚つらね御左右并御先を追ふものみなそうそくして白木の松火ふりてらし 勅使は紅のあつふきかけし御馬にて事しらぬあつま人には業平か源氏の君かとあやしまれ馬にのらむとせられし時從者か何か過ちせしを笑ひませしに鍊漿附たる齒に火うつろひてるりの玉をつらねしことしとまでに語りて感したりわれいふそは京家の人々の風俗也武士かかゝるみやひすかたせぬそよき也日本のいにしへは天子も御狩の時には皮もてつくれる衣めして猪鹿をかりし給ひたり今のむかはきその遺製也あまりに文になれば武はすたりて暴を制することならぬ也なと、荒々しくかたりしか戯に大成行燈のひかりに白き齒のうつりたらは汝かこときものは必天人とみあやまるへしとて笑ひし○御

用日公事多く其上入組たるもの等ありて評席ひる後より七ツ過までかゝる畢而直に乗馬せしに一刻らにて日くれたり

○五日 晴 昨夜少々時雨ふるけさみれはいこま嶺に雪みゆるさ保山三笠山はまたふらすさむさ四十度也これにてはならのさむさ恐るゝにたらず

○六日 晴 泉水よほと氷るしかし向ひまてうちわたしたるにはあらず○きのふは冬至也とて雑煮けさ其餘りのもちを汁に入給るあき常かことに好みしおもひ出て夫婦おもはず顔み合せしに涙ならぬはなし○夜四時十月廿二日出々御用狀來る以前は御用狀と聞はよろこはしかりけるかこのころは其こと聞は先おとろきて江戸には何もことなしやいかにといひ別條もあらぬよしを聞て長大息をしてさてよみかゝる也何かこと足らぬやうにおもふ也母上様の御狀を見奉りておさとは聲あけてなく也けにも所々のみてらに御まうてのおりからに飯田丁にいらせらるゝあるはい

また番町に御なれも被成ましくなと例の細やか心をつくる本生なればこまゝといふ也それを聞も又なみた也夫婦うちより御狀共をくりかえしみて九ツころに成うち臥しぬ

○七日 くもり けふは初而御役宅の堀廻りいたす與方同心共用人給人其外内供計召連るゝ一かゝへ二かゝへの松の並木土手の上にある土手は市中よりは三間も其餘も高し目下に見おろす也其外に巾五間はかりの堀あり大に埋りてよしあし小笹生たり門のわきは高サ土手とひとしく石かけに而そのねり堀には矢さま切てありいかさまにもいにしへ中坊か先祖こゝろして造りしものとみゆ周廻六町餘ありわれ生れかはらねはかゝる地面を持つことはならぬ也屋敷廻りの堀にはいにしへのまゝなるとおもふもみゆる也昔夏赫連勃々か統萬の城を築くに虎牢といふ所の土を蒸て築たりしか數百年の後金遼の時かその城にこもりしに轆轤を以突しかと城の土はつかに落るはかりにて石のことくに成たりといふを聞しか奈良

などの土もよく築たらはいつまでも保へし土塀に雨かゝりて少も土別條なき故みな土塀にする也○母上様々の御狀拜見少々御ふみの體あしく相見へ候此節故か又は御不快か或はきれ筆かなと、夫婦申あひ候御狀之趣太郎のこと其外夫々御尤に過日之文に御同意之こと申上候ひき定而御承知之御事と奉存候御養之趣夫々御と、き新右衛門幸三郎等かよく御世話申上藤左衛門夫婦等迄おちるはさらにもいはすみなく、孝行と之義何より之大悦に御座候○十月五日の雪めつらしく候京都も同日奈良も同日の雪也謝氏五雜俎に十五夜の月は千里晴雨を同しくす其外は隔りては晴雨のことなるよしを記しありしかと覺しされ共十五夜も三十里以上歟大山を一ツ隔つれば忽にちかふなり遠國にて覺ありしかるにめつらしき雪の同日なるも不思議也雪は豊年の瑞とはいへといかゝあるへき○藤左衛門の御切米に而入米有之七兩三分銀三匁六分六厘之御立替と之由不相變段々之御世話也○十三日は御拜領物目出度候目出度御酒とて 母上様の御歡御尤に御座

候○山本新十郎等新右衛門方之參り候由同人并飯島久須美村田等にはよろしく新右衛門を尙又御申通可被下候○土屋之冑明珍作宗保に不減出來候由安心いたす宗保は與風世話いたし遣し候處信家已來之上手に其後は宗保壹人之處昨年病死悴もとしわか故いかゝやと申居候處宜出來安心いたし候○御目付之問合挨拶一覽安心いたし申候何事も天に御座候間少も取拵不申候直にいたし候方と存候處御目付之挨拶に彌決心いたし申候孫出生届はいたし不申候は彌吉部屋住産穢届無之故に付丈夫届には不及義と存候間調候尙可申進候○幸三郎日記ふち柄目貫來る貞助目きゝに幸三郎様被遣候は、代料此位なるへし中々其代には買得かたしといふ其直段一匁も不違一同感心いたす○幸三郎の日記は九月十五日已來に付再び夫婦袖をぬらし申候茂兵衛勝藏之忠節なるおしけか貞操の行届たる感心いたす○幸三郎世話に書物等跡かた附行届たる事と存候○根本之文通之内に新右衛門幸三郎よく世話いたす體會我兄弟のことし